

藤並地区遺跡

—県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

二〇一二年三月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

藤並地区遺跡

—県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2012年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

藤並地区遺跡

—県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2012年3月

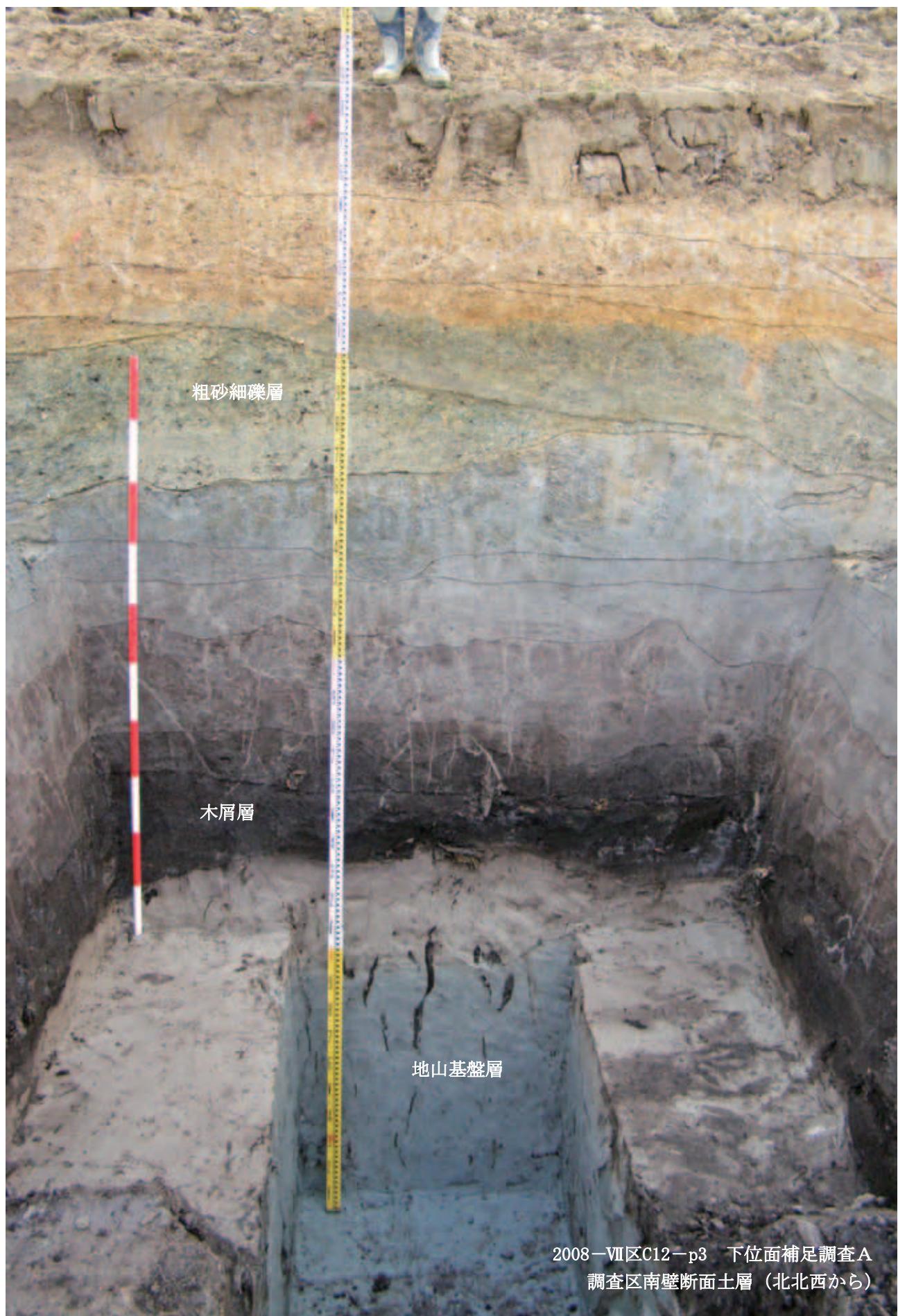
公益財団法人 和歌山県文化財センター



1 藤並地区遺跡 航空写真（1989年6月撮影）



2 航空写真（手前は、2007-III区：東から）



序

有田川町は和歌山県の中部に位置し、高野山に源を発する有田川が町域の中央部を西に蛇行しながら流れています。藤並地区遺跡は、この有田川の南側に位置しています。

藤並地区遺跡は、これまで海南湯浅道路及び湯浅御坊道路建設工事に伴う大規模な発掘調査によって、後期旧石器時代から中世にいたる数多くの遺構・遺物が発見されています。また、地元で良質な粘土が採掘できることから、遺跡内とその周辺部には奈良時代の須恵器や瓦を生産した窯跡が多く存在します。このような発掘調査事例の増加に伴い考古学的な手法による当該地域の歴史の解明が期待されているところです。

この度、当文化財センターでは、県道吉備金屋線道路改良工事に伴い平成18年度から同20年度にかけて発掘調査を実施しました。小規模な調査ではありましたが、後期旧石器時代の生活に関連する遺構・遺物を始め、奈良時代から室町時代にかけて断続的に続く人々の営みの痕跡を発見し、往時の当地域の景観の変遷の一端を明らかにすことができました。

平成23年度に出土遺物等整理作業を実施し、このたびその成果をまとめた発掘調査報告書を刊行することができました。本書が県民の皆様のみならず、広く一般の活用に資することができれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に厚くお礼申しあげます。

平成24年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 森 郁夫

例 言

- 1 本書は、和歌山県有田郡有田川町土生・明王寺・水尻に所在する藤並地区遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、県道吉備金屋線道路改良工事に先立つもので、平成18年度から同20年度に藤並地区遺跡の発掘調査業務を行い、同23年度に出土遺物等整理業務を実施した。
- 3 発掘調査は、和歌山県の委託を受けた財団法人和歌山文化財センターが、出土遺物等整理業務は、公益財団法人和歌山県文化財センターが和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。
- 4 現地調査及び調査報告書の刊行に際し、有田川町教育委員会をはじめ、関係機関および地元の方々からご助言・ご協力を得た。
- 5 本書は、各発掘調査・出土遺物等整理業務担当者と協議のうえ、土井が執筆・編集した。
- 6 図版に使用した遺構写真は、各調査担当者が撮影し、遺物写真は土井が撮影した。
- 7 発掘調査及び調査報告書の作成にあたっては、次の諸氏から多大なご協力・ご教示を賜った。

川口修実（有田川町教育委員会）、北野隆亮（財団法人和歌山市都市整備公社）、中原正光（元 海南市立海南高等学校）、中屋志津男（元 和歌山県立青陵高等学校）

- 8 発掘調査・出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。
- 9 本書に掲載した出土遺物は、各堆積遺物包含層・検出遺構の性格を推し量る必要のあるものを任意に抽出したもので、全ての出土遺物を網羅するものではない。
- 10 発掘調査・出土遺物等整理業務の調査組織は、以下に示すとおりである。

調 査 組 織

事 務 局	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成23年度
事 務 局 長	熊崎 訓自	松田長次郎専務理事	松田長次郎専務理事	田中 洋次 酒部 三依
事務局次長		山本 新平		山本 高照
管 理 課 長	西本 悅子	山本 新平	酒部 三依	山本 高照
埋蔵文化財課				
埋蔵文化財課長	渋谷 高秀	村田 弘	村田 弘	村田 弘
発掘調査業務担当				
文化財専門員	富加見泰彦	山本 高照		
埋蔵文化財課主任	土井 孝之	土井 孝之	土井 孝之	
技師				岩井 顕彦
出土遺物整理業務担当				土井 孝之

凡 例

- 1 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター 発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006年4月）に準拠して行った。
- 2 遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）に基づき、値はm単位で使用している。また、図面に示した北方位は、座標北を示す。
- 3 遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T.P.+）表示である。
- 4 発掘調査及び整理作業で使用した調査コードと調査地区は、以下のとおりである。

06-21・032 (2006年度-旧吉備町・藤並地区遺跡) I区～III区

07-21・032 (2007年度-旧吉備町・藤並地区遺跡) I区～III区

08-21・032 (2008年度-旧吉備町・藤並地区遺跡) I区～VII区

出土遺物・記録資料の整理に当って、全て上記の調査コードを使用している。

- 5 地区割の詳細については、本文の第II章第2節に記述する。
- 6 遺構番号と出土遺物登録番号は、当センター「発掘調査マニュアル（基礎編）」（2006年4月）に準拠して、各年度の調査区毎に算用数字の1からの通し番号とし、遺構番号には必要に応じて末尾に種類（遺構の性格）を付した。但し、2008-III区と2008-VII区は、同一遺構が繋がるため同一遺構番号を使用した場合もある。また、各調査区には当該年度の西暦年を冠して記述する。

例： 2006-I区52石列状遺構、2007-III区1溝、2008-III区1粘土採掘坑

- 7 本書の遺構・土層実測図は、特に縮尺を統一していないが、各自に明示している。図の表現で、遺構、任意掘削・掘り残し、搅乱でケバの表現を各々変えている。



- 8 本書に掲載した遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。但し、古代から中世の土器類に201から、旧石器・縄文時代の石器・弥生土器・その他の石器・石製品・錢貨に301から付したものは写真図版のみである。
- 9 遺物実測図の縮尺は、原則として土器・礫石器類は1/3、旧石器・打製石器類は3/4、それ以外の場合は必要に応じて縮尺を明示している。遺物写真の縮尺は、特に統一していない。
- 10 調査時の土層の色調・土壤の粒径区分及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修 小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（2000年版）を使用した。

土層名で2種類以上の記載のある場合は、前者が主体で、後者が副になることを示す。

本文目次

第Ⅰ章 藤並地区遺跡の歴史的環境	1
第1節 遺跡の地理的環境	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	1
第3節 調査の経緯と経過（既往の調査）	5
第Ⅱ章 発掘調査・出土遺物整理の方法	8
第1節 調査現場の記録作業	8
1 写真撮影作業	8
2 実測図作成作業	8
3 航空写真撮影・基準点測量	8
第2節 調査地の位置と地区割	9
第3節 出土遺物等資料の整理	12
1 出土遺物応急整理	12
2 出土遺物等整理業務	12
第Ⅲ章 各年度の調査成果と出土遺物	14
第1節 第1次調査（2006年度）	14
1 調査の概要	14
2 2006-I 区	14
3 2006-II 区	16
4 2006-III 区	18
5 小結	19
第2節 第2次調査（2007年度）	20
1 調査の概要	20
2 2007-I 区	20
3 2007-II 区	21
4 2007-III 区	22
5 小結	25
第3節 第3・4次調査（2008年度）	26
1 調査の概要	26
2 2008-I 区	27
3 2008-IV 区	28
4 2008-VI 区	28
5 2008-II 区	30
6 2008-V 区	31
7 2008-III 区	31
8 2008-VII 区	33
9 小結	35
第Ⅳ章 総括	37
調査遺構図面	38
出土遺物実測図	54
出土遺物一覧	62
報告書抄録	
写真図版遺構・遺物	

挿図目次

図1	有田川町西端部(旧吉備町)の地形と地質	1	図27	2007-III区 1溝断面土層図	43
図2	藤並地区遺跡と周辺の遺跡	2	図28	2007-III区 6土坑実測図	44
図3	既往の調査地点位置図	7	図29	2008-I区 調査遺構全体図	45
図4	調査範囲と地区割(100m区画)	10	図30	2008-I区 基本土層 調査区北東壁断面土層	45
図5	調査位置と区画割(4m区画)	11	図31	2008-IV区 調査遺構全体図	46
図6	2006-I・II区 調査遺構全体図	38	図32	2008-IV区 基本土層 調査区北壁断面土層	46
図7	2006-II区 基本土層 調査区北壁断面土層	38	図33	2008-VI区 調査遺構全体図	47
図8	2006-II区 基本土層 調査区南壁断面土層	38	図34	2008-VI区 基本土層 調査区南東壁断面土層	47
図9	2006-I区 51谷状落ちの基本土層 土層畔断面土層	38	図35	2008-VI区 11土坑実測図	47
図10	2006-I区 52石列状遺構実測図	39	図36	2008-VI区 1溝断面土層図	48
図11	2006-I区 52石列状遺構断面土層図	39	図37	2008-II区 調査遺構全体図	49
図12	2006-I区 53粘土採掘土坑実測図	39	図38	2008-II区 第3層系包含層下面遺構	49
図13	2006-III区 調査遺構全体図	40	図39	2008-II区 基本土層 調査区北壁断面土層	49
図14	2006-III区 基本土層 調査区東壁断面土層	40	図40	2008-II区 掘立柱建物1実測図	50
図15	2006-III区 各土坑実測図	40	図41	2008-III・VII区上位面 調査遺構全体図	51・52
図16	2007-I区 調査遺構全体図	41	図42	2008-VII区 基本土層 調査区南壁断面土層	51・52
図17	2007-I区 基本土層 調査区北壁断面土層	41	図43	2008-III区 4土坑実測図	51・52
図18	2007-I区 23土坑調査区西壁断面土層	41	図45	2008-VII区下位面 101土坑実測図	51・52
図19	2007-I区 13土坑実測図	41	図45	2008-VII区下位面 調査遺構全体図	53
図20	2007-II区 調査遺構全体図	42	図46	出土遺物実測図1	54
図21	2007-II区 基本土層 調査区西壁断面土層	42	図47	出土遺物実測図2	55
図22	2007-II区 5土坑実測図	42	図48	出土遺物実測図3	56
図23	2007-II区 11土坑実測図	42	図49	出土遺物実測図4	57
図24	2007-II区 18噴砂と中世小溝の関係 調査区西壁断面土層	42	図50	出土遺物実測図5	58
図25	2007-III区 調査遺構全体図	43	図51	出土遺物実測図6	59
図26	2007-III区 基本土層 調査区南西壁断面土層	43			

表目次

表1	藤並地区遺跡と周辺の遺跡地名一覧	3	表3	各地区出土遺物数量	60
表2	発掘調査・出土遺物等整理業務工程表	9	表4	各地区出土遺物接合関係一覧	61

写真目次

写真1	土生池遺跡出土ナイフ形石器	4	写真16	2008-VII区下位面 粗砂細礫からの旧石器遺物 の抽出(応急整理)	12
写真2	田殿尾中遺跡出土弥生土器	4	写真17	出土遺物(土器)への登録コード注記	13
写真3	旧吉備中学校校庭遺跡第1次調査 全景(北から)	4	写真18	遺物の接合	13
写真4	旧吉備中学校校庭遺跡第4次調査 堅穴建物20・22(南西から)	4	写真19	遺物充填材による補強・復元	13
写真5	天満1号墳(泣沢女の古墳)石室(南から)	5	写真20	出土遺物の実測図作成	13
写真6	天満I遺跡中世墓出土和鏡	5	写真21	遺物実測図トレース作成	13
写真7	藤並地区遺跡1991年度M地区出土旧石器	5	写真22	実測遺物台帳登録データ入力	13
写真8	藤並地区遺跡1991年度J地区検出 掘立柱建物	6	写真23	2006-I区E11-f22 調査区東壁断面土層 (西から)	15
写真9	2006-I区 調査遺構全景と湯浅御坊道路 (北北東上空から)	6	写真24	2006-I区E11-f23 53粘土採掘 土坑掘削状況(北西から)	15
写真10	2007-III区 1溝掘削状況(南東から)	6	写真25	2006-I区 52石列状遺構掘削状況 (北北西から)	16
写真11	有田川町2007年度調査出土香炉蓋	7	写真26	2006-I区 E11-h-i22 51谷状落ち 土壤採取状況(北東から)	16
写真12	2008-II区東側 遺構位置全体図作成 (北寄り西から)	8	写真27	2006-II区E12-n9 調査区南壁断面土層 (北から)	17
写真13	2008-III区 航空写真撮影	8	写真28	2006-II区E12-15 18土坑南西-北東断面土層(南東から)	17
写真14	出土遺物台帳登録(応急整理)	12	写真29	2006-III区北半E13-m23 調査区東壁断面土層	
写真15	2008-III区下位面 粗砂細礫洗浄作業 (応急整理)	12			

(西から).....	18	写真41 2007-III区C11-k25・C12-k1 4土坑 (北から).....	24
写真30 2006-III区北半E14-m1 11土坑断面土 (南東から).....	18	写真42 2007-III区 6土坑出土の石器剥片	25
写真31 2006-III区南半 小溝群(北東から)	19	写真43 2008-I区西側西 水田区画(南西から)	27
写真32 2007-I区北半E13-x・y1 調査区北壁断面土層(南から).....	20	写真44 2008-IV区F12-d6 調査区北壁断面土層 (南南東から).....	28
写真33 2007-I区南半E13-y7 1土坑調査区西壁 断面土層(東南東から).....	21	写真45 2008-IV区E12-x7・F12-a7 小溝群 (西から).....	28
写真34 2007-II区E13-o6 5土坑検出状況 (北北東から).....	22	写真46 2008-VI区南西半F12-p15 1溝調査区南東壁断面土層(西から).....	29
写真35 2007-II区E13-p7 18噴砂調査区西壁 断面土層(東から).....	22	写真47 2008-II区東側E12-n・m19・20 10遺構 (北から).....	31
写真36 2007-III区 調査区南西壁断面土層 (南東から).....	23	写真48 2008-III区C11-n24・25 4土坑検出状況 (北から).....	32
写真37 2007-III区C12-g1 2井戸東西断面土層 (南から).....	23	写真49 2008-III区 1-3粘土採掘坑(東北東から)	32
写真38 2007-III区 1溝-5井戸間の断面土層 (東南東から).....	23	写真50 2008-VII区下位面C12-r3・4 101土坑 検出状況(南寄り西から).....	34
写真39 2007-III区 1溝遺物出土状況(南南東から)	24	写真51 県文化遺産課確認調査30トレンチ調査区 南壁断面土層(北から).....	35
写真40 2007-III区C11-k25・C12-k1 6土坑 (北東から).....	24	写真52 2008-IV区 道路工事掘削部分 西壁断面土層(東から).....	35

写真図版目次

- 写真図版1 2006-I区 検出遺構
- 1 2006-I区 調査遺構全景(北東上空から)
 - 2 2006-I区 調査遺構全景(南西から)
 - 3 2006-I区 粘土採掘土坑群と51谷状落ち肩部(東北東から)
- 写真図版2 2006-I区 検出遺構
- 1 2006-I区 51谷状落ち断面土層全景(東南東から)
 - 2 2006-I区 51谷状落ち北半部断面土層細部(東南東から)
 - 3 2006-I区E11-h・i22
51谷状落ち断面土層細部(北東から)
- 写真図版3 2006-I区 検出遺構
- 1 2006-I区 52石列状遺構(南南東から)
 - 2 2006-I区E11-g19
52石列状遺構の断面状況(南南東から)
 - 3 2006-I区E11-g19
52石列状遺構に關係する遺物出土状況(西南西から)
- 写真図版4 2006-I区 検出遺構
- 1 2006-I区E11-f23 粘土採掘土坑群の状況(東北東から)
 - 2 2006-I区E11-f23
53粘土採掘土坑東西断面土層(南南東から)
 - 3 2006-I区E11-h25
調査区南東壁第6層系踏み込み遺構の遺物出土状況(北西から)
- 写真図版5 2006-II区 検出遺構
- 1 2006-II区 調査遺構全景(真上から:右側が北)
 - 2 2006-II区 調査遺構全景(北東から)
 - 3 2006-II区 土坑群の掘削状況(西南西から)
- 写真図版6 2006-II区 検出遺構
- 1 2006-II区E12-o5・6 6土坑東西断面土層(南から)
 - 2 2006-II区E12-i1 調査区北壁断面土層細部(南から)
 - 3 2006-II区E12-q5 鉄砲弾出土状況細部(南南西から)
- 写真図版7 2006-III区 検出遺構
- 1 2006-III区北半 調査遺構全景(真上から:右側が北)
 - 2 2006-III区北半 調査遺構全景(南から)
 - 3 2006-III区北半 土坑群掘削状況(南東から)
- 写真図版8 2006-III区 検出遺構
- 1 2006-III区南半 調査遺構全景(真上から:左側が北)
 - 2 2006-III区南半 調査遺構検出状況:小溝群(北北東から)
 - 3 2006-III区南半 地震による液状化の砂脈(北北西から)
- 写真図版9 2007-I区 検出遺構
- 1 2007-I区北半 調査遺構全景(真上から:右側が北)
 - 2 2007-I区北半 調査遺構全景(南から)
 - 3 2007-I区北半E13-x・y・6・7 土坑群(東から)
- 写真図版10 2007-I区 検出遺構
- 1 2007-I区北半E13-y7
1土坑調査区西壁断面土層(東から)
 - 2 2007-I区北半E13-x・y1 調査区北壁断面土層(南から)
 - 3 2007-I区南半 調査遺構全景(北上空から)
- 写真図版11 2007-I区 検出遺構
- 1 2007-I区南半 調査遺構全景(南から)
 - 2 2007-I区南半E13-x9・10 13土坑東西断面土層(北から)
 - 3 2007-I区南半E13-y7
23土坑断面土層:調査区西壁(東から)
- 写真図版12 2007-II区 検出遺構
- 1 2007-II区 調査遺構全景(北上空から)
 - 2 2007-II区 調査遺構全景(南から)
 - 3 2007-II区 土坑群東西断面土層(北北東から)
- 写真図版13 2007-II区 検出遺構
- 1 2007-II区E13-o6 5土坑東西断面土層(北北東から)
 - 2 2007-II区E13-o・p6・7
19・18噴砂の砂脈検出状況(北東から)
 - 3 2007-II区E13-p7
18噴砂と中世小溝の関係細部:調査区西壁断面土層(東から)
- 写真図版14 2007-III区 検出遺構
- 1 2007-III区 調査遺構全景(真上から:下側が北)
 - 2 2007-III区 調査遺構全景(東から)
 - 3 2007-III区 1溝完掘状況と6土坑検出状況(北西から)
- 写真図版15 2007-III区 検出遺構
- 1 2007-III区C12-j1・2 1溝断面土層(北西から)

- 2 2007-III区C12-g1
柱穴群断面土層:調査区北東壁(西南西から)
- 3 2007-III区C11-k25
5 井戸掘削状況と調査区北壁断面土層(南東から)
- 写真図版16 2007-III区 検出遺構
1 2007-III区C11-k25・C12-k1
6 土坑掘削状況(北北東から)
2 2007-III区C11-k25・C12-k1
6 土坑断面土層(北北東から)
3 2007-III区C12-j1 3 土坑(東から)
4 2007-III区C12-j1 3 土坑南北断面土層(東から)
- 写真図版17 2008-I・IV区 検出遺構
1 2008-I区・IV区
調査遺構全景デジタルモザイク(真上から:上側が北)
2 2008-I区西側西 水田区画検出状況(南南西から)
3 2008-I区西側東 水田踏み込み検出状況(東から)
- 写真図版18 2008-I区 検出遺構
1 2008-I区東側東 水田踏み込み検出状況(東北東から)
2 2008-I区東側東F12-e7 水田踏み込み検出状況細部(東北東から)
3 2008-I区西側東 調査区北東壁断面土層細部(南西から)
- 写真図版19 2008-IV区 検出遺構
1 2008-IV区 調査遺構全景(真上から:上側が北)
2 2008-IV区 水田面掘下げ状況(西北西から)
3 2008-IV区東側 調査遺構全景(北から)
- 写真図版20 2008-VI区 検出遺構
1 2008-VI区南西半・南西端 調査遺構全景(北上空から)
2 2008-VI区南西半 1溝全景(西南西から)
3 2008-VI区南西端 調査遺構全景(南南西から)
- 写真図版21 2008-VI区 検出遺構
1 2008-VI区北東半 遺構検出状況全景(南西から)
2 2008-VI区北東半F12-o13
11土坑掘削状況・南北断面土層(北寄り西から)
3 2008-VI区北東半F12-n13・o14 調査区南東壁断面土層(北西から)
- 写真図版22 2008-II区 検出遺構
1 2008-II区東側 調査遺構全景(北から)
2 2008-II区東側E12-m19周辺 第3層下面遺構(西から)
3 2008-II区東側E12-m19
包含層第3層内遺物出土状況(北から)
- 写真図版23 2008-II区 検出遺構
1 2008-II区西側 調査遺構全景(東上空から:右側が北)
2 2008-II区西側 調査遺構全景(北から)
3 2008-II区西側E12-o-p17~19 掘立柱建物1(東から)
- 写真図版24 2008-II区 検出遺構
1 2008-II区西側E12-o17 掘立柱建物1
33柱穴南北断面土層(西から)
2 2008-II区西側E12-o-p22 21土坑(南南西から)
3 2008-II区西側E12-q22・23
補足調査 調査区西壁断面土層(東から)
- 写真図版25 2008-III区 検出遺構
1 2008-III区 調査遺構全景(真上から:手前右下が北)
2 2008-III区 調査遺構全景(西南西から)
3 2008-III区 調査遺構全景(東北東から)
- 写真図版26 2008-III区 検出遺構
1 2008-III区東半 土坑群・落ち遺構全景(西南西から)
2 2008-III区C12-t1 10土坑(東北東から)
3 2008-III区C12-s-t2 補足調査
21土坑調査区南壁断面土層(北北西から)
- 写真図版27 2008-VII区上位面 検出遺構
1 2008-VII区上位面 調査遺構全景(東北東から)
2 2008-VII区上位面東半部 土坑群・落ち遺構全景(西から)
3 2008-VII区上位面東半部 調査遺構全景(西南西から)
- 写真図版28 2008-VII区上位面 検出遺構
1 2008-VII区上位面
8落ち・8落ち埋土掘削後の遺構(東北東から)
2 2008-VII区上位面C12-s2・3周辺
20・49・50土坑・51柱穴(北北西から)
3 2008-VII区上位面C12-o-p1 56・57・58土坑(北北西から)
- 写真図版29 2008-VII区下位面 検出遺構
1 2008-VII区下位面
調査遺構全景(真上から:手前が北北西)
2 2008-VII区下位面 粗砂細礫層下面遺構全景(東北東から)
3 2008-VII区下位面C12-r3・4 101土坑(南寄り西から)
- 写真図版30 2008-VII区下位面 検出遺構
1 2008-VII区下位面 調査区北壁断面土層(南南西から)
2 2008-VII区下位面 調査区南壁断面土層
調査区東端から10~20m(西北西から)
3 2008-VII区下位面 調査区南壁断面土層
調査区東端から20~35m(西北西から)
- 写真図版31 2008-VII区下位面 補足調査
1 2008-VII区下位面C12-p3 補足調査A
調査区南壁断面土層(北北西から)
2 2008-VII区下位面C12-s-t4 補足調査B
調査区南壁断面土層(北北西から)
- 写真図版32 出土遺物 1
- 写真図版33 出土遺物 2
- 写真図版34 出土遺物 3
- 写真図版35 出土遺物 4
- 写真図版36 出土遺物 5
- 写真図版37 出土遺物 6
- 写真図版38 出土遺物 7
- 写真図版39 出土遺物 8
- 写真図版40 出土遺物 9

第Ⅰ章 藤並地区遺跡の歴史的環境

第1節 遺跡の地理的環境

藤並地区遺跡（図2の32）は、和歌山県有田郡有田川町（旧吉備町・旧金屋町・旧清水町）土生・明王寺・水尻に所在し、有田川河口から約10km遡った左岸に位置する。有田川町の内、旧吉備町域は、紀の川下流域を中心に広がる和歌山市・海南市の南に位置し、これらとは長嶺山脈を介して接しており、有田川流域ではもっとも安定した平野部が広がる地域である。

旧吉備町付近の地形は、有田川右岸では片岩を主体とする三波川変成帯からなる山地地形が河川近くまで迫ってきており、河成段丘も発達しない。一方、藤並地区遺跡が所在する有田川左岸は、中世代白亜紀の地層からなる緩やかな傾斜を示す山地地形が広がり、その間に小河川により形成された小規模な開析谷が多く存在する。さらに、山地北斜面では浸食作用による河成段丘面が形成され、その下位には堆積作用による氾濫原および沖積平野部が発達する。旧石器時代には山地地形上に、縄文時代には段丘上に、弥生時代以降には主として沖積平野部と段丘上に各々の時代の集落遺跡が展開している。

藤並地区遺跡は沖積平野部の南西端に立地しつつも、雲雀山からの派生丘陵や土生山・水晶山・神楽山などの標高60～130mほどの山地地形に囲まれている。そのため、標高20m付近に位置するにも関わらず、盆地状の湿地に近い条件下に位置している。

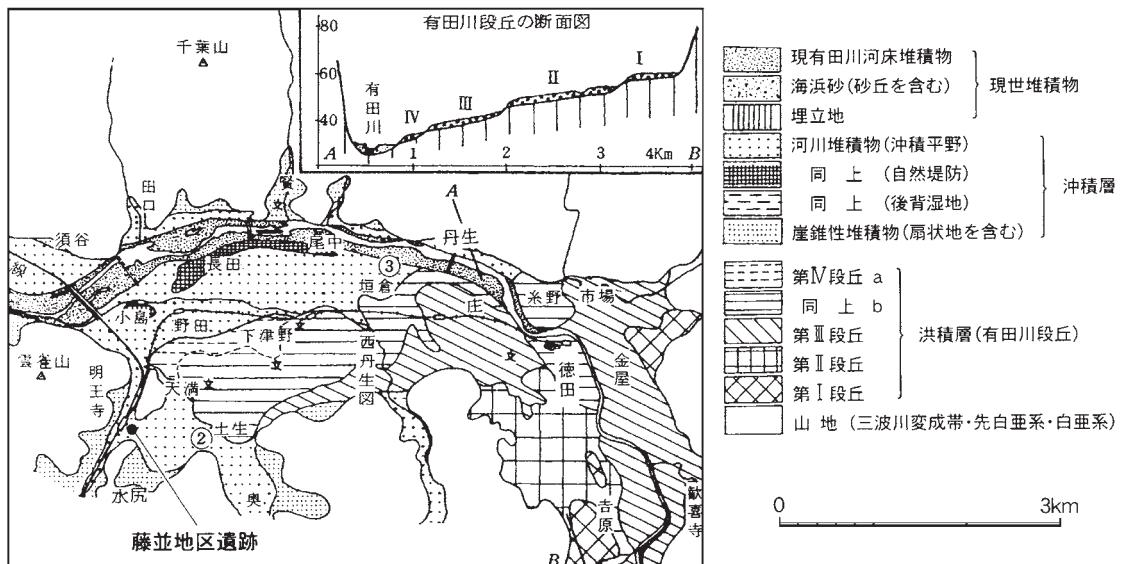


図1 有田川町西端部（旧吉備町域）の地形と地質

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

藤並地区遺跡（図2の32、以下、「図2」を省略）が所在する有田川下流域は、旧石器時代の遺跡を皮切りに遺跡の分布が比較的密に認められる地域である。付近には沖積平野と河成段丘が発達し、有田川流域では最も広い平野が広がっており、この平野部を基盤に旧石器時代から中・近世に至る各時代の遺跡が点在する。

旧石器時代の遺跡は多く、縦長剥片を創出するための頁岩製石核を出土した野田地区遺跡（38）、サヌ



図2 藤並地区遺跡と周辺の遺跡 (1 : 25,000)

埋蔵文化財包蔵地

表1 藤並地区遺跡と周辺の遺跡地名一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	立地	摘要
有田川町(旧吉備町域)						
1	田殿廃寺跡	田口	寺院跡	奈良	丘陵裾	瓦
2	大谷古墳	大谷	古墳	古墳	丘陵裾	須恵器
3	大谷2号墳	大谷	古墳	古墳	丘陵裾	円墳、鉄刀
4	築那印跡	大谷	寺院跡	平安～室町	扇状地	土師器、須恵器、瓦器、仏像瓦、文字瓦、石塔
5	賢遺跡	賢	散布地	奈良	扇状地	
6	夏瀬の森遺跡	出	散布地	弥生	山麓	弥生土器
7	夏瀬の森祭祀遺跡	出	祭祀跡	弥生	丘陵頂	神奈備形の山岩、弥生土器
8	最勝寺跡	出	寺院跡	平安～室町	丘陵	瓦、瓦器、石塔
10	田殿尾中遺跡	尾中	集落跡	弥生～室町	沖積平野	堅穴建物、環濠、水田跡、弥生土器、石器、瓦器
11	旧吉備中学校校庭遺跡	下津野	集落跡	弥生～鎌倉	河岸段丘	堅穴建物、掘立柱建物、鋸造遺構、弥生土器、石器、小型青銅鏡、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器
12	野田の宝篋印塔	野田	石塔	南北朝	河岸段丘	貞和二年銘、県史跡
13	觀音寺跡	野田	寺院跡	平安～室町	河岸段丘	布目瓦、瓦器
14	藤並遺跡	天満	散布地	古墳	河岸段丘	堅穴建物、掘立柱建物、柵列、土師器、須恵器
15	天満古墳群	天満	古墳群	古墳	河岸段丘	
15の-1	天満1号墳 (泣沢女の古墳)	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳、横穴式石室、須恵器、耳環、刀子、ガラス玉、跨帶、人骨、県史跡
15の-2	天満2号墳	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳
15の-3	天満3号墳	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳
16	天満I遺跡	天満	集落跡	縄文～室町	河岸段丘	堅穴建物、掘立柱建物、土坑墓、繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、和鏡(花文散双鳥鏡)、椀状鉄製品、刀子
17	天満II遺跡	天満	散布地	古墳、鎌倉	河岸段丘	土師器、瓦器
18	宗祇法師屋敷跡	下津野	旧宅		河岸段丘	碑、古井戸、県史跡
19	藤並城跡	下津野	城跡	鎌倉～室町	河岸段丘	濠、土塁
20	石ヶ谷遺跡	西丹生岡	集落跡	古墳～室町	丘陵裾	掘立柱建物、井戸、土坑墓、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦
21	羽釜古窯跡	土生	窯跡	中世	河岸段丘	瓦器
22	城山窯跡群	土生	窯跡	古墳～平安	丘陵裾	窯跡3基、須恵器、瓦
23	地藏山窯跡群	土生	窯跡	古墳～平安	丘陵裾	窯跡2基、須恵器、瓦(奈良～平安時代)
24	風呂の谷窯跡群	土生	窯跡	奈良～平安	丘陵裾	窯跡4基、須恵器、瓦(奈良時代)
25	土生池遺跡	土生	散布地	旧石器、平安	山麓	ナイフ形石器、削器、搔器、石核、土師器、黒色土器
26	長楽寺跡	植野	寺院跡	平安～鎌倉	山麓	礎石建物、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、錢貨
27	八幡神社板碑	奥	碑	室町	丘陵裾	
28	八幡神社宝篋印塔	奥	石塔	室町	丘陵裾	
29	地蔵山遺跡	土生	散布地	平安	河岸段丘	
30	奥の宝塔及び宝篋印塔	奥	石塔	南北朝	河岸段丘	宝塔(文中三年銘)、宝篋印塔(文中二年銘)、県史跡
31	奥I遺跡	奥	散布地	平安	丘陵裾	瓦器
32	藤並地区遺跡	土生 明王寺 水尻	散布地	旧石器～鎌倉	河岸段丘	掘立柱建物、土坑墓群、ナイフ形石器、有舌尖頭器、土師器、須恵器、陶棺、布目瓦、円面硯、瓦器、国産陶器、山茶椀、輸入陶磁器、板碑
33	岩室城跡	田口	城跡	中世	山頂	湯浅氏・畠山氏の城、天正13年落城、二の丸・三の丸の平坦部が残存
35	奥II遺跡	奥	出土地	縄文	丘陵	有舌尖頭器
36	土生池南岸遺跡	土生	出土地	古墳	丘陵	須恵器甕
37	土生池須恵器窯跡	土生	窯跡	奈良	丘陵	須恵器(壺、壺蓋、高壺、壺、甕、水煙形製品)
38	野田地区遺跡	野田	寺院跡ほか	旧石器～中世	河岸段丘、氾濫原	堅穴建物、掘立柱建物、宝篋印塔、大溝、石核、繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、瓦器、建築材、梯子、木器、柿絆、下駄など
39	湯浅城跡	熊井	城跡	中世	丘陵端	土塁、濠、康治二年湯浅宗重築城
40	小島遺跡	小島	散布地	弥生、室町	丘陵	弥生土器、石塔
42	崎山屋敷跡	井口	館跡	鎌倉	丘陵	
43	勝真山館跡	賢・船坂	館跡	中世	山頂	
有田市						
17	岩室城跡	宮原町須谷	城跡	中世	山頂	有田川町33に同じ
18	岩室遺跡	宮原町須谷	散布地	弥生	丘陵	弥生土器
22	糸我地蔵堂遺跡	糸我町中番	散布地	弥生	丘陵裾	弥生土器
39	雲雀山遺跡	糸我町中番	散布地	弥生	山腹	弥生土器
46	城跡	地蔵堂	城跡	中世	丘陵	
湯浅町						
5	湯浅城跡	青木	城跡	中世	丘陵	土塁、濠、康治二年湯浅宗重築城
6	青木I遺跡	青木	散布地	室町	河岸段丘	瓦器
7	青木II遺跡	青木	散布地	弥生	河岸段丘	弥生土器、土師器
8	青木III遺跡	青木	散布地	古墳	河岸段丘	須恵器(長頸壺)
10	山田北山遺跡	山田	散布地	室町	丘陵裾	鉄槍、瓦器、明鏡
11	山田廢寺	山田	寺院跡	平安	丘陵裾	蓮華文軒丸瓦
12	山田堂山遺跡	山田	散布地	弥生	丘陵裾	弥生土器
15	青木火葬墓	青木	墳墓	奈良	山腹	藏骨器、和同開珎、帶金具、木炭
17	広保山城跡	吉川	城跡	平安	山頂	曲輪、空濠、湯浅宗重築城
21	帝の跡	山田	館跡	中世	河岸段丘	

遺跡内での調査履歴有り

和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地地名表』
2007年3月31日発行を一部改変・補筆

カイト製のナイフ形石器を出土した鷹巣池遺跡（旧吉備町徳田）、また、これまでの発掘調査で土生池遺跡（25）・藤並地区遺跡からはナイフ形石器（写真1）や搔器・削器などが多数発見されている。その他、藤並地区遺跡からは、有舌尖頭器・石鏃・矢柄研磨器や縄文時代草創期の土器片が出土している。

縄文時代は、陸地側に近い島嶼や河成段丘上に分布し、前期末から晩期までの時期の縄文土器が確認される。主要な遺跡としては、中期初頭の標識遺跡である鷹島遺跡（有田郡広川町）や地ノ島遺跡（有田市初島町）などがあげられ、付近には中期の土器片と石棒が発見された野田地区遺跡、後期中葉の北白川上層式併行の土器や耳栓などが発見された糸野遺跡（旧金屋町糸野）などが所在する。

弥生時代には、平野部に環濠集落である田殿尾中遺跡（10）（写真2）が存在する。数次にわたる調査により、弥生時代中期には拠点的な集落であったことが明らかになっている。集落は中期中葉に形成され始め、後期前半の空白ののち後期後半から古墳時代初頭まで展開する。田殿尾中遺跡に空白が認められる後期前半には、当遺跡から有田川河口にかけての丘陵上に遺物が散布しており、野井奥の谷遺跡（有田市千田）・星尾山遺跡（有田市星尾）などの高地性集落が展開していたと考えられる。天満I遺跡において、少量ながらも弥生時代前期・中期の土器の出土も見逃せないところである。また、2005（平成17）年度以後、複数次の調査において旧吉備中学校校庭遺跡（11）（写真3・4）では、方形周溝墓を伴う弥生時代中期後葉から後期末に継続する集落が調査されている。

古墳時代は、田殿尾中遺跡で前期の方形竪穴建物が6棟、野田地区遺跡で溝2条が検出され、集落の様相が徐々に解明されつつある。また、野田地区遺跡の南西に隣接する段丘上では、天満I・II遺跡（16・17）や藤並遺跡（14）において古墳時代の遺物の散布が確認されていたが、天満I遺跡において2000（平成12）年度の調査で弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物1棟が、2003（平成15）年

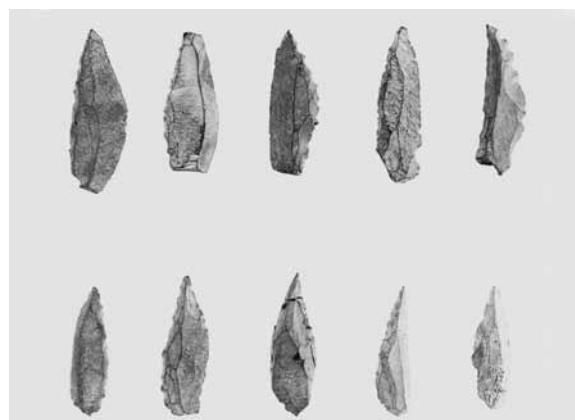


写真1 土生池遺跡出土のナイフ形石器



写真2 田殿尾中遺跡出土の弥生土器



写真3 旧吉備中学校校庭遺跡第1次調査 全景(北から)



写真4 旧吉備中学校校庭遺跡第4次調査
竪穴建物20・22(南西から)

度の調査で古墳時代中期の竪穴建物 1 棟が検出され段丘上の集落が確認されている。古墳は、有田川流域の丘陵上および海岸部に築造され、中期古墳を一部含むものの後期古墳が主体である。付近では、藤並神社境内に天満古墳群（15）が形成されている。天満 1 号墳（泣沢女の古墳）（写真 5）は、直径 22～24 m の円墳で、内部主体は玄室前道がつく巨石使用の両袖式横穴式石室である。石室内からは銅芯金板張耳環や土器類のほか歯が出土した。これらの遺物から 7 世紀中葉に築造され、被葬者に 12 歳の女性が含まれる公算が大きいと考えられている。天満 1 号墳は、古墳時代では県内でも珍しい巨石積みの石室をもつ古墳で、発掘調査され復元整備されている。

また、古代の須恵器を焼成した窯跡も多く土生池須恵器窯跡（37）などが明らかにされており、歴史時代においては川原寺式軒丸瓦・重弧文軒平瓦が採集された田殿廃寺しか知られておらず、官衙遺跡や寺院跡などの様相はよく分かっていない。しかし旧吉備町大字土生・水尻では窯業に適した良質な粘土が採掘され、城山窯跡群（22）・地蔵山窯跡群（23）・風呂の谷窯跡群（24）などでは奈良時代から平安時代までの古代紀伊国でも最大級の須恵器・瓦窯跡群が展開する。中世では野田地区遺跡で護岸を伴う溝、天満 I 遺跡で和鏡（写真 6）や刀子を副葬した土葬墓が見つかっている。

このように、藤並地区遺跡の周辺部は、原始・古代より有田地方の中心的な地域であったと言える。

第3節 調査の経緯と経過（既往の調査）（図3～5）

藤並地区遺跡は、1980（昭和 55）年度に海南湯浅道路の建設に際してその出入口にあたる有田インターチェンジから国道 42 号線への導入路部分について、分布調査及び試掘調査が行われた。その結果を受けて、本格的な調査が必要と判断された野田地区遺跡および藤並地区遺跡の範囲において、1980（昭和 55）年度から 1981（昭和 56）年度にかけて調査が実施された。

次いで、近畿中枢部から紀南への円滑な物資の輸送・観光資源の活性化などに伴う交通網の整備を意図した一般国道 42 号湯浅御坊道路（写真 9）の建設工事に先立ち、1989（平成元）年度から 1993（平



写真 5 天満 1 号墳（泣沢女の古墳）石室（南から）



写真 6 天満 I 遺跡中世墓出土和鏡



写真 7 藤並地区遺跡 1991 年度 M 地区出土旧石器

成5) 年度までの5箇年わたり試掘調査を含めた発掘調査が実施されている（写真7・8）。

今回の調査の対象となった「県道吉備金屋線」は、有田郡有田川町を横断する国道42号と国道424号を連絡し、阪和自動車道（高速自動車道近畿自動車道松原那智勝浦線）の有田インターチェンジへのアクセス道路ともなっている。現状では、「県道吉備金屋線」は交通混雑の悪化と安全性の低下が進み、主要幹線道路として十分に機能を発揮できない状況にあった。そのため、対象となるバイパス路線は、現道の交通問題に対処し、地域に活力とゆとりをもたらすために2車線道路として整備することになった。

このような中、当地には藤並地区遺跡が所在するため、その取扱いについて和歌山県教育厅生涯学習局文化遺産課（以下、県文化遺産課とする）と和歌山県有田振興局建設部（以下、県建設部とする）との協議がなされた。その結果、一般国道42号湯浅御坊道路の隣接地においては、既往の調査成果を鑑みて本調査を実施する運びとなった。また、少し離れた範囲においては随時、県文化遺産課が確認調査を行い、その結果を受けて遺跡の取扱いについて協議がなされた。なお、2007（平成19）年度、及び2008（平成20）年度の調査に先立って行われた県文化遺産課と県建設部との協議では、既往の調査成果から随時「本発掘調査を要しない範囲」の設定が成された。

これらの経過の中で、2006（平成18）年度は、藤並地区遺跡全体の中では北端（2006-I区・II区）（写真9）ないしは北半部（2006-III区）に該当する範囲で調査を行った。当該年度の調査は、3地区合計1,807m²について実施した。何れも、一般国道42号湯浅御坊道路の建設工事に先立って行われた調査地の東側に位置する。調査では、鎌倉～室町時代の粘土採掘土坑・谷状落ち・石列状遺構・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、地震による噴砂を確認した。

出土遺物の大半は、鎌倉時代の土器類で占められるが、旧石器時代の石器剥片、縄文時代の石鏃、奈良時代の須恵器・瓦、室町時代の土器類なども少量ある。鎌倉・室町時代の遺物には、砥石・鉄滓各数点、鉄砲弾1点がある。

2007（平成19）年度は、藤並地区遺跡全体の中では北半部（2007-I区・II区）ないしは北東部（2007-III区）（写真10）に該当する範囲で調査を行った。当該年度の調査は、3地区合計608m²について実施した。調査では、平安時代末～鎌倉時代の柱穴・土坑・



写真8 藤並地区遺跡 1991年度J地区
検出掘立柱建物



写真9 2006-I区 調査遺構全景と湯浅御坊道路
(北北東上空から)



写真10 2007-III区 1溝掘削状況（南東から）

井戸・溝・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、2006（平成18）年度と同様に地震による液状化の噴砂を確認した。

出土遺物の大半は、平安時代末～鎌倉時代の土器類で占められる。その他、2007（平成19）年度の調査時に旧石器時代と考えた土坑に伴って硬質頁岩製の剥片石器・石器剥片が、平安時代末～鎌倉時代の遺物に混じって奈良時代の須恵器・瓦、砥石などがある。

2008（平成20）年度は、藤並地区遺跡全体の中では北半部（I・II・IV・V・VI区）ないしは北東端（III・VII区）に該当し、一般国道42号湯浅御坊道路の建設工事に先立って行われた調査地の東西両側に位置する。このことから2007（平成19）年度と同様に旧石器時代、並びに奈良時代から中世における遺跡周縁部の土地利用の一端や北東端での遺跡の在り方が解明されるところであった。当該年度の調査は、7地区合計

なお、2008（平成20）年度の調査に先立って、2007（平成19）年度に有田川町教育委員会により2006—Ⅲ区の南側において調査が実施されている（町1区・町2区）。

調査は、阪和自動車道の4車線化事業に伴う町道拡幅工事に先立ち実施されたものである。調査では、弥生時代前期の可能性が考えられる自然流路、奈良時代から平安時代の溝1条、中世の水田区画などが検出された。奈良時代から平安時代の溝からは、須恵器の壺・甕・香炉蓋（写真11）、丸瓦・平瓦、陶棺などが出土している。この内、須恵器の香炉蓋は、鉢の形状が塔の相輪形を呈している点が特徴である。



写真 11 有田川町 2007 年度調査出土香炉蓋



図3 既往の調査地点位置図 (1:8,000)

第Ⅱ章 発掘調査・出土遺物整理の方法

第1節 調査現場の記録作業

藤並地区遺跡の調査に伴い、下記に示す記録作業を行った。

1 写真撮影作業

記録保存としての写真撮影作業は、中判カメラ（ 6×7 判：白黒フィルム・カラー・ポジフィルム）・小判カメラ（ 35 mm 判：白黒フィルム・カラー・ポジフィルム）・小型デジタルカメラにより、主に発掘調査の状況、検出遺構・遺物の出土状況、断面土層等を撮影した。また、速攻性に優れた小型デジタルカメラにより作業状況や作業工程をメモ用の記録画像として撮影している。これは、従来の小判カメラ 35 mm 判でのカラーネガフィルムの代替で、メモ記録としては非常に有効な手段である。

2 実測図作成作業（写真 12）

記録保存としての実測図作成作業は、各遺構面の検出遺構の遺構位置全体図（縮尺 = $1/100$ ）・全体の遺構平面実測図（縮尺 = $1/20$ or $1/50$ ）・個別遺構や遺物の出土状況図（縮尺 = $1/10$ or $1/20$ ）・個別遺構の断面土層図（縮尺 = $1/20$ ）を作成した。

また、調査地区の遺存状態の良好な壁面に対して断面土層図（縮尺 = $1/20$ ）などを記録として作成した。

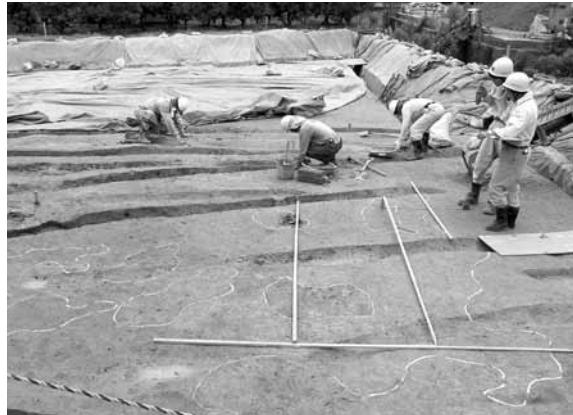


写真 12 2008-II 区東側 遺構位置全体図作成
(北寄り西から)

3 航空写真撮影・基準点測量（図5、写真 13）

調査地の遺構図面作成や遺物の取上げ等のため、2006(平成 18)年度に設置した 3 級基準点(藤並-1・藤並-2・藤並-3・藤並-4)から国土座標第VI系(世界測地系)により各年度各地区内に 4 級基準点の設置を実施した。併せて、4 級基準点には水準測量も行っている。

発掘調査により検出した遺構は、ラジコンヘリで調査地全体の航空写真撮影を行った。

航空写真撮影及び基準点の設置は、2006-I～III区を「藤並地区遺跡発掘調査に伴う航空写真撮影」と「藤並地区遺跡発掘調査に伴う基準点測量」で株式会社 共和に、2007-I～III区を「平成 19 年度

藤並地区遺跡発掘調査に伴う航空写真撮影」で株式会社 共和に、「平成 19 年度 藤並地区遺跡発掘調査に伴う基準点測量」で和歌山航測株式会社に、2008-I～IV区を「平成 20 年 藤並地区遺跡発掘調査に伴う航空写真撮影・基準点測量」で株式会社 サンヨーナイスコーポレーションに、2008-VI・VII区を「平成 20 年 藤並地区遺跡発掘調査(その 2)



に伴う航空写真撮影・基準点測量」でワコウコンサルタント株式会社に業務委託して実施した。

今次の調査では、確認調査の結果、遺構密度が低いと判断されたため航空写真測量は実施していない。

表2 発掘調査・出土遺物等整理業務工程表

第2節 調査地の位置と地区割（図4・5）

調査の地区割は、和歌山県内全域を同一条件で統一したものがないため、和歌山県文化財センター『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006年4月）に準拠して、今回の一連の調査に供するものを2006（平成18）年度に作成した。但し、同一地域において複数パターンの地区割を作成すると将来的に煩雑になると判断されたため、藤並地区遺跡の北側で2006（平成18）年度の上半期に調査を実施した野田地区遺跡の区画割を延長させて使用している。

調査地の地区割は、既往の調査および今後の調査に共通して使用できるように旧吉備町発行の縮尺 $1/2,500$ の「吉備町都市計画図」No. 10・No. 14（旧日本測地系により、昭和54年測量・平成6年修正：アジア航測株式会社調整）を基本として、世界測地系（國土座標第VI系）に変換した図面を作成して行った。調査地の地区割は國土座標第VI系（世界測地系）を使用し、野田地区遺跡を網羅する範囲の北東に基点（X = -214.0 km、Y = -73.3 km）を設けた。この基点からX軸西方向とY軸南方向にそれぞれ100 mの大区画（100 m方眼）を設定した。これらの呼称は、基点からX軸西方向にA～Y（アルファベット大文字）、基点からY軸南方向に1～25（算用数字）とした（図2 区画呼称例 E13）。次いで、100 m方眼の大区画を625等分し、4 m方眼の区画割（小区画）を行なっている。小区画の呼称は、各々の大区画の北東隅を基点として、X軸西方向にa～y（アルファベット小文字）、Y軸南方向を1～25（算用数字）とした（図5 小区画呼称例 h21）。

実測基準点および遺物の取上げは、上記の地区割・区画割（小区画）を使用している。全て、野田地区遺跡及び各年度の藤並地区遺跡調査の地区割に続くものである。

なお、標高は、東京湾標準潮位 T.P. +を使用した。

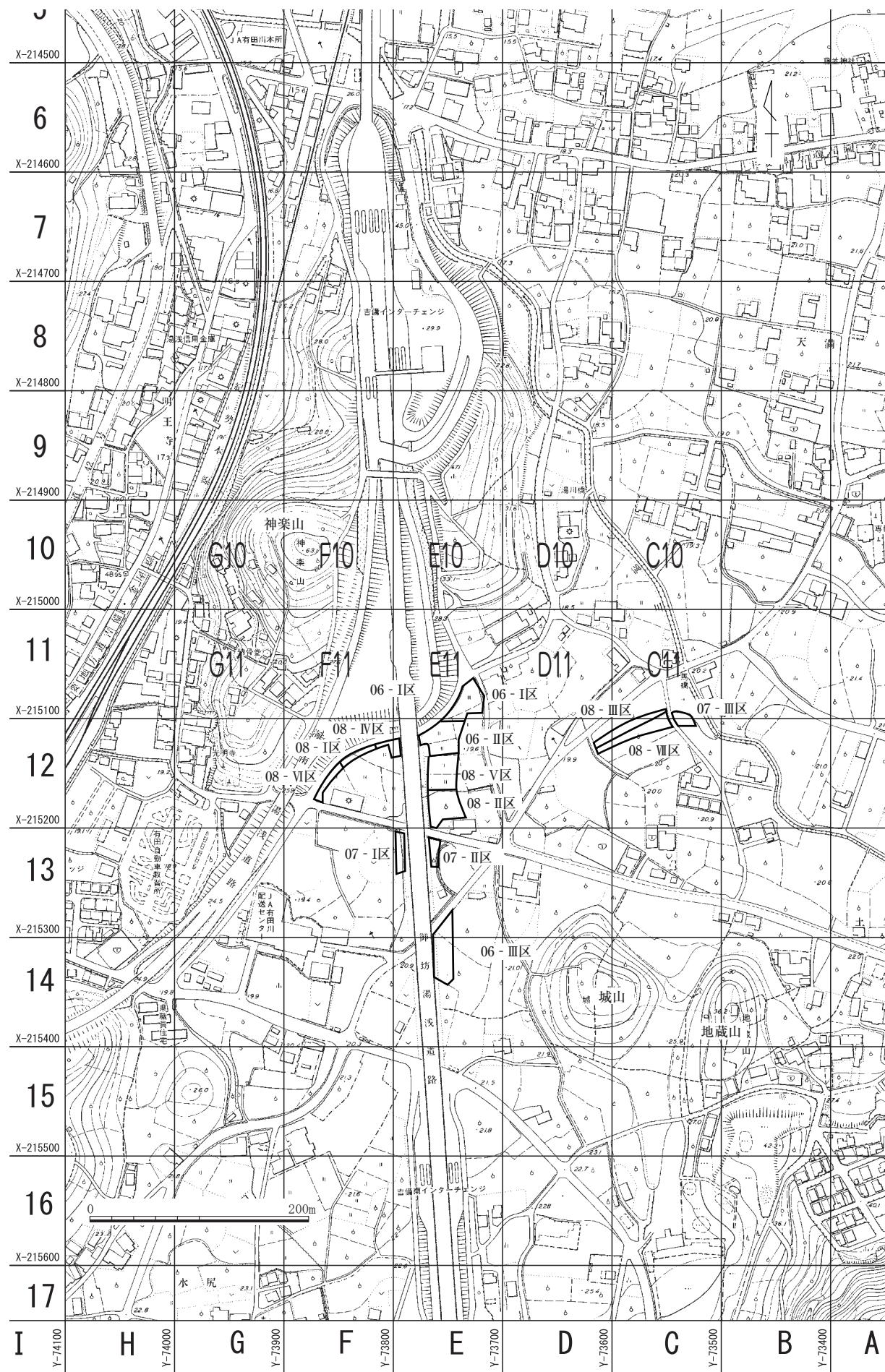


図4 調査範囲と地区割 (100 m区画) (1 : 5,000)

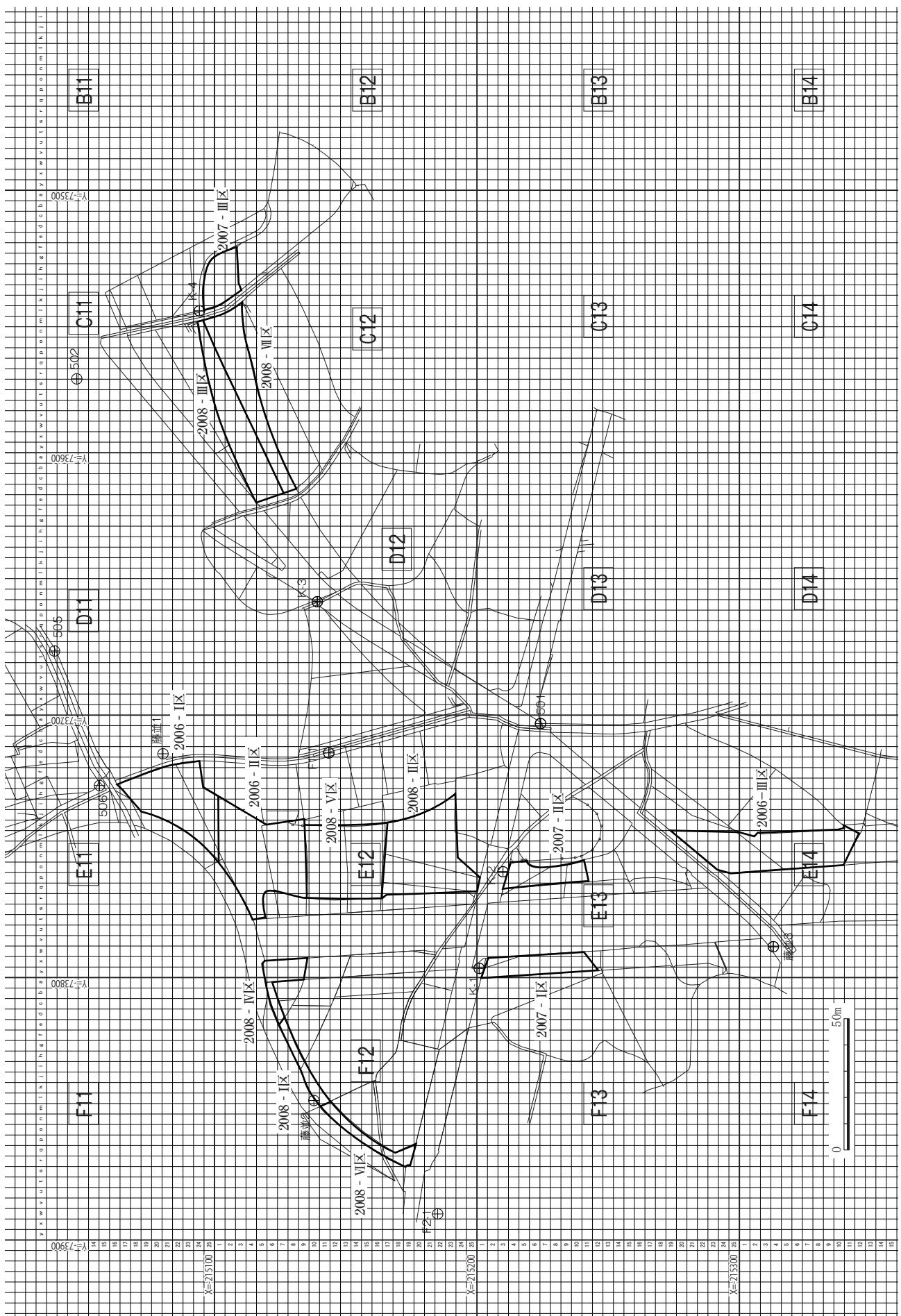


図5 調査位置と区画割（4m区画）（1:2,000）

第3節 出土遺物等資料の整理

1 出土遺物応急整理等

応急整理作業（写真6）

出土遺物については、調査の進捗に伴い、調査方法の判断資料として時期決定を行い、調査を円滑に進めていく必要があるため、調査現場の監督員詰所において出土遺物について応急整理作業を実施した。洗浄作業についてはほぼ全て、注記作業は一部を行った。

また、出土遺物の総体的な把握と調査報告書作成までの収納・管理を目的とした出土遺物登録台帳の作成作業を行い、ほぼ全てを完了した。しかし、出土遺物の詳細な内容登録までは行っていない。

旧石器時代の石器・石器剥片の抽出

2008-III区の補足調査（写真図版26-3）では、下部の粗砂細礫層に関して2007-III区検出の6土坑と下部の堆積層との関連を探る必要があったため、粗砂細礫層の一部を採取し（土嚢袋約80袋分）、洗い出し（写真15）・抽出作業を行った。その結果、時代が確定できないながらサヌカイト製・凝灰岩（硬質頁岩）製石器剥片12点を確認した。

上記の2008-III区の補足調査で粗砂細礫層からのサヌカイト製・凝灰岩（硬質頁岩）製の石器剥片の存在が確実となつたため、更に、南隣調査地の2008-VII区の調査において粗砂細礫層からの石器・石器剥片の洗い出し・抽出作業（写真16）を行つた。その結果、旧石器時代のナイフ形石器4点・石器剥片など49点を確認した。調査時点では、ナイフ形石器以外の石器は認識できていなかつた。

2 出土遺物等整理業務

調査で出土した遺物は、応急的な整理のみであつたため、調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行うと共に、遺構図面・遺構写真などの調査資料の整理を行い、資料登録台帳などを作成した。

出土遺物は、通常の遺物収納コンテナ（28ℓ）にして53箱と旧石器時代の遺物抽出の必要な粗砂細礫層である。出土遺物の整理は、『財団法人和歌山県文化財センター 発掘調査マニュアル（基礎編）』に準拠して、全遺物を対象に台帳登録・遺物洗浄・遺物の調査コードと出土遺物登録番号の注記（写真



写真14 出土遺物台帳登録（応急整理）



写真15 2008-III区下位面 粗砂細礫洗浄作業（応急整理）



写真16 VII区下位面 粗砂細礫からの旧石器遺物の抽出（応急整理）



写真 17 遺物（土器）への登録コード注記



写真 18 遺物の接合



写真 19 遺物充填材による補強・復元



写真 20 出土遺物の実測図作成



写真 21 遺物実測図トレース作成



写真 22 実測遺物台帳登録データ入力

17)・遺物破片点数の集計（表3：総数6,589点）・接合作業（写真18）を行った。

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強（写真19）・復元・遺物実測（写真20）・実測遺物台帳登録（写真22）・遺物実測図トレース作成（写真21）・トレースレイアウト・遺物実測図の整理・遺物写真撮影・遺物写真の整理、集計登録データ等入力を行った。さらにこれらの遺物の中から、各々の遺構・整地土・堆積層の時代・性格の理解に必要と思われる主要なものを抽出して調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構図面の整理は、台帳登録・報告書用図面の作図・図面トレース（レイアウト）を行い、調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構写真・遺物写真撮影の整理は全写真を対象に、アルバム収納・登録番号の記載作業を行った。

第III章 各年度の調査成果と出土遺物

第1節 第1次調査（2006年度）

1 調査の概要

調査地は、大きく北側と南側の2箇所に別れ、地目の違いにより工法が異なるため北側から順に2006-I区・II区・III区と呼称して調査を行なった。また、掘削排土の仮置場が十分確保できないため、北側調査地では2006-I区と2006-II区とに分割し、2006-III区では北半分と南半分に分割する反転方式で調査を行った。これらに伴い4級基準点測量・航空写真撮影も各々、分割して作業を行った。

検出遺構

各調査区の遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田耕作土層を主体として、2006-I区では大別して4面、2006-II区では2面、2006-III区では1面のみが確認できた。遺構の主だったものとして、2006-I区では鎌倉～室町時代の谷状落ち・粘土採掘土坑・石列状遺構・畦畔状の高まりなどを、2006-II区では土坑・畦畔状の高まりなどを、2006-III区では土坑・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、地震による液状化の噴砂を確認した。なお、何れの地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稻株痕を多数検出した。

調査地の現地形は、盛土による宅地化や果樹園などによりかなり改変されているが、鎌倉時代から室町時代の旧地形は大きく南西から北東方向に緩やかに傾斜する。

詳細に見ると、現地表の高さは後世の開発に伴い変化しているが、各地区に共通して中世遺物包含層（旧水田耕作土）が認められることからこれらの耕作土の下部が往時の旧地形を表出するものと思われる。各々、2006-I区での最下層の遺構面は、北端で標高T.P.=17.6m～南端で17.5m、2006-II区での最下層の遺構面は、南端でT.P.=18.2m～北端でT.P.=17.7m、2006-III区での遺構面は、南半部分と北半部分の間に段を挟んで南端でT.P.=19.5m～北端でT.P.=19.1mを測る。都合、2006年度調査地の南北両端では、約2.0mの高低差を認めることができる。

出土遺物

出土遺物の大半は、遺物包含層（旧水田耕作土）や落ち込み地形（1落ち）・谷状落ちから出土した鎌倉時代の土器類で占められるが、室町時代の土器類も少量ある。その他、旧石器時代の貞岩製の縦長剥片、縄文時代の石鏃・砂岩製窪み石、弥生時代後期の土器、奈良時代の土師器・須恵器・瓦がある。また、時期不詳の敲き石・サヌカイト剥片が十数点出土している。

鎌倉・室町時代の遺物には、土師器（皿・土釜）、瓦器（椀・皿・鉢）、瓦質土器（三足釜・火舎）、陶器（備前擂鉢・甕、常滑甕）、磁器（中国製白磁碗・青磁碗）、土錐がある。これらの遺物に混じって、砂岩製砥石数点・鉄滓数点、鉄片1点、鉄砲弾（鉛玉）1点が出土した。

遺物の全体量は、通常の遺物コンテナ（28㍑入り）にして、19箱分である。

2 2006-I区 調査面積590m²（図6・7・9～12、写真23～26、写真図版1～4・6）

2006-I区は、1992（平成4）年度調査のA地区の南東側に位置する（図3）。

基本層序（図7、写真23、写真図版6）

2006-I区での遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田を主体として、大別して鎌倉・室町前期・

室町後期・江戸時代の4面が認められる。詳細には(図7)、基盤層直上から第6層上面が鎌倉時代前期・後期、第5b層上面が室町時代前期・中期、第5層上面が室町時代後期、第2f層上面が江戸時代前期、第2層内に江戸時代の水田面が最低4面認められるものと考えられる。

2006-I区で遺構の主だったものとして、鎌倉～室町時代の谷状落ち・粘土採掘土坑・石列状遺構・畦畔状の高まり、人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稻株痕を検出した。

51 谷状落ち(図6・9・46、写真図版1・2・32)

2006-I区での最下層の遺構面(基盤層III 10BG5/1 青灰色粘質シルト乃至は、基盤層III' 5Y6/1 灰色粘質シルト)は、51 谷状落ちの南北両肩の高さを示し、北東端で標高 17.6 m～南東端で 17.5 m の数値を示す。部分的ではあるが、51 谷状落ちの両肩に近い部分を検出したことになり、南北幅約 20 m 以上、深さ平均 0.75 m となる。51 谷状落ちは、平面的に検出した範囲において北西～南東方向(図6のA-A')にサブトレーナーと断面土層観察用の畦を残し、堆積状況の観察に努めた。

下部では比較的、流速の速い状況の中で第8層・第9層の細砂・粗砂を含む粘泥が堆積したものと思われる。上部では、流速の遅い澱みの状態の中で第7a層～第7c層の埋積が認められる。観察した限りでは、有機質の混入の少ない泥溜りの状況を呈している。

51 谷状落ちは、第7a層を主体に掘削した結果、奈良時代の遺物も混在するが、133点が出土した。遺物は、瓦器碗(13)・小碗(12)・小皿(10・11)、土師器皿(9)・土釜、瓦質火舎(14)など鎌倉時代のもので占められる。限られた掘削範囲であるが、遺物の内容は、第7a層以下の下位の層においても瓦器を含む傾向が認められる。瓦質火舎(14)は、51 谷状落ちの上位層第7b層で取上げたが、52 石列状遺構に近接することから 52 石列状遺構に關係する遺物と考えられる。

53 粘土採掘土坑(図12、写真24、写真図版4)

53 土坑は、短軸 0.96 m・長軸 1.34 m・深さ 0.63 m を測り、南北に長い橢円形状を呈する。

53 土坑は、埋土の下部に基盤層III(10BG5/1 青灰色粘質シルト)に 51 谷状落ち堆積層の第7層系の 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト(N3/0 暗灰色ぎみ)～2.5Y2/1 黒色粘泥シルトの塊が多量に混在する。また、上部は、2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト(N3/0 暗灰色ぎみ)に 2.5Y2/1 黒色粘泥シルトと基盤層IIIの小さい塊が少量混在する。明らかに人為的に埋めたものと判断でき、粘土採掘に伴う掘り穴と判断した。

53 土坑の埋土からは、他の遺構に比較して多くの遺物(24点)が出土した。奈良時代の須恵器2点・瓦(凹面布目痕、凸面格子叩き、焼成遺存良好堅緻)15点、鎌倉時代の瓦器碗7点があり、鎌倉時代

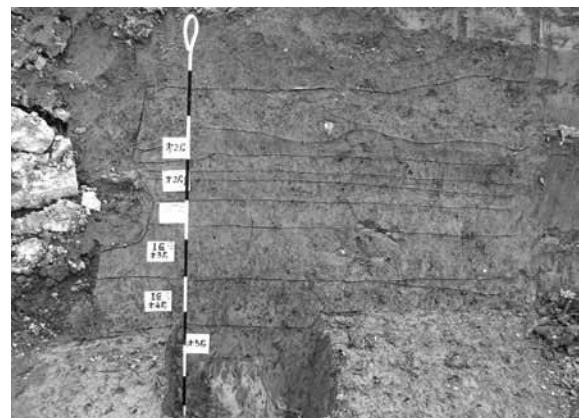


写真23 2006-I区 E11-f22 調査区東壁断面土層(西から)



写真24 2006-I区E11-f23 53 粘土採掘土坑掘削状況(北西から)

の遺物が最も新しい内容となる。遺物は、細片が主体で図示できるものはない。

その他、53 土坑に隣接して、54・55・56 土坑の 3 基を確認している。各々、検出面での埋土は、第 5 層系の埋土を搅拌した状態にある。遺物は、54 土坑の最上層から奈良時代の瓦 2 点、鎌倉時代の瓦器碗 5 点（7）が出土した。

52 石列状遺構（図 10・11、写真 25、写真図版 3・32）

52 石列状遺構は、51 谷状落ちに堆積した第 7c 層の上部に一定の幅員約 2 m に粗砂礫混じりの土砂（図 11 の A～F'）を盛上げ、その上に大小の割石を乱雜に据え置いた状態にある。検出時には、粗砂礫混じりの土砂の範囲は、土質の違いから乾燥度合が著しく、明らかに 51 谷状落ちの埋積土とは異なる様相を呈していた。その状態から、52 石列状遺構は 51 谷状落ちの埋没後に構築された土橋の可能性が高いと考えられる。

52 石列状遺構に伴う客土と考えた埋土（図 11 の A～F'）には、狭い範囲において今回の調査の中では、最も遺物の密度の高い状況となる。遺物は、瓦器碗・小皿・二次焼成の認められる三足釜（206・207）、須恵器捏鉢など、細片化した状態で多量（171 点）に出土した。52 石列状遺構に関する遺物（53 点）として、土師器皿（4）、瓦器碗・小皿（5）、常滑甕などがある。

土壤サンプルの採取（写真 26）

調査の一環として、土壤中に含まれる花粉や珪藻などの微化石分析をすることによって当時の環境を復元する資料を得る事が可能である。そのための試料として、旧水田耕作土や谷状落ちの堆積土の一部を採取している。前者の旧水田耕作土は、堆積層（遺物包含層）であるが、土壤の珪酸体分析、花粉・珪藻分析を通じて当地域の水田開発時の水田の状況と周辺の環境を推し量る事が可能となる。また、後者の谷状落ちの埋積土の土壤分析を通じて当時の植生や気候などの周辺環境を復元するための資料を得るには、花粉・珪藻分析を同時に行なうことが最も望ましいと思われる。土壤分析用サンプルは、2 箇所で合計 12 点の試料を採取している。

3 2006-II 区 調査面積 729 m²（図 6～8、写真 27・28、写真図版 5・6）

2006-II 区は、1990（平成 2）年度調査の B 地区の東側に位置する（図 3）。

2006-II 区での遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田耕作土を主体として、大別して 2006-I 区と同様の 4 面が認められるものと考えられる。詳細には（図 7・8）、ほぼ I 区と同様であるが、



写真 25 2006-I 区 52 石列状遺構掘削状況
(北北西から)



写真 26 2006-I 区 E11-h・i22 51 谷状落ち土壤採取状況 (北東から)

第2層は後世の削平のために調査区の南端で現存するには、現在の耕作土に伴う床土のみである。

2006-II区で遺構の主だったものとして、鎌倉～室町時代の土坑・畦畔状の高まり、2006-I区に向かって下降する地形の落ち、人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稻株痕を多数検出した。

第3層系包含層からは、サヌカイト製の石鏸(110)、奈良・鎌倉時代の遺物(図46～48)が多数出土した。

土坑群(図6・48、写真28、写真図版5・6)

調査地内の基盤層直上(第3層系包含層・1落ちの埋積土除去面)において28基の土坑を検出した。土坑からの出土遺物は、極めて少量である。遺物は、2土坑からサヌカイト剥片1点が(63)、5土坑から瓦器2点が、12土坑から瓦器8点(64)・土師器皿1点・土師器小皿1点が、13土坑から瓦器5点が、30土坑から瓦器3点が出土したに過ぎない。大半の土坑は、人為的に埋められた埋土は認められず、澱みながら埋積した自然堆積の状況を呈している。また、遺物を伴う包含層の埋積も認められない。遺物は、上位からの踏み込み遺構によってこれらの土坑の埋土に混じり込んだものと考えられる。このことから、土坑は人為的な所産による可能性が低いものと考えられる。

1落ち(図6・7、写真図版5)

1落ちは、2006-II区の北側で地形の不整形な落ちが2006-I区に向かって下降する。埋土は、2006-II区全体に広がる第3層系包含層の下位に第4層系包含層・第5層系包含層・第6層系包含層が埋積する状態にある。1落ちの遺物(726点)は、旧石器時代のサヌカイト製のナイフ形石器(98)・横長剥片(108)、チャート製の縦長剥片(107)・剥片など、比較的多くの後期旧石器時代の遺物が出土した。遺物の主体は、奈良時代の土師器・須恵器、鎌倉時代の土師器・瓦器碗・小皿などである。

鉄砲弾(図51、写真図版6・40)

鉄砲弾(112)は、2006-II区の北西隅E12-q5の側溝位置で、奈良・鎌倉時代の遺物を主体とする第3層系包含層の最下部から出土した。出土層位は、水田に伴う上位からの踏み込み遺構と考えられるものであり、鉄砲弾の時期を明確にできていない。

鉄砲弾は、直径11.5mm、重量8.88g(2.368匁)を量る。鋳型の合せ目痕が明瞭に観察できる。合せ目痕は、上下方向に細筋状の2条の突線として遺存している。また、上下方向の突線に対して直行する方向にも突線状の細筋を認めることが出来る。全体では4区分されたように見受けられる。現時点での県内での出土事例は、岩出市根来寺遺跡や和歌山市太田城跡・中野遺跡(城跡)・史跡和歌山城などで10点内外に止まる。なお、鉄砲弾は、現地から取上げ後に風化が進行し、現時点では表面上



写真27 2006-II区 E12-n9 調査区南壁断面土層
(北から)

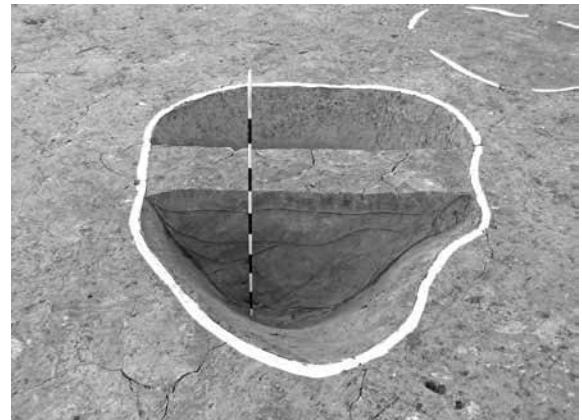


写真28 2006-II区 E12-ℓ5
18 土坑南西-北東断面土層(南東から)

は灰濁色を呈している。

4 2006-III区 調査面積 488 m² (図 13～15、写真 29～31、写真図版 7・8)

2006-III区は、1990（平成2）・1991（平成3）年度調査のD・E地区の東側に位置する（図3）。

2006-III区の遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田を主体として、1面のみ確認できた。

2006-III区で遺構の主だったものとして、鎌倉～室町時代の土坑・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、地震による液状化の噴砂を確認した。また、2006-III区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稻株痕を多数検出した。

基本層序 (図 14、写真 29)

調査時点で上位層は殆んど削り取られていたため、第1層（耕作土）・第2層（水田床土）は部分的にしか存在しない。上部は、約1mの客土によつて整地がなされていた。調査区の壁際に沿つて、堆積層序の確認と排水を兼ねた側溝を設けた。

2006-III区での遺構面は、途中で段差を生じ南端で標高19.5m～北端で19.1mを測る。第3層層系包含層は、北に向かって緩やかに下降する。遺物包含層（第3層：中世耕作土）には、縄文時代の窪み石（115）、奈良時代の須恵器（65、238・239）・瓦（241）、中世の土釜・瓦器（66～69）・須恵器捏鉢（70～72）などの破片が認められる。

〈北半地区〉 (図 13・15、写真 30、写真図版 7)

地形的に、北側へと緩やかに傾斜する。県文化遺産課の2006年度の試掘調査で、調査地の北側約40mの地点で自然流路が確認されている。小溝群の方向と自然流路の方向は概ね一致すると考えられる。

水田耕作に伴う小溝群 (図 13、写真図版 7・8)

幅員20cm前後・深さ約5cmの溝を20数条検出した。埋土の大半は、第3層系遺物包含層（水田耕作土）が埋積している。小溝群は、北西～南東方向にほぼ平行に認められ、重複関係から古い段階がN-55°-W、新しい段階がN-50°-Wの走向を示す。

土坑 (図 15、写真 30、写真図版 7)

土坑は、5基検出した。8土坑からは、白鳳期の焼成遺存が硬質で凹面布目痕・凸面格子叩きの瓦1点が出土している。15土坑からは、縄文時代と考えられる砂岩製の石皿1点（116）が出土した。その他の土坑から、遺物は出土していない。11土坑は、短軸0.4m・長軸0.55m、深さ0.15mを測り、明確な平面形を検出できた土坑である。埋土は、基盤層IVに類似し10YR5/1褐色粘質シルトである。遺物は出土していない。11土坑も、2006-II区で検出した土坑と同様に、人為的に埋められた埋土は認められず、澁みながら埋積した自然堆積の状況を呈している。また、遺物を伴う包含層の埋積も認め



写真 29 2006-III区北半 E13-m23
調査区東壁断面土層 (西から)



写真 30 2006-III区北半 E14-m1 11 土坑
断面土層 (南東から)

られない。このことから、2006—I区検出の土坑も人為的なものとは判断できない。

水田畦畔

調査区の北端で検出し、畦畔の一部を検出した。畦畔の末端が調査範囲外におよぶため、全体の形状・水田の区画面積については不明である。

〈南半地区〉(図13、写真31、写真図版8)

小溝群(図13、写真31、写真図版8)

幅20cm前後・深さ約5~10cmの小溝を20数条検出した。小溝群の走向性は、北半調査区とは異なり、北東—南西方向に平行に認められ、重複する前後関係から、古い段階がN-60°-E、新しい段階がN-40°-Eの走向を示す。

遺物は、瓦器椀(73・74)・小皿(75~77)など、鎌倉時代を主体としたものが出土した。

南半地区の北端には、古い段階の小溝群と並行する段状地形が存在し、この段(高低差約20cm)が北半と南半の水田を画する境となる。

噴砂(写真図版8)

北北西—南南東方向にかけて地震による液状化現象によって生じた噴砂を検出した。噴砂は、最大で1mの幅をもつ。調査区内では延長16mおよび、地上に細砂・粗砂が噴出している。噴砂は、13世紀の小溝群によって削り取られていることから中世以前の地震痕跡である。中世以前の南海大地震などの巨大地震の所産と考えるのが妥当と言える。噴砂の砂の供給源となる下部の堆積層は、南半地区では確認できなかった。南半地区の調査中に湧水が著しく、殆ど全面にわたり壁面が大きく崩落したため断念せざるを得なかった。北半調査区では、第3層系包含層除去面から約50cmの深さで基盤層V(5BG6/1青灰色細砂・粗砂)が確認でき(図14)、この層が砂の供給源となるものと考えられる。



写真31 2006-I区南半 小溝群(北東から)

5 小結

調査の成果と周辺の現状地形から、まず、2006—I区で51谷状落ちの南北両肩に近い部分を検出したこと、北東端では調査区外の町道部分から北側の丘陵に向かって急に高くなっていること、また現状地形から考えて、調査地の北西側に位置する神楽山の南麓および東麓から天満I遺跡(図2の16)の西端を抜けて、野田地区遺跡の段丘崖に向けて開析谷の広がりが認められる。調査地では、51谷状落ちの地形状況と出土遺物から鎌倉時代に埋積が進んだ状況を窺うことができる。

2006年度の調査では、既往の調査でも検出されている鎌倉時代を中心とした遺構・遺物の検出によって、遺物包含層化した水田耕作土によって中世期から江戸時代にかけての集落から外れた範囲の状況が判明してきた。集落や屋敷地に関する遺構は、何れの時代においても2006年度の調査範囲内では存在しないことが明らかとなり、鎌倉時代以後の水田化の様相を考えることができた。

中世期の土地開発を示す具体的な事例は、日高郡みなべ町(旧南部町)に所在する徳蔵地区遺跡や当地域においても例に漏れず、今回の調査地から500m南西側の1980年(昭和55年度)調査地においても中世における水田開発を示す資料が確認されており、当地域の広範に渡って開発が進められたものと考えられる。

第2節 第2次調査（2007年度）

1 調査の概要

調査地は、大きく3箇所に別れ、地点の違いにより西側から順に2007-I区・II区・III区と呼称して調査を行なった。3地区合計608m²について実施した。また、掘削排土の仮置場が十分確保できなかったため、2007-I区のみ北半分と南半分に分割する反転方式で調査を行った。これに伴い、2007-I区では航空写真撮影も分割して作業を行った。

検出遺構

各調査区は、柑橘類の畠地造成に伴い現代の耕作土・床土を始め、遺物包含層の大半が削平されていた。そのため、各地区的遺構は、基盤層直上（無遺物層であるが、本来の地山と区別するため「基盤層」の用語を使用する）で確認できたのみである。遺構の主だったものとして、2007-I区では鎌倉時代の土坑・水田耕作に伴う小溝群などを、2007-II区では土坑・地震による液状化の噴砂などを、III区では柱穴・井戸・土坑・溝などを検出した。また、2006年度と同様に何れの地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稻株痕を多数検出した。

調査地の現地形は、盛土による果樹園などによりかなり改変されている。しかし、調査の成果から鎌倉時代から室町時代にかけての旧地形は、2006-III区・2007-I・II区や2007-III区から2006-I・II区の方向へ下降し、北西側の神楽山南東裾に沿う谷地形を形成していることが判明してきた。

詳細に見ると、現地表の高さは後世の開発に伴い変化しているが、各地区に共通して僅かに中世遺物包含層（旧水田耕作土）が認められる範囲が存在する。このことから、これらの耕作土の下部が往時の旧地形を大きく逸脱しないと思われる。各々、2007-I区での最下層の遺構面は、北端でT.P.=18.85m～南端で18.55m、2007-II区での最下層の遺構面は、北端でT.P.=18.98m～南端で18.75m、2007-III区での遺構面は、東端でT.P.=18.95m～西端で19.00mを測る。都合、今回の調査地の北東端と南西端では、約0.4mの高低差を認めることができる。

出土遺物

出土遺物の大半は、主に2007-III区の溝や井戸から出土した平安・鎌倉時代の土器類で占められる。その他、旧石器時代の石器剥片、奈良時代の須恵器・瓦などがある。平安・鎌倉時代の遺物に混じって、砥石・サヌカイト製石器剥片が出土している。

平安・鎌倉時代の遺物には、土師器（皿・甕・土釜）、黒色土器（椀）、瓦器（椀・皿）、須恵器捏鉢、砂岩製砥石がある。

遺物総数は、通常の遺物コンテナ（28リットル入）にして、9箱分である。

2 2007-I区 調査面積224m²（図16～19、写真32・33、写真図版9～11）

2007-I区は、1991（平成2）年度調査のC地区の西側に位置する（図3）。

2007-I区では鎌倉時代の土坑15基・水田耕作に伴う小溝2条などを検出した。その他、踏み込み遺構



写真32 2007-I区北半 E13-x・y1
調査区北壁断面土層（南から）

の集中する範囲（図 16 の遺構 14～25）が認められた。第 3 層系耕作土（遺物包含層）は、極めて狭い範囲に遺存するのみであった。遺物は、僅かであるが土坑・遺物包含層・搅乱層から鎌倉時代を主体とした瓦器 7 点・須恵器捏鉢 1 点、弥生土器 1 点、須恵器 1 点が出土した。

土坑群（図 18・19、図写真図版 9～11）

1 土坑（写真図版 9・10）

1 土坑は、2007-I 区の中央に位置し、調査区西壁に延びる状態で検出した。東西 0.8 m 以上・南北 1.5 m 以上・深さ 0.32 m で、歪な形状を呈する。基底部に自然堆積層が埋積した後に人為的埋土によって埋め尽くされている。遺物は出土していない。また、1 土坑の東側で、長軸 0.5 m・短軸 0.3 m・深さ 0.1 m 前後の小土坑を 7 基（遺構 2～8）検出した。

13 土坑（図 19、写真図版 11）

13 土坑は、2007-I 区の南端に位置し、調査区東壁に延びる状態で検出した。東西 2 m 以上・南北 2.1 m・深さ 0.25 m で、半楕円形状を呈する。土坑の基底部に基盤層 A の崩れと思われる自然堆積層（図 19 の 5・6）が埋積し、上部は基盤層 A を主体とした多量のブロック土を含む人為的な埋土（図 19 の 1・2）で埋め尽くされている。遺物は出土していない。

23 土坑（図 18、写真図版 11）

23 土坑は、側溝掘削のために平面で検出することができなかつたが、2007-I 区の調査区西壁中央で検出した。南北 1.9 m・深さ 0.25 m で、形状は不明である。土坑の基底部に人為的な埋土（図 18 の 3）が埋められた後に、部分的に自然堆積層（図 18 の 2）が入り込み、再び、多量のブロック土を含む人為的な埋土（図 18 の 1）で埋め尽くされている。遺物は出土していない。23 土坑の上部には第 3 層系耕作土層（図 18 の第 3 層系）が存在し、鎌倉時代の瓦器 1 片が出土した。

水田耕作に伴う小溝群（図 16）

幅員 30cm 前後・深さ約 5 cm の溝を 2 条検出した。埋土は、第 3 層系の堆積層が埋積している。小溝群は、北北西～南南東方向にほぼ平行に認められ、N-15°-W の走向を示す。

3 2007-II 区 調査面積 194 m²（図 20～24、写真図版 12・13）

2007-II 区は、1991（平成 2）年度調査の C 地区の東側に位置する（図 3）。

2007-II 区では鎌倉時代の土坑 12 基・不整形な落ち 1 基・地震による液状化に伴う噴砂の砂脈 2 条などを検出した。第 3 層系包含層は、2007-I 区同様に極めて狭い範囲に遺存するのみであった。遺物（69 点）は、2007-I 区同様に僅かであるが、土坑・搅乱層から鎌倉時代を主体とした土師器 3 点・瓦器 64 点（内、54 点が 17 土坑から小片で出土）、須恵器 2 点が出土した。

土坑群（図 22・23、写真図版 12・13）

ここでは、主な土坑の記述のみに止める。

5 土坑（図 22、写真 34、写真図版 13）



写真 33 2007-I 区南半 E13-y7
1 土坑調査区西壁 断面土層（東南東から）

5 土坑は、2007-II区の北半部東側溝寄りに位置し、調査区東側に延びる状態で検出した。短軸1.3m以上・長軸2.1m・深さ0.31mで、やや歪な橢円形状を呈する。基底部に自然堆積層が埋積した後に人為的な踏み込みによって搅拌された状況(図22の3b・3c)を示し、後に再び自然堆積層(図22の2・3a)が埋積し、最終的には人為的な埋土(図22の1)によって埋め尽くされている。遺物は、鎌倉時代の瓦器椀3点が出土した。

11 土坑(図23、写真図版12)

11 土坑は、2007-II区の中央に位置し、全体が把握できる状態で検出した。東西1.4m・南北2.2m・深さ0.24mで、やや歪な形状を呈する。11土坑は、段階的ではあるが、人為的な埋土(図23の1・2)によって埋め尽くされている。遺物は出土していない。

18・19噴砂(図24、写真35、写真図版13)

2007-II区の北半部で、地震による液状化現象によって生じた噴砂の砂脈(遺構18)を検出した。18噴砂は、最大で0.75mの幅をもち、北東-南西方向に走向する。調査区内では延長5.5m以上および、地表面に細砂・粗砂が噴出している。18噴砂は、第3層系埋土の中世の素掘り小溝によって削り取られていることから中世以前の地震痕跡であることが判明した。

18噴砂の約2m南東側で19噴砂を検出した。19噴砂は、18噴砂と同一方向性を指向し、最大幅0.8m・延長1.5m以上を検出した。時期の判明する遺構との重複関係はないが、18噴砂と方向性が同じであること、18噴砂と19噴砂の間の基盤層III(10YR4/1褐灰色粘質シルト)が両噴砂の影響によって砂質化している状況にあることから同時的に生じた噴砂である蓋然性が高いと判断している。

以上のことから、18・19噴砂は2006-III区で検出した噴砂と同一時期の所産と考えられる。中世以前の南海大地震などの巨大地震の所産と考えるのが妥当と言える。噴砂の砂の供給源となる下部の堆積層は、調査中に降雨・湧水が著しく、今回の調査区では確認できなかった。

4 2007-III区 調査面積190m²(図25~28・46、写真図版14~16・38・39)

2007-III区は、2007-II区から250m北東側に位置し、天満川に隣接している。従来の藤並地区遺跡の北東縁辺部に該当する。III区では調査を反転方式にしても掘削排土の仮置場が十分に確保できないため、全ての掘削土を調査地外に搬出することとした。

2007-III区では柱穴15基・井戸2基・土坑3基・溝1条などを検出した。遺物(785点)は、旧石器時代の石器剥片、奈良時代の須恵器・瓦、平安・鎌倉時代の土師器(皿・甕・土釜)、黒色土器(椀・皿)、瓦器(椀・小皿)、須恵質捏鉢、砂岩製砥石等が出土した。遺物の殆どが1溝からの出土である。



写真34 2007-II区 E13-06 5土坑検出状況
(北北東から)

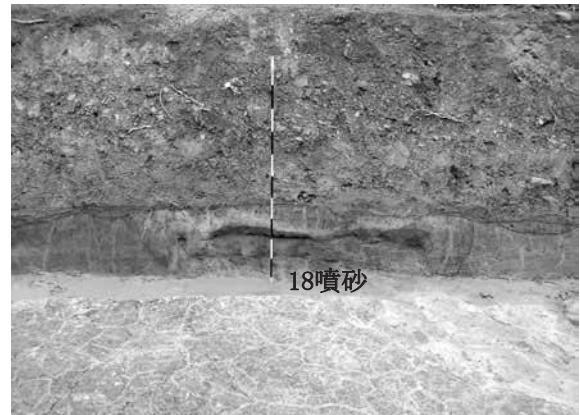


写真35 2007-II区 E13-p7
18噴砂調査区西壁断面土層 (東から)

基本層序（図26、写真36）

調査時点では上層は殆んど削り取られていたため、第1層（耕作土）は部分的にしか存在しない。上部は、約0.4～0.5mの客土によって果樹園の造成がなされていた。基盤層Iは、2007-I・II区の基盤層A（図18・23）に類似している。

柱穴群（図25、写真図版15）

柱穴は、2007-III区の北東側に集中して位置し、15基検出した。総体的に北西から南東方向に並びを有するものと思われるが、建物としての柱並びを捉えることができなかった。柱穴の配置状況から調査地の北東側に広がるものと思われる。柱穴は、重複関係を有するものもあるが、掘形長軸40～50cm・短軸30～40cm・深さ30～60cmの規模である。掘形埋土は、基盤層Iを成因としたものが主体を占め、殆どが類似している。柱穴には、柱痕跡（柱当り）の認められるものも有り、細砂を混在したシルトが自然堆積した状態にある。遺物は出土していない。

2井戸（写真37）

2井戸は、2007-III区の北東隅に位置する。当初、遺構の平面検出において大型柱穴の柱痕跡・掘形の重複関係を考えたが、井戸と判明した。

2井戸は、東西長軸1.1m・南北短軸1.0m・深さ1.1m（基底部でT.P.=17.80m）の規模である。井戸の掘り込みは、基盤層IV類似層に達し、素掘りである。埋土は、上記した柱穴埋土に酷似した埋土を認めることができる。そのため、時代が不明ながら同一段階に帰属する所産と思われる。遺物は出土していない。

5井戸（写真38、写真図版15）

5井戸は、2007-III区の北西隅に位置し、1溝と重複関係にある。調査区北壁断面土層と1溝-5井戸間の断面土層の層序関係から、1溝の埋没途上において5井戸が掘削されたことが判明した。

5井戸の規模は、1溝との関係で判然としないが、東西掘形上端で3.2m（掘削できた下部での掘形は東西1.8m）・深さ1.1m（T.P.=17.70mまで掘削）以上である。井戸の掘り込みは、基盤層Vよりさらに下位に及んでいる。遺物は、上層で1溝と同様の平安・鎌倉時代の土師器1点・瓦器1点、須恵器1点が出土した。下部で遺物は出土していない。



写真36 2007-III区 調査区南西壁断面土層
(南東から)



写真37 2007-III区 C12-g1 2井戸東西断面土層
(南から)



写真38 2007-III区 1溝-5井戸間の断面土層
(東南東から)

1溝（図 25・27・49、写真 39、写真図版 14・15・38・39）

1溝は、III区の西半部に位置し、南側から調査地を斜め（N-31°～33°-W）に横切り、5井戸の手前で西側に屈曲（内角約115°）する。一方、溝は調査区北壁断面土層には現れないが、検出・掘削した平面形では、5井戸の東側で直線的に北西方向に延びているように見受けられる。基底部の深さは、南端と西端ではさほどの差がなく、走向を判断できない状態にある。

埋土の最下層は、自然堆積層（図27の8・9）で、9は流水痕跡、8は濁み状態の認められる状況にある。断面土層位置では、図27の2～4において掘り直しと思われる堆積層序を示すが、調査区南壁及び南西壁では認めることができない。

遺物（766点）は、図27の3下半～4にかけて集中する。奈良～平安時代（470点）の須恵器、土師器・黒色土器、平安時代末～鎌倉時代（292点）の土師器（88・89）・瓦器（90・91）・砥石（117）等がある。5井戸の東側では、鎌倉時代以前の遺物が特に集中する傾向にあり、別遺構の重複をも考える必要がある。中には白鳳期の凹面布目痕・凸面格子叩きの瓦1点（249）が出土した。

6土坑（図28、写真40、写真図版16）

6土坑は、III区の北西側で1溝と重複して位置する。東西3.1m・南北3.0m・深さ0.7mで、やや歪な隅円方形状を呈する。法面の立ち上がりは比較的緩やかで、丸みをもって基底部に達する。基底部では、南東から北西に向かって緩傾斜するものの、最大2×2mの歪な面を認めることができる。埋土は、大別して3区分できる。上位層は図28の4～6で基盤層II・IIIを成因とし、下位層は図28の7・8・10で褐灰色から黒褐色シルトを主体とする。最下層は、粗砂礫を多量に含み基盤層IVを成因とする埋積である。

遺物は、土器と思われるものは一切ない。6土坑に関して、基底部に堆積した埋土（図28の8・9）の一部と当遺構と関連性の高い基盤層IV黄褐色粗砂礫の一部を採取し（土嚢袋18袋分）、遺物の洗い出し作業を行った。石器製作に伴う剥片と判断した凝灰岩（硬質頁岩）製剥片1片（写真42）が出土した。

3土坑（写真図版16）

2007-III区の西半部で1溝と重複して位置する。東西0.85m・南北0.75m・深さ0.50mの規模で、

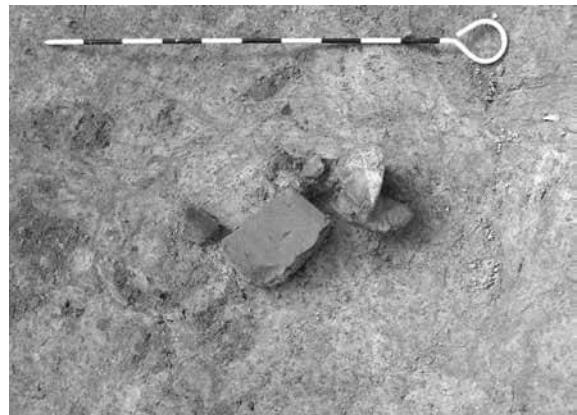


写真39 2007-III区 1溝遺物出土状況(南南東から)



写真40 2007-III区 C11-k25・C12-k1 6土坑
(北東から)



写真41 2007-III区 C11-k25・C12-k1 4土坑
(北から)

円形状を呈する。埋土は、褐灰色系から黒褐色系シルトで自然堆積と思われる。遺物は出土していない。石器遺物ではないが、6土坑で選別した類いの泥岩・粘板岩の小片が数点出土したのみである。

4土坑（図28、写真41）

4土坑は、2007-III区の北西側に位置し、1溝・6土坑と重複関係にある。4土坑は、1溝より古く、6土坑より新しい段階にある。短軸0.84m・長軸1.8m・深さ平均0.32mの規模で、北端は凹凸の著しい状況にある。埋土は、図28に示すように3土坑と類似している。遺物は出土していない。

6土坑出土の凝灰岩（硬質頁岩）製剥片（写真42）

凝灰岩（硬質頁岩）製剥片は、長さ18mm・幅11mm・厚み6.5mmを測る小片である。剥片そのものは、乳濁色を呈し非常に風化の著しいものと見受けられる。剥片は、明瞭に打瘤痕が観察できることから石器製作に伴う剥片と判断した。剥片の先端部に非常に細かな割れが認められるが、乳濁色の色調よりやや鮮明な状態にあるため調査時に生じた欠けである可能性が高い。

断定するには至らなかったが、石器剥片の出土から6土坑は縄文時代以前に遡る遺構の蓋然性が高いものとなった。なお、基盤層IIIbの下部に一定の広がりが認められる基盤層IV黄褐色粗砂細礫は、6土坑の基底部でも確認されている。基盤層IVにも人為的な石器剥片が含まれるかどうかの検討は、その後の調査2008-III区・VII区下位面において明確にすることができる。なお、選別作業によって得られた自然礫の大半は、基盤層IVが成因となるものと思われるが、量の多い順から泥岩・粘板岩・砂岩・チャート系・長石・石英・その他不明となる。



写真42 2007-III区 6土坑出土の石器剥片

5 小結

調査の成果と周辺の現状地形から、さらに調査地付近の古い微地形を考える事が可能となった。鎌倉時代から室町時代にかけての旧地形は、2006-III区・2007-I・II区や2007-III区から2006-I・II区の方向へ緩やかに下降し、北西側の神楽山南東麓に沿う谷地形を形成していることが判明した。ただ、2007-I・II区の北端より南端の方が30cm程度低くなることから、部分的に下位層の自然流路等の影響による微低地が入り込んでいる様相も理解できる。

また、現状地形から考えて、調査地2007-III区の東側の天満川を境にして北東側に位置する天満II遺跡（図2の17）に向かって高位の地形を形成している。2007-III区の東側では、既に県道工事が進捗している状態であったが、中世と思われる土器破片数片を採取した。このことから、2007-III区の東側にも中世の何らかの遺跡の展開が想定されるところであった。

今回の2007-I・II区周辺でも、2006-III区を含めて縄文・弥生・古墳時代の集落からも外れた範囲である事も確実となった。2007-I・II区周辺の鎌倉時代以前の状況は、2006-III区を含めて上位層での流水痕跡を留めた自然流路などが確認されなかった事から考えれば、土地利用のされない荒廃した立地と考える事が可能である。平安時代については、2007-III区の鎌倉時代の溝からの出土ながらまとまりのある遺物群が存在することから、狭い範囲に平安時代の一定の遺構の広がりを考えることが可能となった。これは、1980（昭和55）年度から1981（昭和56）年度にかけて調査が実施された藤

並地区遺跡（32）の南西側範囲や野田地区遺跡の近接する範囲とは別の広がりをもつものである。

今回の調査の内、2007-I・II区で検出した土坑群は、埋土の堆積状況から一部に自然堆積と認められるものがあることから一概に土坑墓としての性格を与えることのできない結果となった。湯浅御坊道路 1991（平成 2）年度調査のC区土坑群を土壙墓群と性格付けた意味合いを、再検討する必要がある。

基盤層に関して、全体を通した層序関係を見ると、2006-III区の基盤層III・IV褐灰色系シルト（写真 29）と 2007-III区の 6 土坑の堆積層（図 28 の 7・8・10）、2007-III区の 3・4 土坑の堆積層全般、2007-I・II区の基盤層IIIが非常に似通った状況にある。ただ、2006-III区では 2007-III区の 3・4 土坑に類似した埋土遺構が基盤層IIIより上位の面から切り込まれていたことから、一概に基盤層III類似層が同一の成因・時期とはできない。故に、2006-III区の基盤層III・IVが縄文時代の堆積層に対応するかどうかは俄かに判断し難いところでもあった。

また、2007-I・II区においては、基盤層IIIより下位に基盤層VI・VIIが存在する。2007（平成 19）年度の調査で明確な根拠を得る事ができなかったが、基盤層VIIが締りのあるシルトであることから旧石器時代の基盤層が存在するものと思われた。この事から周辺部での旧石器時代の遺構と遺物を考えるに当って、下部基盤層の時代認定を検討する必要があるものと思われた。と共に、2007-III区周辺は元より、広範において旧石器時代の遺構・遺物・層序の検出に当たって注意が喚起されるところでもあった。

第3節 第3・4次調査（2008 年度）

1 調査の概要

調査地は、大きく 7箇所に別れ、地点の違いにより 2008-I 区～VII区と呼称して調査を行った。調査は、7 地区合計 2,237 m²（調査対象面積 3,138 m²）について実施した。

また、掘削排土の仮置場が十分確保できない 2008-I・II・VI区は各々東側半分と西側半分に分割する反転方式で調査を行った。これに伴い、2008-I・II・VI区では航空写真撮影も分割して作業を行った。なお、2008-IV区～VII区は、県文化遺産課・県建設部から追加変更の依頼のあった地区である。

今次の調査では調査区が複数に分かれるため、検出遺構等の記述は、西側の範囲 2008-I・IV・VI区、中央の範囲 2008-II区、東側の範囲 2008-III・VII区の順で行うこととする。

検出遺構

検出遺構は、各地区において様相を異にするため詳細は後述するが、ここでは大要を記述する。

2008-I・II・IV・VI区の遺構は、主に中世遺物包含層（第 3 層・第 4 層）上面と旧石器時代以降の形成層の直上（第 3 層・第 4 層下面）で確認できた。

調査区内、2008-III・VII区は、昭和 30 年代の大規模な粘土採掘による改変に伴う水田造成のため中世遺物包含層の全てが削平され、粘土採掘坑に充填されていた。この地区では、上位面の遺構と一部下位面の調査によって下位面の遺構と自然地形を確認することができた。

遺構の主だったものとして、2008-I・IV・VI区では鎌倉時代の土坑・水田耕作に伴う不整形な小溝群などを、2008-II区では奈良時代の掘立柱建物、時代不明の土坑・溝などを、2008-III・VII区では上位面の調査で褐灰色系シルトを埋土とする土坑・落ち込み状遺構などを検出した。また、既往の調査と同様に何れの地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構を多数検出した。

特筆すべき事項として、2008-III区補足調査、2008-VII区下位面として行った調査において既往の

調査では確認されていなかった旧石器時代の堆積層（粗砂細礫層）や往時の自然地形と石器・石器剥片類、更に下位の基盤層を確定できたことにある。

出土遺物（図49・写真図版39）

出土遺物の大半は、主に各地区の包含層や2008-I・VII区の粘土採掘坑の改変土から出土した鎌倉・室町時代の土器類で占められる。鎌倉・室町時代の遺物には、土師器（皿・土釜）、瓦器（小壺・甕・椀・皿）、須恵器捏鉢、瓦、砂岩製砥石、陶器（備前・常滑）、磁器（青磁・白磁）、錢貨などがある。

その他、旧石器時代のナイフ形石器・石器剥片、縄文時代の石鏃、弥生時代の土器（甕）、奈良時代の須恵器（壺・甕・坏・坏蓋）・瓦などがある。

2 2008-I区 調査面積 84 m²（調査対象面積 114 m²）（図29・30、写真43、写真図版17・18）

I区は、一般国道42号湯浅御坊道路（1990（平成2）年度調査のB地区より西側、同1992（平成4）年度調査のA地区の南東側に位置する（図3）。

I区は、後世の果樹園の造成のため大半の耕作土・床土が削平され、造成土（岩碎礫）が中世遺物包含層第3層（中世水田耕作土）に喰い込む状態となっていた。

遺構検出面と出土遺物

I区の遺構は、中世遺物包含層第3層下面（旧石器時代以降の形成層の直上）で確認できた。遺構調査は、第3層下面で行った。中世遺物包含層第4層は、形成層として遺存せずに踏み込み遺構の集合体として遺存するのみであった。

遺物（71点）は、遺物包含層第3・4層から鎌倉時代を主体とした土師器（皿・土釜）、瓦器（椀・皿）、須恵器（甕）が出土した。

水田区画畦畔と考えられる南北方向の基盤層の盛り上がり（図29、写真43、写真図版17）

遺構の主だったものとして、I区西側調査地で鎌倉時代の水田区画畦畔と考えられる南北方向の基盤層の盛り上がり2条を検出した。盛り上がりの高さは、第3層（中世水田耕作土）下面からすると0.08mを測る。盛り上がりの走行は、N-11°-Eである。基盤層の盛り上がりの上位に人為的な盛土を確認していないため、畦畔と考える見解に否定的な意見もある。なお、現況地形では特に走行性の定まった地形区画は認められない。



写真43 2008-I区西側西 水田区画（南西から）

人間・牛の足跡（写真図版17・18）

また、既往の調査と同様に何れの範囲においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込みを多数検出した。特に、水田を形成していると考えられる第3層系堆積層を埋土とする踏み込み遺構が多数存在する。

シルト層に喰い込む自然石（角礫）の性格（写真43）

調査区の範囲内には、下部基盤層のシルト層に喰い込む状態で拳大から人頭大の自然石（角礫）が比較的多く存在した（写真43手前の角礫）。特に、I区西側調査区の南西端に集中して多く見受けられ、I区東側調査区にも散在的に認めることができた。これらの自然石の埋没が人為的な所産によるかどう

かを確認するため、調査区南西壁断面土層の詳細な観察、検出平面の再々にわたる観察を行ったが、人為的な掘形・埋め込みの状態を確認することができなかった。結果的には、下部基盤層のシルト層が不安定な状態の時に北西側の丘陵斜面からの転石と考えるに至っている。後述するI区より南西側のVI区北東半・南西半の調査区においても多数認められるところである。

自然石(角礫)は、当地区の北東側に位置する2008-IV区では殆ど見受けられない。また、2006-I・II区では、第3層系・第4層系堆積層に含まれるもの、基盤層内には包含しない。

3 2008-IV区 調査面積 154 m²(調査対象面積 172 m²)(図31・32、写真44・45、写真図版19)

2008-IV区は、2008-I区の北東側に位置し、一般国道42号湯浅御坊道路(1990(平成2)年度調査のB地区より西側、同1992(平成4)年度調査のA地区の南東側に位置する。

遺構検出面と出土遺物(図32、写真44)

2008-IV区の遺構は、中世遺物包含層第3層上面と第3層下面(旧石器時代以降の形成層の直上)で確認できた。調査区の一部に中世遺物包含層第4層が遺存する。

遺物は(299点)、遺物包含層第3・3'層・4層から鎌倉時代を主体とした土師器(皿・土釜)、瓦器(椀)、須恵器(甕・須恵質捏鉢)、奈良時代の須恵器(壺・甕)が出土した。

水田耕作に伴う不整形な小溝群(写真45)

遺構の主だったものとして、2008-IV区東側中央E12-x・y7で鎌倉・室町時代の水田耕作に伴う不整形な小溝群を多数検出した。不整形な小溝群は、最大幅員0.6m・最小幅員0.15m・深さ0.02~0.03mで、東西方向N-86°-EからN-85°-Wに走行する。埋土は、中世遺物包含層第4層である。

第3'層埋土の落ち込み

IV区西側F12-a6~d6・7では東西13m・南北2.7m以上・検出最深0.1mにおよぶ第3'層埋土の落ち込みを検出した。また、既往の調査と同様に当地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構を多数検出した。

その他の遺構

その他、調査区東壁断面土層E12-x6にかかつて褐色から黒褐色系シルト埋土の土坑が1基確認させていたが、壁面崩壊のため断面土層図に記録することができなかった。また、中世遺物包含層第3層上面の遺構は、第2層(現代の床土)下面に該当し、中世以後、江戸時代から近代に至る間の耕作に伴う痕跡と考えられる。記録は、デジタルカメラによるスナップ写真に留めた。



写真44 2008-IV区 F12-d6 調査区北壁断面土層
(南南東から)



写真45 2008-IV区 E12-x7・F12-a7 小溝群
(西から)

4 2008-VI区 調査面積 121 m²(調査対象面積 147 m²) (図 33～36、写真 46、写真図版 20・21)

2008-VI区は、2008-I 区の南西側に位置し、今次の調査では最も西端の地区になる。県文化遺産課の確認調査 29 トレンチの設定地区に該当する。また、一般国道 42 号湯浅御坊道路から国道 42 号線への導入路部分の調査（1980（昭和 55）年度）I 区とは、僅か約 80 m の位置関係にある。

遺構検出面と出土遺物

2008-VI区の遺構は、中世遺物包含層第 3 層下面（旧石器時代以降の形成層の直上）で確認できた。調査区の一部に中世遺物包含層第 4 層が遺存する。第 4 層の一部は形成層として遺存せずに踏み込み遺構の集合体として遺存する範囲もある。遺構は、第 3 層に掘り込まれた状態で溝 1 条、第 3 層下面で不整形な土坑数基が、2008-VI区南西端で第 3 層に掘り込まれた土坑 1 基などがある。

なお、下位層の旧石器時代を対象とした調査は行っていない。

遺物（267 点）の大半は、中世遺物包含層第 3 層からの出土である。一部は、踏み込み遺構の集合体としての第 4 層系埋土からの出土である。

1 溝（図 36、写真 46、写真図版 20）

第 3 層下面で、東西に走行する 1 溝を検出した。

1 溝は、VI区南西半中央から南側 F12-p5～q16 に位置する。県文化遺産課の確認調査 29 トレンチ部分に該当する。

溝は、基本的に東西に走行するが、西側では南西方向に浅い落ちの広がりが認められる。1 溝は、最大幅員 1.35m・深さ 0.90 m・延長 6.5 m 分を検出した。埋土は、自然堆積と考えられ、上端部では包含層第 3 層は窪まず、第 3 層によって整形された状態にある。また、溝の埋土に第 4 層系の堆積層を含まない。埋土の中位以下に厚さ約 40 cm の木屑層（幾層にもわたる木つ端・木の葉層：図 36 の E）を形成するが、流水による影響が及んだためか、肩崩れを起こし基盤層類似土が木屑層の上に覆い被さる。

木屑層の埋没状況は、2008-VII区下位面の補足調査による地山基盤層直上の木屑層基盤層に類似するが、性格・相関関係は不明である。遺物は出土していない。

1 溝は、包含層第 3 層（室町時代）によって埋土の上端部が削平されること、第 4 層系の堆積層（鎌倉時代）が存在しないことから両層の形成の過渡期に掘削されたとも考えられる。

11 土坑（図 35、写真図版 21）

11 土坑は、第 3 層下面で、2008-VI区北東半の南寄り F12-o13 に位置する。11 土坑は、南北 0.45 m・東西 0.40 m・深さ 0.17 m を測り、やや歪な隅丸方形を呈する。埋土は、基盤層のブロック土が少量入ることから、人為的埋土の可能性が高い。遺物は出土していない。

不整形な土坑群

不整形な土坑群は、2008-VI区南西半の 1 溝より南側 F12-p・q16 に集中して位置する。最深 0.10 m 前後で、埋土は第 4 層系の堆積層である。特に方向性のある配置は認められない。

2 溝

2 溝は、2008-VI区南西半の南端 F12-q16 に位置し、上記の不整形な土坑に重複する。2008-VI



写真 46 2008-VI区南西半 F12-p15
1 溝調査区南東壁断面土層（西から）

区南西半では、最も上位の遺構である。2溝は、南北方向N-12°-Wに走行し、幅員0.25～0.40m・深さ0.10～0.15m・延長約2.3m分を検出した。埋土は、粗砂を主体として少量の細礫を含む単層であり、自然堆積か人為的埋土かは不明である。遺物は、近代と思われる磁器が1点出土した。

5 2008-II区 調査面積824m²(調査対象面積868m²)(図37～40、写真47、写真図版22～24)

2008-II区は、2007-II区とは町道を隔てて北側に位置し、一般国道42号湯浅御坊道路(1990(平成2)年度調査のB地区より東側に位置する。県文化遺産課の確認調査10～13・18トレンチの設定地区に該当する。

遺構検出面と出土遺物

2008-II区の遺構は、中世遺物包含層第3層下面と旧石器時代以降の形成層の直上で確認できた。

遺構の主だったものとして、奈良時代の掘立柱建物1棟・落ち込み状遺構1条、鎌倉・室町時代の土坑10基・落ち込み状遺構・水田耕作に伴う不整形な小溝群などを検出した。また、人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構を多数検出した。

遺物(1,290点)は、中世遺物包含層第3層から鎌倉時代を主体とした土師器・瓦器を始め、奈良時代の須恵器、サヌカイト剥片、錢貨などが出土した。

2008-II区では第3層系・第4層系遺物包含層は、主に北半側の低い範囲に遺存するのみであった。

ここでは、主な遺構についてのみ記述する。

掘立柱建物1(図40、写真図版23・24)

掘立柱建物1は、2008-II区の北西隅E12-o・p17～19に位置し、南北桁行3間(東側柱並び6.60m・西側柱並び6.65m)×東西梁行2間(北側柱並び4.65m・南側柱並び4.80m)の南北棟の側柱建物である。柱穴掘形は、方形・長方形・歪な方形を呈し、一辺最小寸法0.54m～最大寸法0.77mを測る。柱穴柱当りに該当する埋土部分は、円形を呈し、最小寸法径0.13m～最大寸法径0.31m、深さ最浅0.26m～最深0.46mである。

掘立柱建物1は、棟方向が東側柱並びでN-5°-E、西側柱並びでN-8°-Eである。

埋土は、柱穴掘形は人為的埋土、柱穴柱当りは人為的埋土もしくは自然埋没、そしてその両方を合わせ持つ三過程が認められる。中には埋土に炭粒を多量に含み、焼成粘土塊を包含する33柱穴(写真図版24-1)も存在する。

遺物は、柱穴掘形・柱当り埋土から奈良時代の須恵器壺・蓋・甕、土師器甕の小片30点が出土した。

21 土坑(写真図版24)

21土坑は、2008-II区の西側南寄りE12-o・p22に位置する。東西長軸5.0m・南北短軸3.4m・最深部0.10mの規模である。埋土は、基盤層のブロック土を少量含む黄灰色シルトで人為的埋土と考えられる。遺物は、鎌倉時代の瓦器碗・土師器皿、須恵器壺の小片20点が出土した。

耕作に伴う小溝群(図38、写真図版22)

耕作に伴う小溝群を対象とした調査は、部分的にE12-m19区画周辺で行い、中世遺物包含層第3層下面(中世遺物包含層第4層上面)で検出した。

小溝群の走行は、南北方向がN-1°-WからN-2°20'-W、東西方向がN-82°30'-Eである。現況地形では、床土直下の暗渠排水溝に一定の方向性が認められ、南北方向がN-5°40'-W前後の1群とN-11°-W、N-20°-Wの3群がある。一部、小溝群との相関性が考えられる。

遺物は、鎌倉時代の瓦器・土師器の小片が数点出土した。

その他の遺構

その他の遺構として、調査区東壁断面土層 E12-n19において褐灰色から黒褐色系シルト埋土の土坑1基、調査区の中央北寄り E12-n19・20において同埋土の不整形な土坑状の窪みが東西楕円形状に配置する10遺構などがある。

また、人間の足跡と考えられる踏み込み遺構が特に集中する範囲を確認した。集中する範囲は、特に方向性・規模の規格性は認められなかった。

補足調査（写真図版24）

2008-II区西側E12-q22・23の調査区西壁沿いにおいて、天端面積約10m²（東西2.5m×南北4m）で補足調査を行った。補足調査では、調査区西壁断面土層での粗砂細礫層の層厚・層序関係と平面での粗砂細礫層の広がりを確認した。粗砂細礫層の下面は、最も高い部分でT.P.=17.60m前後である。ここでは、粗砂細礫層の採取は行っていない。



写真47 2008-II区東側 E12-n・m19・20
10遺構（北から）

6 2008-V区

調査面積 532 m²（調査対象面積 815 m²）

V区は、県文化遺産課の確認調査（27・28トレント）に伴う地区設定である。2006-II区と2008-II区に挟まれた範囲に位置し、一般国道42号湯浅御坊道路（1990（平成2）年度調査のB地区より東側に位置する。

遺構検出面と出土遺物

V区の遺構は、褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑などがあるが、詳細は県文化遺産課「県道吉備金屋線道路改良工事に伴う藤並地区遺跡確認調査報告書」に譲る。

遺物は、中世遺物包含層第3層から鎌倉時代を主体とした土師器・瓦器を始め、奈良時代の須恵器、瓦などが出土した。

7 2008-III区 調査面積 410 m²（調査対象面積 410 m²）（図41～44、写真47、写真図版25・26）

2008-III区は、2008-VII区の北隣、2007-III区の西側に位置し、今次の調査では東側の地区になる。県文化遺産課の確認調査22～25トレントの設定地区に該当する。計画当初は排土置場の関係から反転調査の予定であったが、北側に排土置場を確保できたことから一括調査が可能となった。

遺構検出面と出土遺物

III区は、昭和30年代の粘土採掘による改変に伴う水田造成のため中世遺物包含層の全てが削平され、1～3粘土採掘坑に充填されていた。また、調査開始直前に全ての耕作土・床土が除去されていた。この地区では、上位面の遺構と一部調査区南壁沿いの補足調査によって下位面の粗砂細礫層の状況を確認することができた。

遺構の主だったものとして、III区では土坑20基・柱穴状遺構3基・落ち込み状遺構3箇所などを検出した。

遺物（768点）は、奈良時代の須恵器・瓦、平安・鎌倉時代の遺物の土師器（皿・甕・土釜）、瓦器（椀・小皿）、須恵器捏鉢、砂岩製砥石、現代（昭和）の陶磁器・瓦・土管などがある。遺物の大半は、西側に位置する1～3粘土採掘坑に係る3次的な埋土からの出土である（765点）。

補足調査による粗砂細礫層からは、旧石器時代のサヌカイト製・凝灰岩（硬質頁岩）製の石器剥片が出土した（III区補足調査時には、石器が確認されず時代が確定できていなかった）。なお、一連の褐色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・柱穴状遺構・落ち込み状遺構からの遺物は皆無である。

ここでは、主な土坑・落ち込み状遺構についてのみ記述する。

4土坑（図43、写真48、写真図版25-3の手前の土坑）

4土坑は、2008-III区の東端部C11-n24・25に位置する。4土坑は、東西0.93m・南北0.70m以上・最深0.62mを測る。北側半部は、北壁際側溝の掘削により損壊した。埋土は、褐色系から黒褐色系シルトで自然堆積と思われる。遺物は出土していない。

10土坑（写真図版26）

10土坑は、2008-III区の中央東寄りC12-t1に位置する。10土坑は、東西短軸1.75m・南北長軸2.75m以上・最深0.70mを測り北側の調査区外に続く。土坑の北側から北壁際側溝位置で最も深くなり、歪な形状を呈している。埋土は、褐色系から黒褐色系シルトを基本として基盤層黄褐色シルトが入り込む。遺物は出土していない。

8落ち込み状遺構（写真図版26）

8落ち込み状遺構は、2008-III区の東側C11-o25～C12-r・s1に位置し、北側調査区外に延びる。また、南側は、VII区上位面C11-n・o25～C12-r2・s3へ続く遺構である。8落ち込み状遺構は、東西22.4m・南北13.2m以上・最深0.34mに及ぶ。埋土は、褐色系から黒褐色系シルトを基本とする。両地区を通して、遺物は出土していない。

1～3粘土採掘坑（写真49、写真図版25-2手前の遺構）

1～3粘土採掘坑は、2008-III区～VII区C11-x3・4・v5から西側にかけて位置する。県文化遺産課の確認調査22・23トレーニング部分に該当する。1～3粘土採掘坑の大半は、人為的な埋め戻しが行われ、最上層から中位にかけて中世遺物包含層（層厚約40cm）が充填されていた。そのため、当初は中世の遺構と判断して調査を進めた。1～3粘土採掘坑は、東西29m以上・南北25m以上・深さ1.2m以上の規模を有し、大きく3単位に分けて掘削→埋め戻し（山土・岩碎造成土（岩碎礫））を繰り返し、東側から西側に掘り進んでいる。下層ないし最下層に近い部分において昭和の陶磁器・瓦・土管が出土した。その時点で、粘土採掘坑に係る掘削を放棄した。

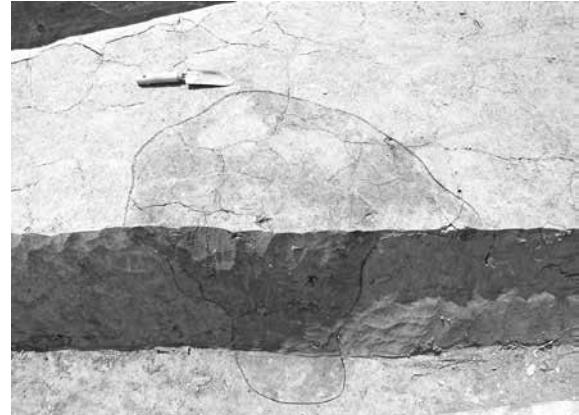


写真48 2008-III区 C11-n24・25
4土坑検出状況 (北から)



写真49 2008-III区 1～3粘土採掘坑 (東北東から)

また、元地権者の方から昭和30年代に瓦を焼くための粘土採掘がⅢ区・Ⅶ区において大規模に行われた事実を確認することができた。そのため、Ⅶ区上位面では粘土採掘坑の平面位置の確認に留め、掘削は行わなかった。

補足調査（写真図版26・39）

2008-Ⅲ区C12-s・t2の調査区南壁沿いにおいて、天端面積約9m²（東西3.5m×南北2.5m）で補足調査を行った。補足調査では、21土坑に關係した調査区南壁断面土層での粗砂細礫層の層厚・層序関係と平面での粗砂細礫層の広がりを確認した。粗砂細礫層の下面是、最も高い部分でT.P. 17.70m前後である。ここでは、粗砂細礫層の採取を行い（土嚢袋80袋分）、洗い出し・抽出作業を行った。その結果、調査時点では時代が確定できないながら、旧石器時代のサヌカイト製・凝灰岩（硬質頁岩：写真図版39-305）製石器剥片12点が出土した（写真図版39-305）。

8 2008-Ⅶ区 調査面積644m²・下位面の調査面積292m²（調査対象面積636m²）（図41～45、写真50、写真図版27～31）

2008-Ⅶ区は、2008-Ⅲ区の南隣、2007-Ⅲ区の西側に位置し、今次の調査では2008-Ⅲ区と共に東側の地区になる。県文化遺産課の確認調査32・33トレチの設定地区に該当する。計画当初は、2008-Ⅲ区と同様に排土置場の関係から反転調査の予定であったが、北側と南側に排土置場を確保できることから一括調査が可能となった。

遺構検出面

2008-Ⅶ区も2008-Ⅲ区と同様に粘土採掘による改変に伴う水田造成のため中世遺物包含層の全てが削平され、1～3粘土採掘坑に充填されていた。また、調査開始直前に全ての耕作土・床土が除去された。この地区では、上位面の遺構と一部下位面の調査を行うことができた。

〈2008-Ⅷ区上位面の調査と出土遺物〉

2008-Ⅶ区上位面では、土坑15基・落ち込み状遺構3箇所などを検出した。大半の遺構は、褐灰色系シルトを埋土とするものである。検出した土坑の内、53・54・55・56・57・58土坑は、8落ち込み状遺構の埋土を除去した下面においての検出である。

2008-Ⅶ区上位面の遺物（12点）の大半は、粘土採掘坑に係る埋土最上層から出土した鎌倉・室町時代の土器・瓦類で占められる。なお、一連の褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・柱穴状遺構・落ち込み状遺構からの遺物は皆無である。

ここでは、主な土坑・落ち込み状遺構についてのみ記述する。

46 土坑

46土坑は、2008-Ⅶ区の東側南寄りC12-q3に位置し、45落ち込みに重複する。46土坑は、東西長軸1.23m・南北短軸0.60m・最深0.48mで、長楕円形状を呈する。基底部の東寄りに径0.18m・最深0.20mの柱穴様の小穴が存在する。埋土は、灰黄褐色系シルトを基本とする。遺物は出土していない。

49 土坑（写真図版28）

49土坑は、2008-Ⅶ区の中央北寄りC12-s3に位置する。49土坑は、東西2.90m・南北1.75m・最深0.34mで、不整形な形状を呈する。埋土は、頻度の高い順に褐灰色系シルト・黒褐色系シルト・灰黄褐色系シルトを基本とする。遺物は出土していない。

55 土坑

55 土坑は、2008-VII区の東側北寄り C12-p・q 1 に位置する。55 土坑は、東西長軸 1.92 m・南北短軸 0.54 m・最深 0.10 m で、隅丸長方形の形状を呈する。埋土は、褐灰色系シルトを基本とする単層である。遺物は出土していない。

57 土坑（写真図版 28）

57 土坑は、2008-VII区の東側北寄り C12-o・p 1 で、55 土坑の東隣に位置する。57 土坑は、東西短軸 0.91 m・南北長軸 0.98 m・最深 0.20 m で、隅丸方形の形状を呈する。埋土は、褐灰色系シルトを基本とする。遺物は出土していない。

45 落ち込み状遺構

45 落ち込みは、2008-VII区の中央南寄り C12-q 3・4～s 3・4 に位置し、46 土坑が重複する。45 落ち込みは、東西 9.4 m・南北 3.5 m・最深 0.10 m を測り、やや歪な形状を呈する。埋土は、灰黄褐色系シルトを基本とし、直下の基盤層に類似する。遺物は出土していない。

〈2008-VII区下位面の調査と出土遺物〉（図 45、写真 50、写真図版 29・30）

2008-VII区下位面では、土坑 1 基、複数箇所の自然流路状の落ち込みを検出した。

2008-VII区下位面の出土遺物は、粗砂細礫層からの石器・石器剥片のみである。

下位面：101 土坑（図 44、写真 50、写真図版 29）

101 土坑は、下位面の調査で唯一掘り込みの認められる土坑である。調査区の中央南側 C12-r 3・4 に位置する。101 土坑は、東西長軸 1.5 m・南北短軸 0.84～1.05 m・最深 0.17 m で、歪な形状を呈する。土坑の法面は、北側と東側が比較的緩やかに傾斜し、南側が急角度で傾斜する。基底部は、北側から南側に向けて緩やかに傾斜するものの比較的平坦である。

埋土は、部分的に緑灰色ないし暗緑灰色粗砂細礫層が入った上に、褐灰色シルトないし黒褐色シルトが入り込む。堆積埋土の観察に努めながら丹念に掘削を行ったが、遺物は出土していない。

下位面：自然流路状の落ち込み

2008-VII区下位面は、粗砂細礫層を埋土とする大小の落ち込みによって形成され、全体の中で、大きく広い範囲で高低差を形成している。落ち込みの形状は様々であるが、タイプ分けすることも可能である。落ち込みの走行は、調査区西側では主に南東から北西を、東側では南西から北東を指向する。また、調査では、落ち込みの形状と粗砂細礫の大きさの相関関係にまで及んでいない。

粗砂細礫層は、調査区壁面の断面土層観察では一時に堆積したのではなく、複数回による堆積と見なされる状況にある。粗砂細礫層の堆積は、調査区全域に及ぶものであり、層厚 0.16 m～0.84 m を測る。

旧石器時代の遺物の抽出を目的とした粗砂細礫層の採取は、4 m 方眼を基本にしたが、採取位置・範囲について厳密にしていない。粗砂細礫層の採取に当たっては、極力、落ち込み内の粗砂細礫層の採取をも行ったが、現時点の資料では石器・石器剥片が特に多くなる傾向はなかった。

補足調査（巻頭写真図版 2・写真図版 31）



写真 50 2008-VII区下位面 C12-r3・4
101 土坑検出状況（南寄り西から）

2008-VII区下位面では、補足調査A・Bと呼称して2箇所で行った。

補足調査A（巻頭写真図版2）は、2008-VII区下位面C12-p3の調査区南壁沿いにおいて、天端面積約9m²（東西3m×南北3m）で行った。補足調査Aでは、調査区南壁断面土層での地山基盤層までの層厚・層序関係と下位層の確認を行った。最終的な掘削は、T.P.=14.00m前後（耕作土天端復元値T.P.=19.20m前後）まで行い、地山基盤層はT.P.=16.00m前後で確認した。

補足調査B（写真図版31）は、2008-VII区下位面C12-s・t4の調査区南壁沿いにおいて、天端面積約9m²（東西3m×南北3m）で行った。補足調査Bでも、補足調査Aと同様に調査区南壁断面土層での地山基盤層までの層厚・層序関係と下位層の確認を行った。最終的な掘削は、T.P.=15.30m前後（耕作土天端復元値T.P.=19.20m前後）まで行い、地山基盤層はT.P.=16.00m前後で確認した。

9 小結

2008年度の調査で、当該範囲の和歌山県土木部から依頼・県文化遺産課から指示のあった地区的調査を完了することになった。1980（昭和55）年度に海南湯浅道路の建設に際してその出入口にあたる吉備インターチェンジ（現、有田インターチェンジ）から国道42号線への導入路部分について、分布調査及び試掘調査が行われて以来、広範囲に及ぶ調査が行われてきた。

旧石器時代に関しては、2007年度の調査に伴う『平成19年度県道吉備金屋線道路改良工事に伴う藤並地区遺跡発掘調査の概要報告』では、「07-I区・07-II区においては、基盤層IIIより下位に基盤層VI・VIIが存在する。調査で明確な根拠を得る事ができなかったが、基盤層VIIが締りのあるシルトであることから旧石器時代の基盤層である所謂地山が存在するものと思われる。周辺部での旧石器時代の遺構と遺物を考えるに当って、下部基盤層の時代認定を検討する必要があるものと思われる。と共に、07-III区周辺は元より広範において、旧石器時代の遺構・遺物・層序の検出に当たって注意が喚起されるところである。」とした。

このことに関して、旧石器時代の基盤層である所謂地山は、今回の調査で更に下位に存在することが確定した。また、今回の調査による新たな成果を加えることにより藤並地区遺跡の理解に対して、旧石器時代の様相に一つの見解を提示することが可能となった。

この旧石器時代の自然地形・生活面に対応する同一層序は、既往の調査に伴う補足調査（2008-II区）、県文化遺産課確認調査30トレンチ（写真51）、道路本体工事に伴う深掘り部分（3箇所）の確認・観察に伴い粗砂細礫層の存在が確認されている（写真52）。これらのことから、旧石器時代の往時の自然地形・生活面は、今次の調査範囲全域（2006

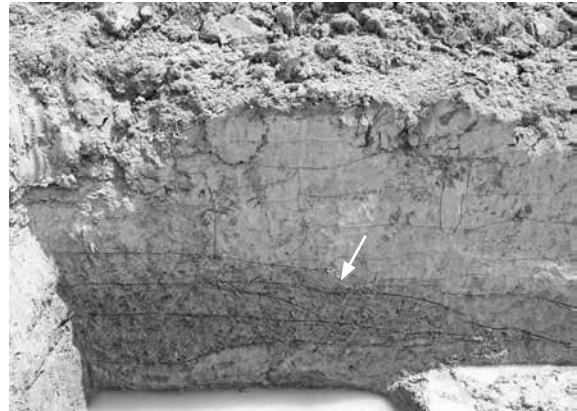


写真51 県文化遺産課確認調査30トレンチ
調査区南壁断面土層（北から）



写真52 2008-IV区 道路工事掘削部分
西壁断面土層（東から）

～2008年度調査)に広がるものと考えられる。

国道42号線への導入路部分の調査(1980(昭和55)年度)では、1980年度I区T.P.=17.50～18.00m前後で多数の自然流路と流路周辺に展開する旧石器時代の生活領域が検出されている。

土生池遺跡(有田川町土生)では、緩斜面地1984年度N・M・S地点T.P.=29.40～30.50m前後で土坑・自然流路などが多数検出されている。

一般国道42号湯浅御坊道路の建設工事に先立つ調査(1989(平成元)年度から1993(平成5)年度)では、1991年度M地区T.P.=24.50～25.20m前後で当該期の生活面に散在する石器・石器剥片の広がりが検出されている。

今次の2008-VII区下位面調査では、粗砂細礫層下面のT.P.=17.50～17.80m前後で土坑1基(101土坑)・多数の自然流路状の落ち込みを検出した。調査では詳細な観察ができなかつたが、調査地全体に厚薄に堆積する粗砂細礫層の在り方は、自然流路状と称するより土砂流等の作用による抉り込みが生じた痕跡と考えられる。

2008-II区では、補足調査ながら2008-VII区と類似するT.P.=17.60m前後で下位面の存在を確認している。また、2006-III区では、粗砂細礫層に関係する1層上位の粗砂層の上端面をT.P.=18.70m前後で確認している。更に、県文化遺産課の確認調査30トレンチにおいて粗砂細礫層に関する調査が行われ、T.P.=17.75～17.90m前後で確認されている。

これらのことから、旧石器時代に伴う遺物の確認できていない地点は実証性の低い状態となるが、同一層序の広範にわたる分布は土生池遺跡1984年度N・M・S地点、藤並地区遺跡1980年度I区、藤並地区遺跡1991年度M地区調査との関連性を強く示唆するところである。旧石器時代の自然地形・生活面に対応する同一層序は、生活領域を確定できないにしろナイフ形石器段階の展開を広範に認めるところである。

藤並地区遺跡1980年度I区での展開は、旧石器時代末の有舌尖頭器や縄文時代草創期の石鏃を伴う過渡的な時期と認識されることから、小期により領域の展開が土生・水尻・天満の範囲の中で移動・併存しているものと考えられる。

旧石器時代領域の広がり、小期の石器組成の変遷など、詳細検討については今後も藤並地区遺跡1980年度I区、土生池遺跡1984年度N・M・S地点、藤並地区遺跡1991年度M地区、藤並地区遺跡2008-III・VII区との関係の中で検討していきたい。

2007-III区において、6土坑と称した遺構については、調査時に最下位の堆積埋土と判断した粗砂細礫層から風化の著しい硬質頁岩製の剥片石器と認定した遺物(写真42)があり、旧石器時代の遺構と判断したところである。今次の2008-III区・VII区下位面の調査等から勘案すれば、粗砂細礫層出土遺物と判断したものは疑似石器と判断した方が良いと思われる。また、これは、2007-III区下位層の基盤層IV粗砂細礫層に伴うものと判断すべきと考えるに至った。

また、2008-III・VII区の上位面調査における褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・落ち込みは、先述したとおり、出土遺物が皆無のため的確な時期判断ができない。根拠に乏しいが、縄文時代から弥生時代前期に至る何れかの時期に対応するものと思われる。その他、調査の主体にはなっていないが2006-II・III区、2008-II区においても褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・落ち込みを確認している。但し、これらの土坑の堆積層には遺物が伴わない事、堆積層に人為的に手の加わった埋土でない可能性が高いことなどから、土坑は倒木等による自然の所産、落ち込みは自然地形への埋積になるものと考えたい。

第IV章 総括

出土遺物内容とその分布領域の性格に関して

2007-III区、2008-II・III・VII区の下位層で検出した後期旧石器時代遺物を包含する粗砂細礫層の成因については、南側に位置する1990年調査M地区及び土生池遺跡(25)周辺の谷間からの土砂流による堆積とみられ、ナイフ形石器という遺物の単純組成から一定の時期を反映したものと認めうることができたこととなった。後期旧石器時代の石器他の組成は、サヌカイト製ナイフ形石器・サヌカイト製横長剥片・チャート若しくは凝灰岩(硬質頁岩)製縦長剥片・サヌカイト製錐状石器、その他のサヌカイト・凝灰岩(硬質頁岩)・チャート製剥片がある。

縄文時代草創期・縄文時代晩期若しくは弥生時代前期・後期後半については、遺物が極めて少ないため、その内容を推し量るには無理があることが明らかとなった。

飛鳥時代末～奈良時代については、一定の遺物量と共に広域に散布する遺物の大半が二次的な中世遺物包含層(水田耕作土)からの出土であるため、全ての地区において窯場からの集積を反映したものでないことが確実視されることとなった。ただ、出土遺物の中には飛鳥IIの段階の須恵器が一定量認められることから、周辺域に展開する城山窯跡群(22)や地蔵山窯跡群(23)・風呂の谷窯跡群(24)などの須恵器窯の操業を今少し遡って考える必要を認めうる。一方、2008-II区において、単独で検出した奈良時代の掘立柱建物の位置付けを明確にすることができない。

平安時代後期は、掘立柱や溝を検出した2007-III区のみに当該期の遺構・遺物が集中して認められることが多く、2007-III区調査地から東側に水路を挟んで展開する未周知の遺跡に関与することが濃厚であると考えられる。

平安時代末～鎌倉時代前期の様相については、2007-III区の良好な遺物群から当該地区周辺を平安時代後期から続く集落の拠点として、2007-III区以西の調査地は中世における水田開発による二次的資料の包含(包含層第3層・第4層)として位置付け理解しうる。

以後、室町時代にかけて当該地一帯は水田経営の基盤となっている。鎌倉時代から室町時代の集落の中心は、既往の有田川町教育委員会の調査から、藤並地区遺跡の北側に位置する天満I遺跡(16)・天満II遺跡(17)にあるものと考えられる。

以上のように、調査・出土遺物整理作業によって得られた遺物内容とその分布領域から、藤並地区遺跡の周辺部の状況を踏まえてその変遷を把握することとなった。

【引用・参考文献】

- 吉松敏隆 1982『地理的環境』『田殿・尾中遺跡一庄地区道12号長田連絡改修工事に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書一』吉備町教育委員会
- 藤井保夫・渋谷高秀他 1985『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書—海南湯浅道路に伴う関連遺跡発掘調査一』和歌山県教育委員会
- 井石好裕他 1995『藤並地区遺跡発掘調査報告書—一般国道42号湯浅御坊道路(I)建設に伴う発掘調査一』(財)和歌山県文化財センター
- 2005『吉備町の文化財』吉備町教育委員会
- 川口修実・佐々木宏治 2008『旧吉備中学校校庭遺跡—有田川町公共下水処理施設建設に伴う発掘調査報告1—』有田川町遺跡調査会発掘調査報告書 第1集 有田川町遺跡調査会
- 川口修実 2008『藤並地区遺跡一町道吉備インター連絡線改修工事に伴う発掘調査一』有田川町遺跡調査会発掘調査報告書 第2集 有田川町遺跡調査会

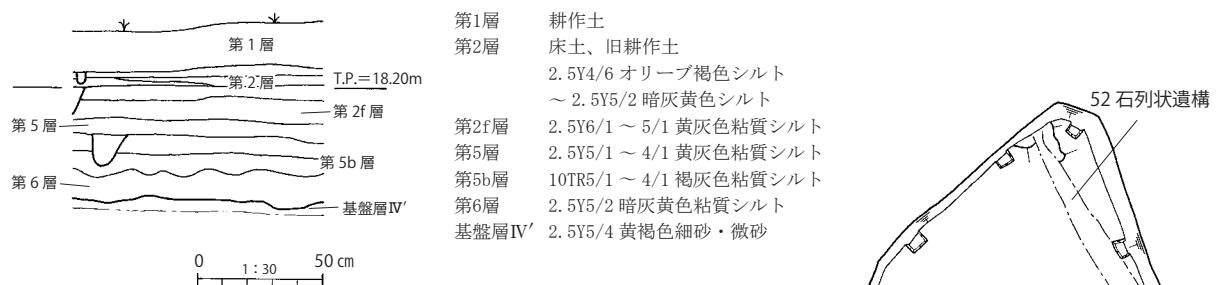


図7 2006-II区 基本土層 調査区北壁断面土層

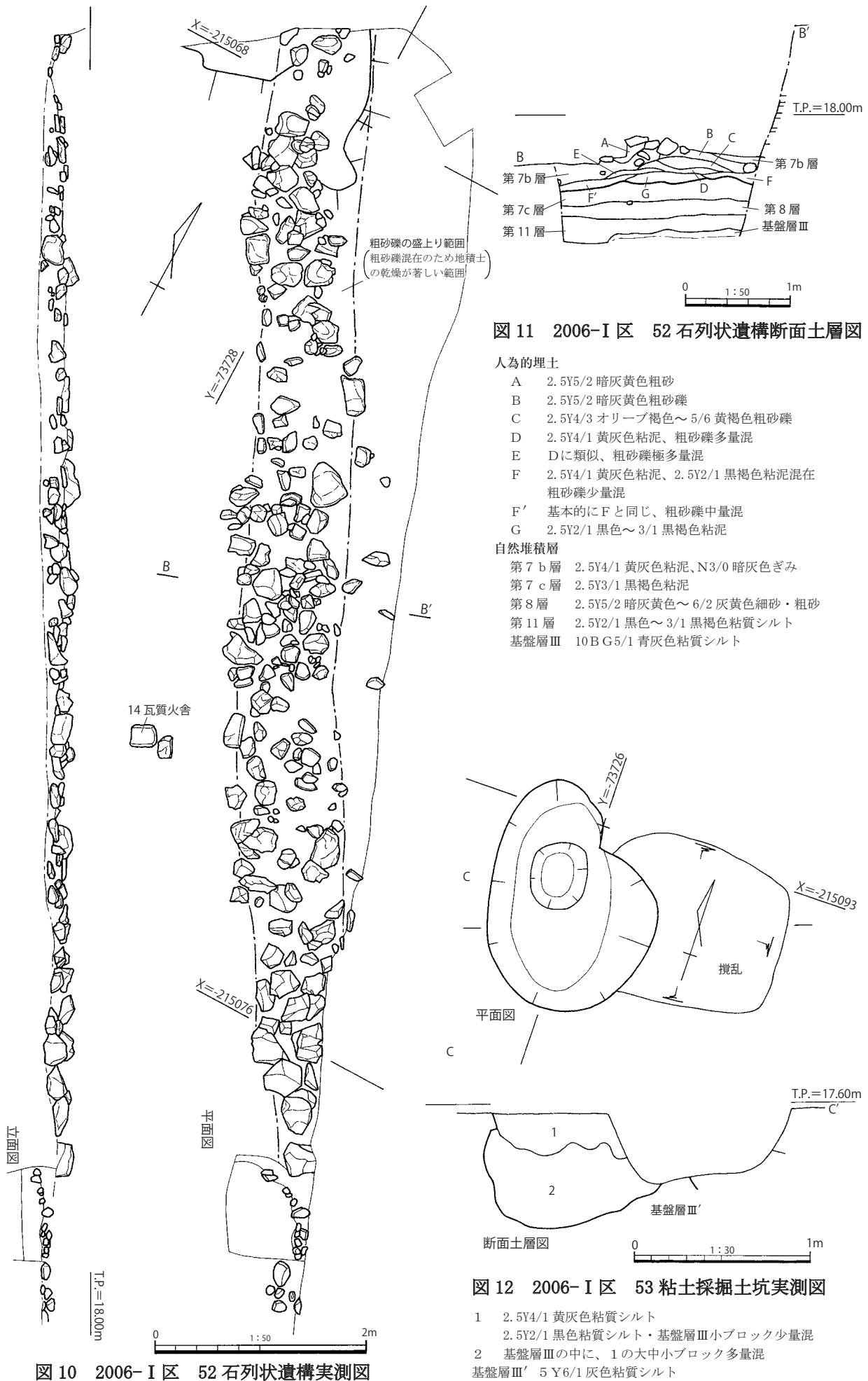


図8 2006-II区 基本土層 調査区南壁断面土層



図9 51谷状落ちの基本土層

第7a層 2.5Y4/1 黄灰色粘泥、粗砂礫混少量
第7b層 2.5Y4/1 黄灰色粘泥、N3/0 暗灰色ぎみ
第7c層 2.5Y3/1 黑褐色粘泥
第8層 2.5Y5/2 暗灰黄色～6/2 灰黄色細砂・粗砂
第9層 2.5Y5/1 黄灰色粘泥～6/1 黄灰色細砂・微砂、
基盤層V 10Y5/1 灰色粘質シルト
a 粗砂礫 2mmまで



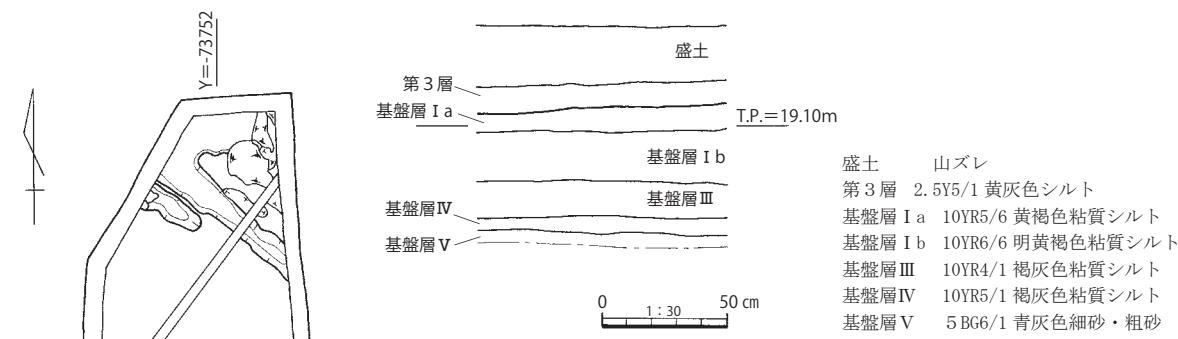


図 14 2006-III区 基本土層 調査区東壁断面土層

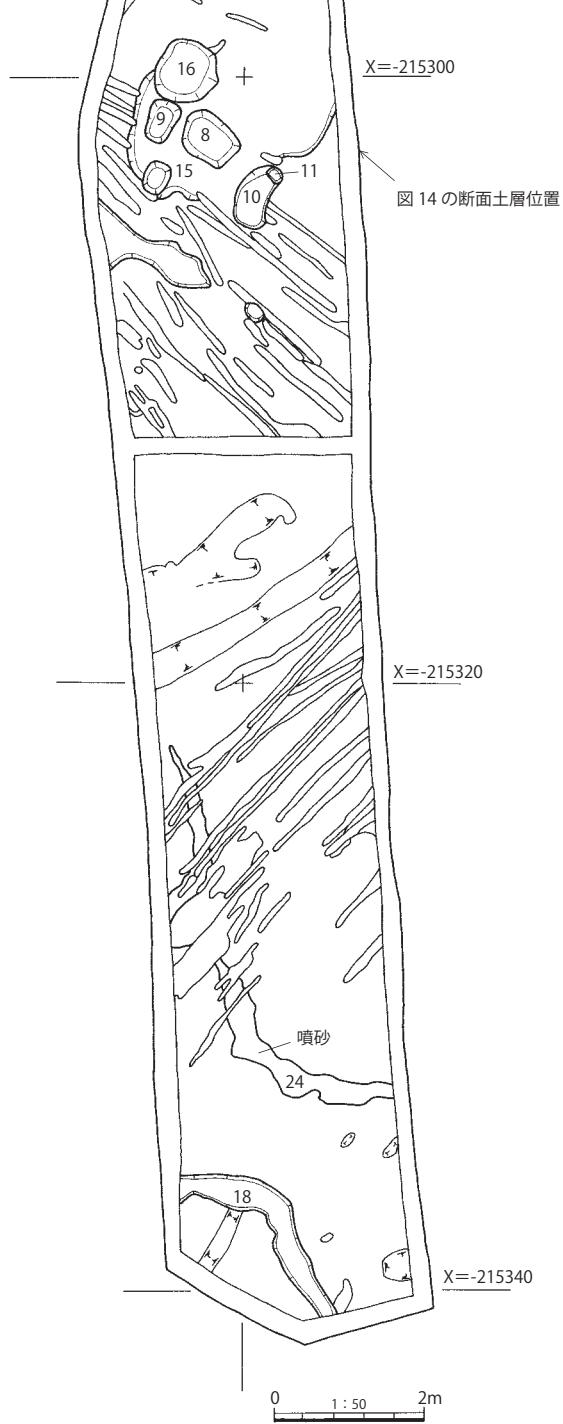


図 13 2006-III区 調査遺構全体図

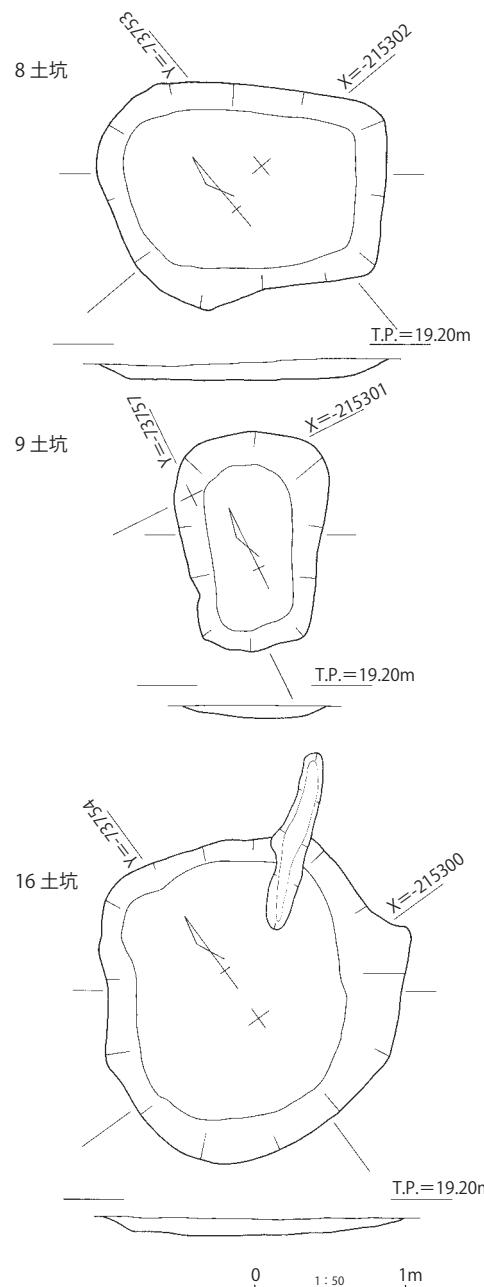


図 15 2006-III区 各土坑実測図

8 土坑 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト
9 土坑 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト
16 土坑 10YR6/1 褐灰色粘質シルト

図 17 の断面土層位置

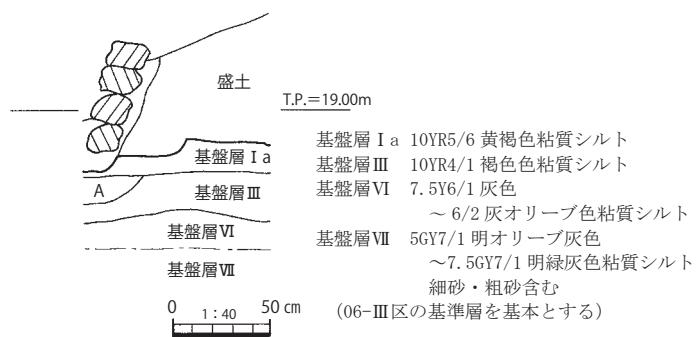
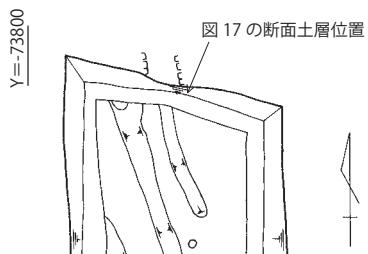


図 17 2007-I 区 基本土層 調査区北壁断面土層

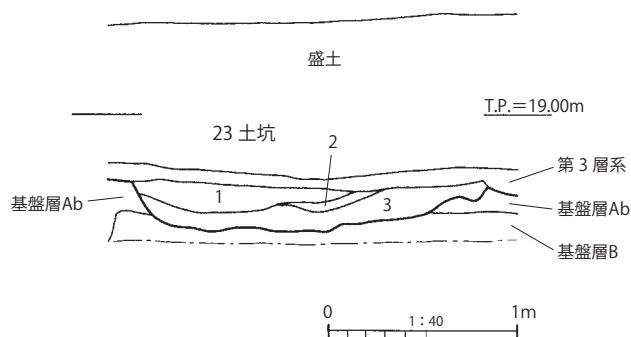
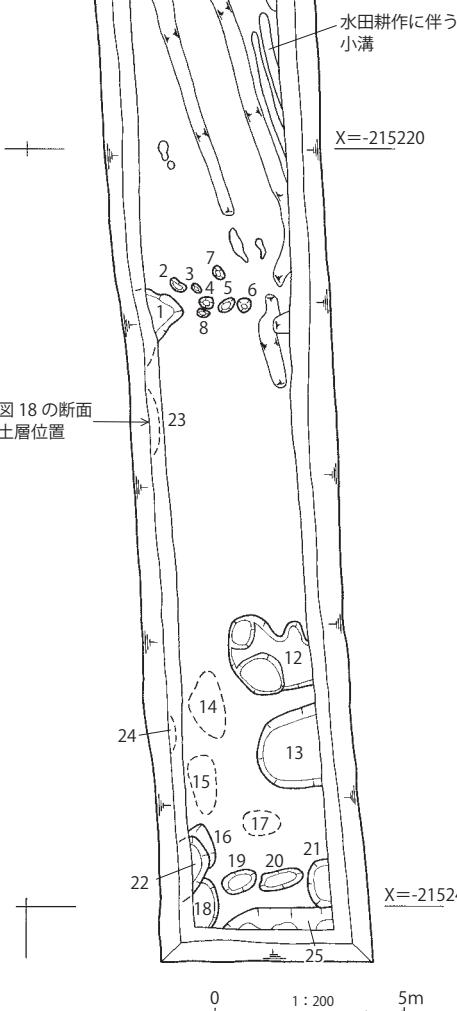


図 18 2007-I 区 23 土坑調査区西壁断面土層

基盤層 A	2. 5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト	} 混在
	2. 5Y5/4 黄褐色粘質シルト	
	2. 5Y5/1 黄褐色粘質シルト	

基盤層 Ab 基盤層 A に

10YR5/1 褐灰色粘質シルト縦筋状に多量

基盤層 B 2. 5Y6/1~5/1 黄灰色シルト

23 土坑

1 人為 10YR3/1 黒褐色粘質シルト中大ブロック極多量

2 自然 10YR3/2 黒褐色シルト

3 人為 10YR2/1 黒色粘質シルト中大ブロック極多量

図 16 2007-I 区 調査遺構全体図

- 1 人為 10YR5/1 褐灰色シルト
~10YR6/2 灰黄褐色シルト
- 2 人為 10YR6/1・10YR4/1 褐灰色シルト中大ブロック多量
10YR2/1 黒色シルト小中ブロック少量
10YR5/6 黄褐色・10YR4/6 褐色シルト中大ブロック中量
- 5 自然 2.5Y6/1 黄灰色シルト
- 6 自然 2.5Y6/1 黄灰色シルト、基盤層 B 中大ブロック多量

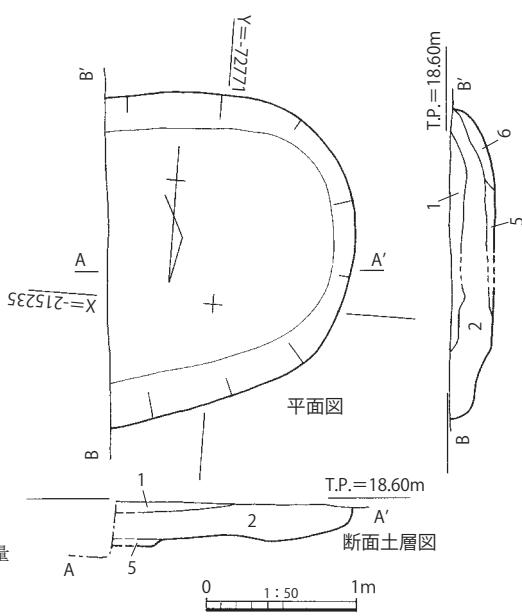


図 19 2007-I 区 13 土坑実測図

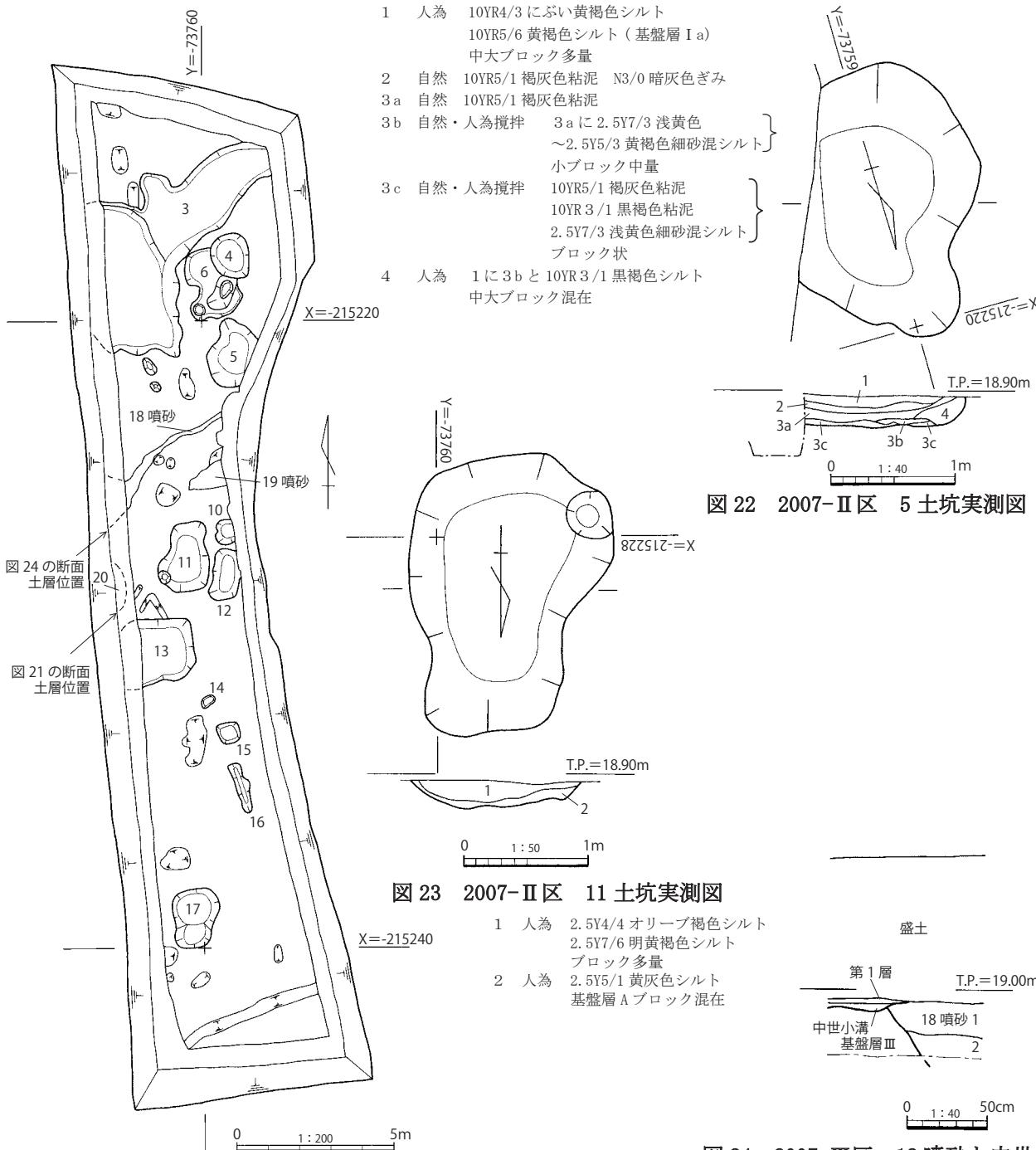


図 20 2007-II 区 調査遺構全体図

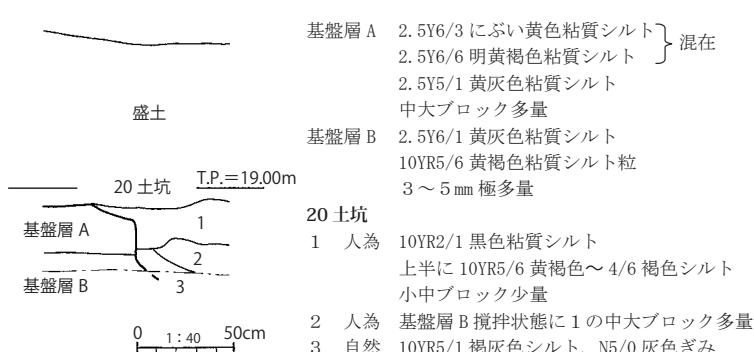


図 21 2007-II 区 基本土層 調査区西壁断面土層

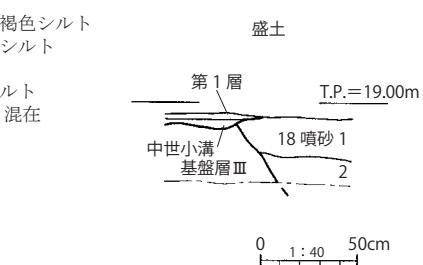


図 24 2007-III 区 18噴砂と中世
小溝の関係
調査区西壁断面土層

- | | | |
|-------|--------------------|---------------------------|
| 基盤層 A | 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト | 混在 |
| | 2.5Y6/6 明黄褐色粘質シルト | |
| 基盤層 B | 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト | |
| | 中大ブロック多量 | |
| 基盤層 B | 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト | |
| | 10YR5/6 黄褐色粘質シルト粒 | |
| | 3~5mm 極多量 | |
| 20土坑 | T.P.=19.00m | |
| 盛土 | | |
| 基盤層 A | 1 人為 | 10YR2/1 黒色粘質シルト |
| | | 上半に 10YR5/6 黄褐色～4/6 褐色シルト |
| | | 小中ブロック少量 |
| 基盤層 B | 2 人為 | 基盤層 B 搅拌状態に 1 の中大ブロック多量 |
| | 3 自然 | 10YR5/1 黄褐色シルト、N5/0 灰色ぎみ |

- | | |
|--------|--|
| 第1層 | 耕作土 |
| 第3層系 | 中世小溝 |
| | 2.5Y5/1 黄灰色シルト |
| 基盤層III | 10YR4/1 黄褐色粘質シルト
(I区北壁と同じ) |
| 18噴砂 | 1 2.5Y7/1 灰白色～7/2 灰黄色細砂
下半は、10YR5/4 にぶい黄褐色細砂・粗砂 |
| | 2 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂礫
礫 5mmまで
～7.5YR4/4 黄褐色細砂・粗砂 |

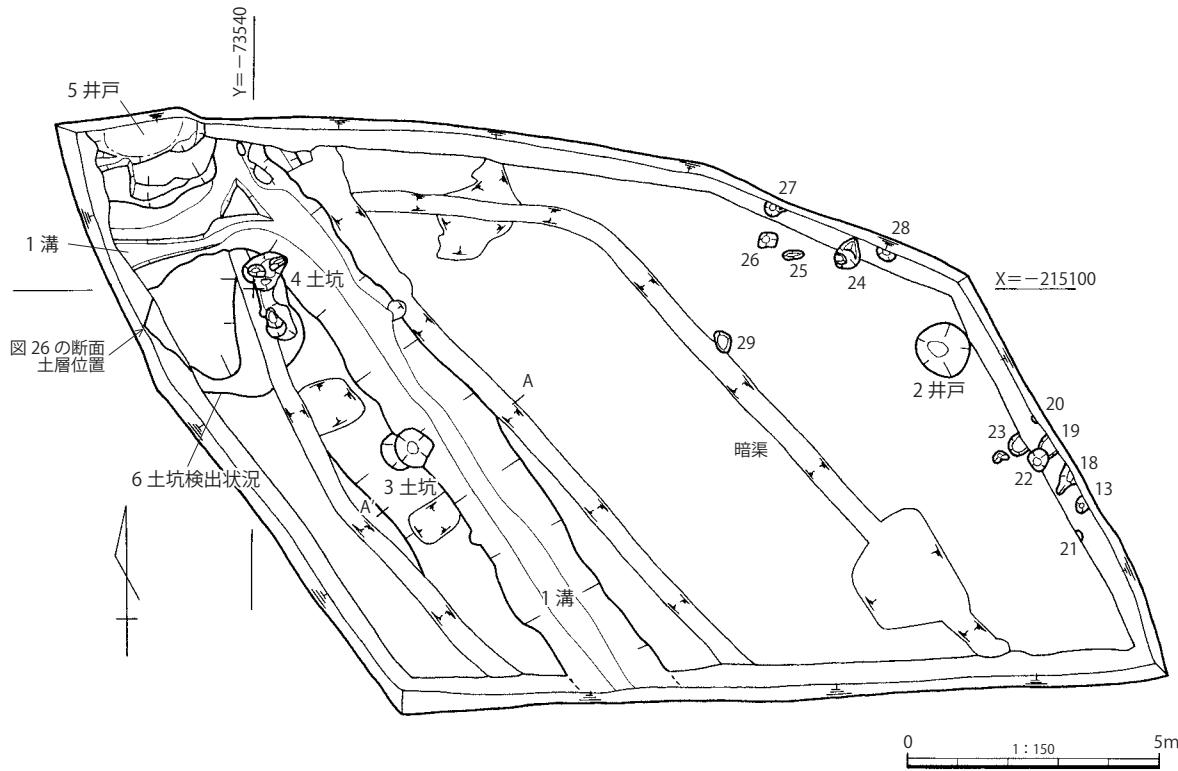


図 25 2007-III区 調査遺構全体図



図 26 2007-III区 基本土層 調査区南西壁断面土層

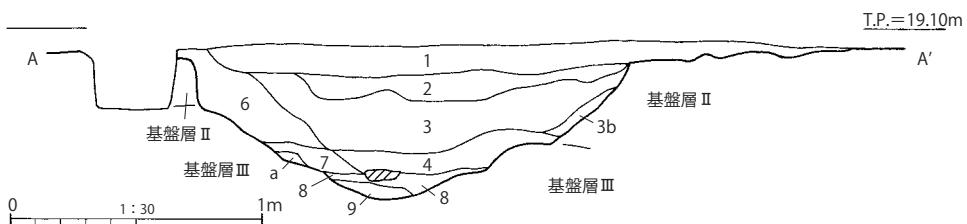


図 27 2007-III区 1溝断面土層図

- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 10YR6/1 棕灰色～6/2 灰黄褐色シルト | 6 人為 10YR3/1～3/2 黒褐色粘質シルト |
| 2 10YR5/2 灰黄褐色弱粘質シルト | 7.5 YR4/4 棕色シルト小ブロック少量 |
| 3 10YR5/2 灰黄褐色（弱砂質）シルト | 7 10YR4/1 棕灰色粘質シルト |
| 10YR3/1 黑褐色粘質シルト小中ブロック少量 | a 7 + 基盤層II・粗砂礫 |
| 3 b 3に基盤層II小ブロック多量 | 8 自然 10YR5/1 棕灰色粘質シルト |
| 4 10YR5/1 棕灰色粘質シルト | 9 自然 7.5YR5/6～5/8 明褐色粗砂礫、礫3～5mm多量 |
| 5 (南西壁：10YR5/2 灰黄褐色～5/3 にぶい黄褐色細砂) | 基盤層II・IIIは、図26と同じ |

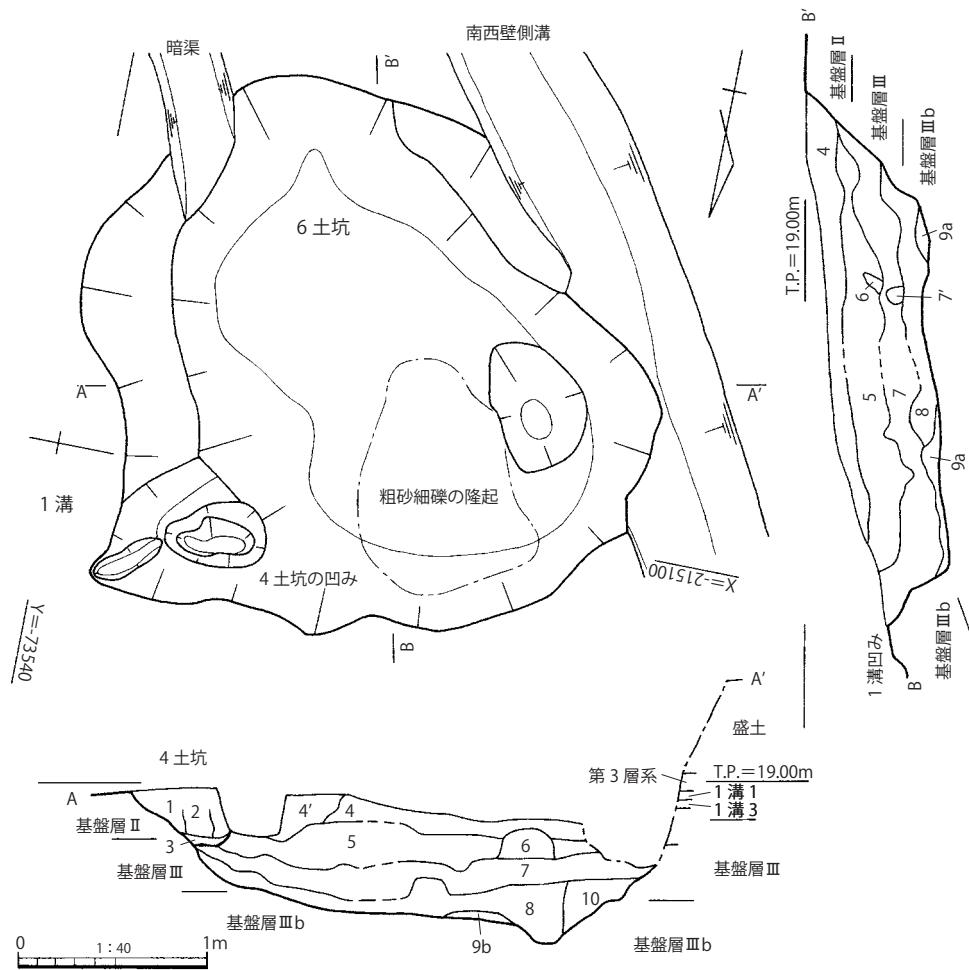


図 28 2007-III区 6 土坑実測図

6 土坑

- 4 10YR5/6 黄褐色シルト
- 4' 4 の 10YR3/3 暗褐色ぎみ
- 5 7.5YR5/6 明褐色シルト 10YR4/6 褐色ぎみ
基盤層Ⅲに類似
- 6 10YR5/6 黄褐色粗砂礫混シルト、礫 3~4 mm まで
10YR4/6 褐色ぎみ
- 7 10YR4/1 褐灰色シルト、基盤層Ⅲ中大ブロック多量
10YR3/1 黒褐色シルト小ブロック少量
- 7' 粗砂礫ブロック
- 8 10YR3/1 ~ 3/2 黒褐色シルトまだら
基盤層Ⅲ中大ブロック多量
- 9 a 10YR5/6 黄褐色・5/1 褐灰色細粗砂、礫 3~5 mm 少量
- 9 b 10YR5/2 ~ 4/2 灰黄褐色粗砂礫、礫 1~3 cm 角礫まで
- 10 基盤層Ⅲ + 10YR5/1 褐灰色シルト中ブロック少量
10YR3/1 黑褐色シルト中ブロック微量

4 土坑

- 1 10YR5/6 黄褐色～5/2 灰黄褐色シルトまだら
- 2 10YR3/3 暗褐色～3/2 黑褐色シルト
基盤層Ⅱ小ブロック中量
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト
基盤層Ⅲ中大ブロック少量
- 基盤層Ⅱ 10YR6/6 明黄褐色～6/4 にぶい黄橙色シルト
- 基盤層Ⅲ 7.5YR5/8 明褐色～10YR 4/6 褐色ぎみシルト
- 基盤層Ⅲb 7.5YR5/8 明褐色～10YR 4/6 褐色ぎみ細砂シルト

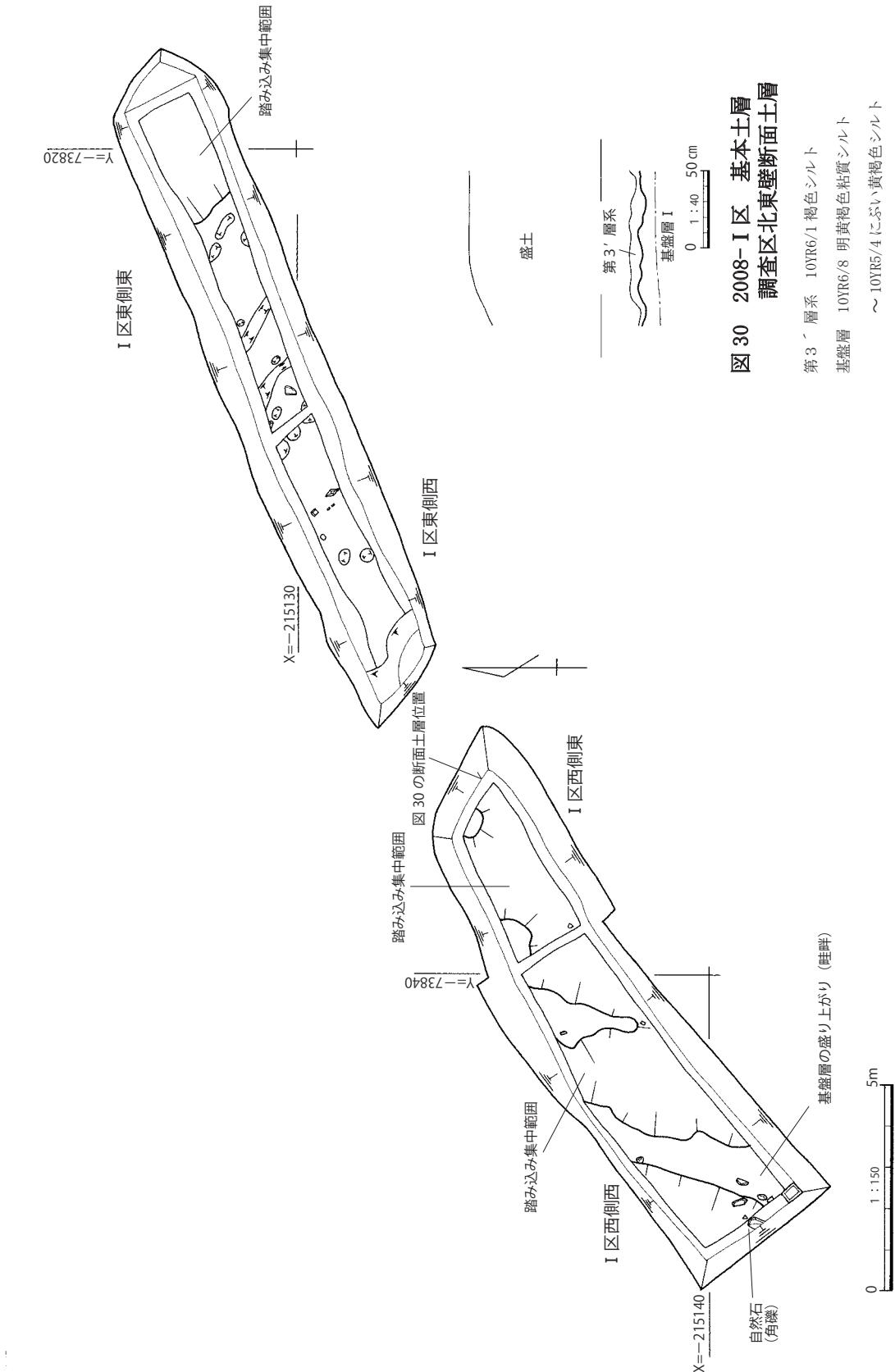


図 29 2008-I 区 調査遺構全体図

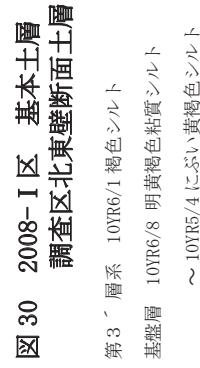
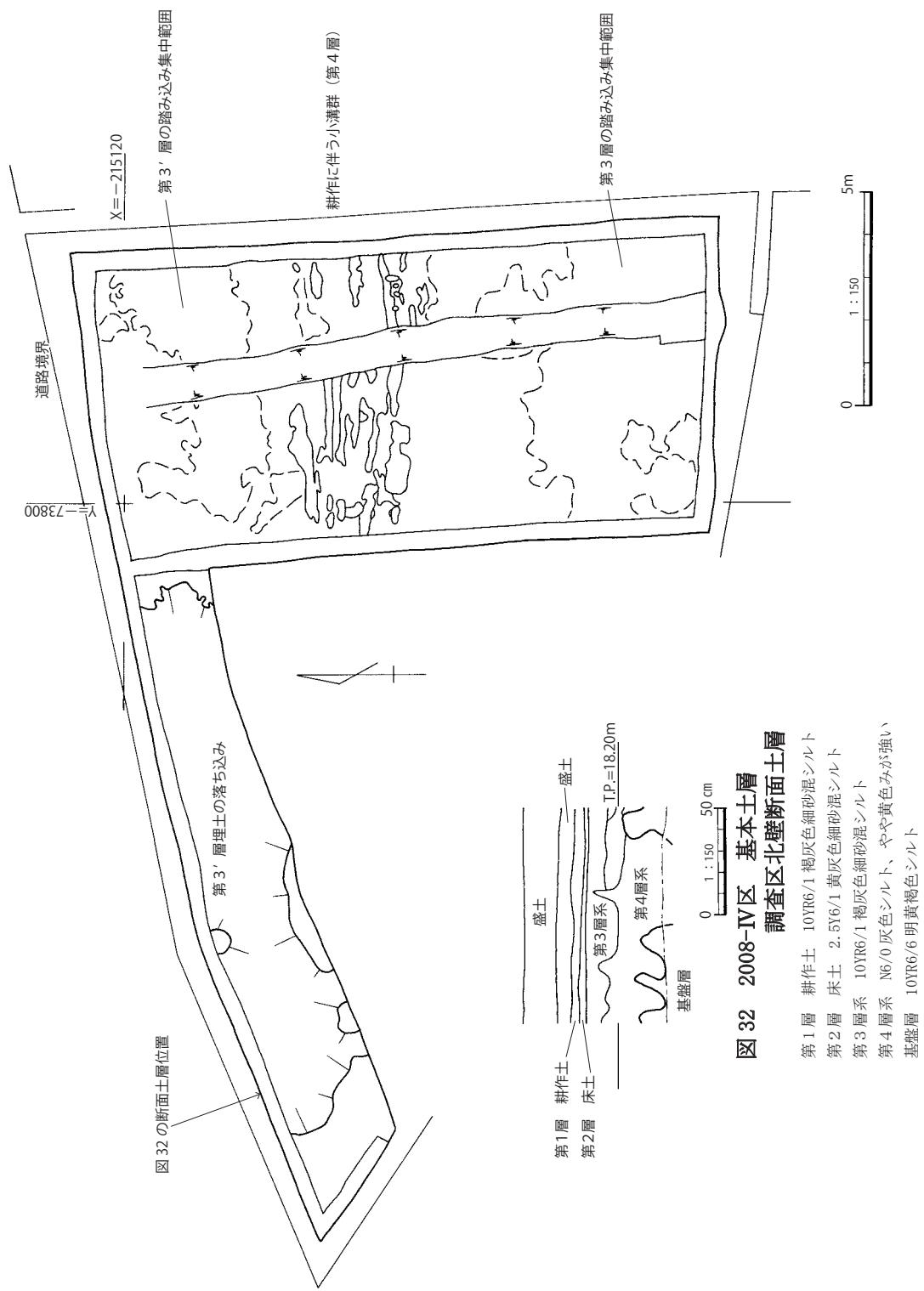


図 30 2008-I 区 基本土層
調査区北東壁断面土層

第3 層系 10YR6/1 暗褐色シルト
基盤層 10YR6/8 明黄褐色粘質シルト
～10YR5/4 にぼい黄褐色シルト



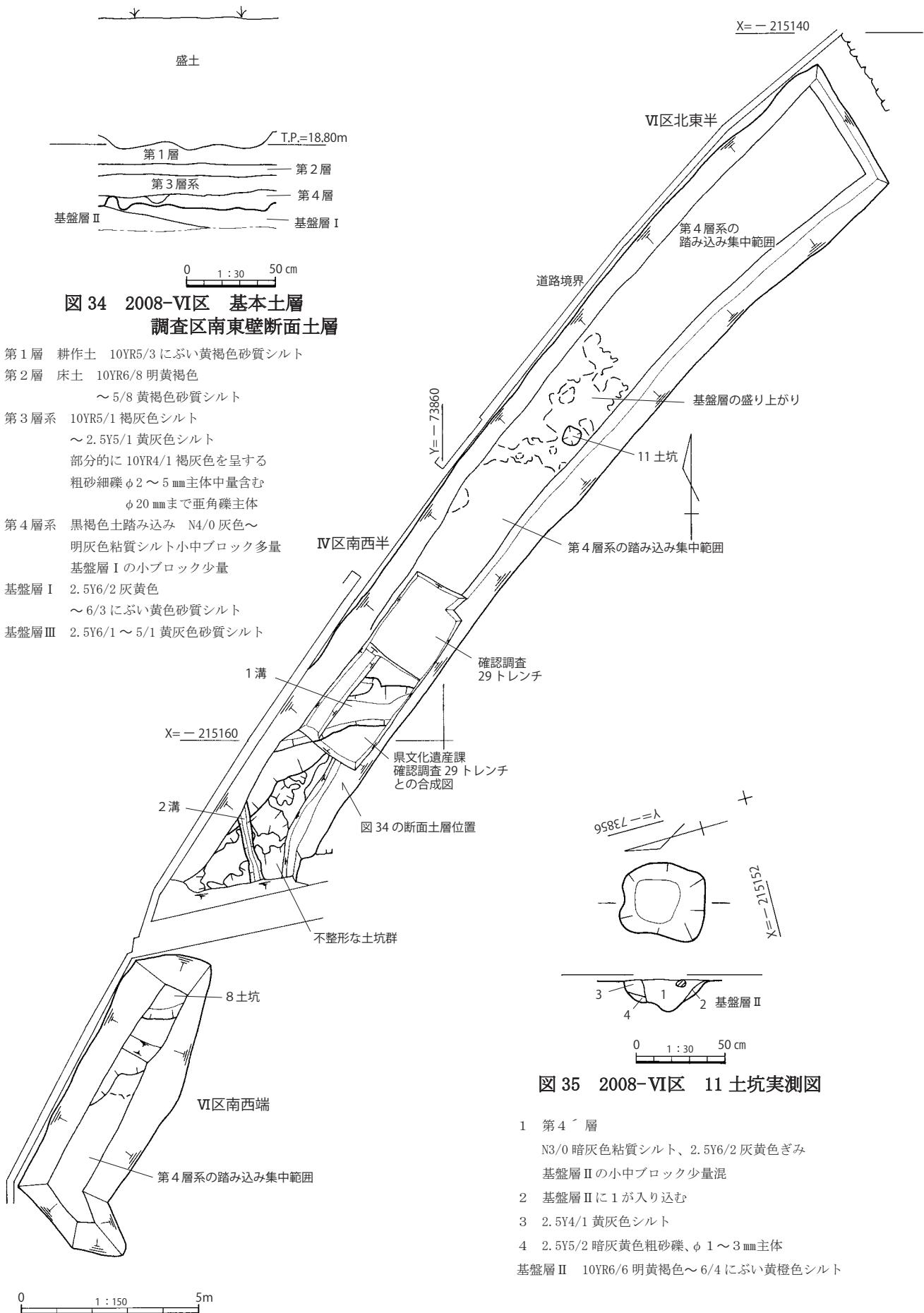


図 33 2008-VI区 調査遺構全体図

— 47 —

図 34 2008-VI区 基本土層
調査区南東壁断面土層

第1層 耕作土 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト

第2層 床土 10YR6/8 明黄褐色

～5/8 黄褐色砂質シルト

第3層系 10YR5/1 褐灰色シルト

～2.5Y5/1 黄灰色シルト

部分的に 10YR4/1 褐灰色を呈する

粗砂細礫 $\phi 2 \sim 5$ mm 主体中量含む

$\phi 20$ mmまで亜角礫主体

第4層系 黒褐色土踏み込み N4/0 灰色～

明灰色粘質シルト小中プロック多量

基盤層 I の小プロック少量

基盤層 I 2.5Y6/2 灰黄色

～6/3 にぶい黄色砂質シルト

基盤層 III 2.5Y6/1 ～ 5/1 黄灰色砂質シルト

T.P.=18.80m

0 1 : 30 50 cm

X= - 215140

VI区北東半

第4層系の踏み込み集中範囲

道路境界

基盤層の盛り上がり

11 土坑

第4層系の踏み込み集中範囲

確認調査
29 トレンチ

県文化遺産課
確認調査 29 トレンチ
との合成図

図 35 2008-VI区 11 土坑実測図

1 第4層

N3/0 暗灰色粘質シルト、2.5Y6/2 灰黄色ぎみ

基盤層 II の小中プロック少量混

2 基盤層 II に 1 が入り込む

3 2.5Y4/1 黄灰色シルト

4 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂礫、 $\phi 1 \sim 3$ mm 主体

基盤層 II 10YR6/6 明黄褐色～6/4 にぶい黄橙色シルト

0 1 : 150 5m

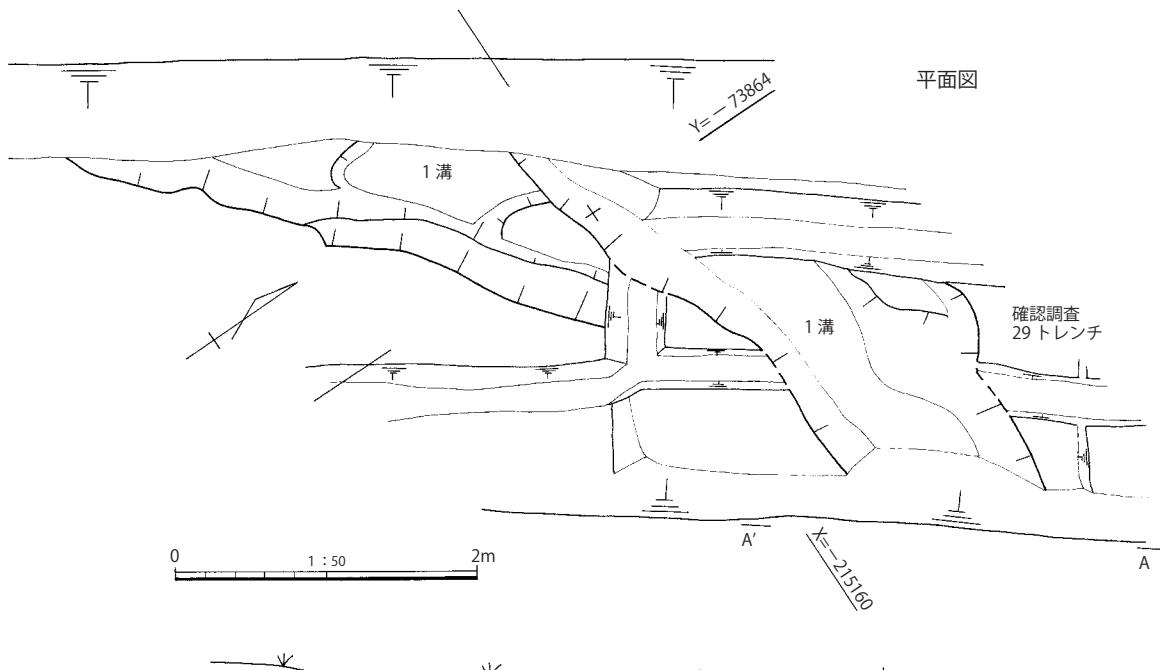
Y=-73860 X=-215160

Y=-73856 X=-215152

3 1 2 基盤層 II

4

0 1 : 30 50 cm



盛土

断面土層図

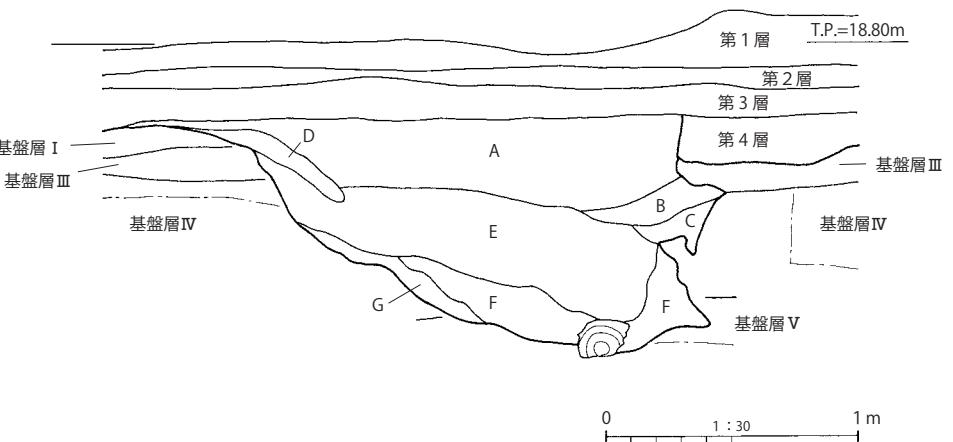


図 36 2008-VI区 1溝実測図

1溝

※全体に、2.5Y5/2 暗灰黄色ぎみを呈する、礫は殆んど皆無に等しい

A N3/0 暗灰色～2/0 黒色粘泥

5GY6/1 オリーブ灰色シルト小ブロック微量

2.5Y6/1 黄灰色シルト小ブロック少量

B AとN4/0 灰色細砂混シルト縞状に埋積する、細かい木屑が中量混じる

C 基盤層IVにN3/0 暗灰色～2/0 黒色粘泥が入り込む、木屑が中量混じる

D 基盤層IIIに極めて類似する

E 7.5YR4/3 棕褐色砂泥 (N3/0 暗灰色に変色)

細かい木屑（木つ葉）極めて多量、腐った有機質状態

φ 3～5 cmの短寸の自然木少量・断面に対して直交するものが多い

上端 15 cm層厚は、3～5 mmの縞状の層を成して木屑層が埋積する

各木屑層間に細砂層が入り込む

F 基本的にCの逆転

木屑中量、N3/0 暗灰色～2/0 黒色粘泥に基盤層IV中大ブロック少量入り込む

G 5Y6/1 灰色粘泥と 2.5Y5/1 黄灰色細砂が縞状に埋積する

第1層 耕作土 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト

第2層 床土 10YR6/8 明黄褐色～5/8 黄褐色砂質シルト

第3層系 10YR5/1 棕褐色シルト～2.5Y5/1 黄灰色シルト
部分的に 10YR4/1 棕褐色を呈する

粗砂細礫 φ 2～5 mm 主体中量含む
φ 20 mmまで亜角礫主体

第4層系 N4/0 灰色～明灰色粘質シルト小中ブロック多量
基盤層 I の小ブロック少量

基盤層 I 2.5Y6/2 灰黄色～6/3 にぶい黄色砂質シルト

基盤層 III 2.5Y6/1～5/1 黄灰色砂質シルト

基盤層 IV 10G6/1～5/1 緑灰色砂質シルト

基盤層 V 基盤層 IVに細・粗砂多量入る

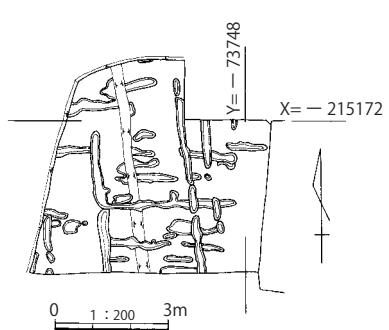
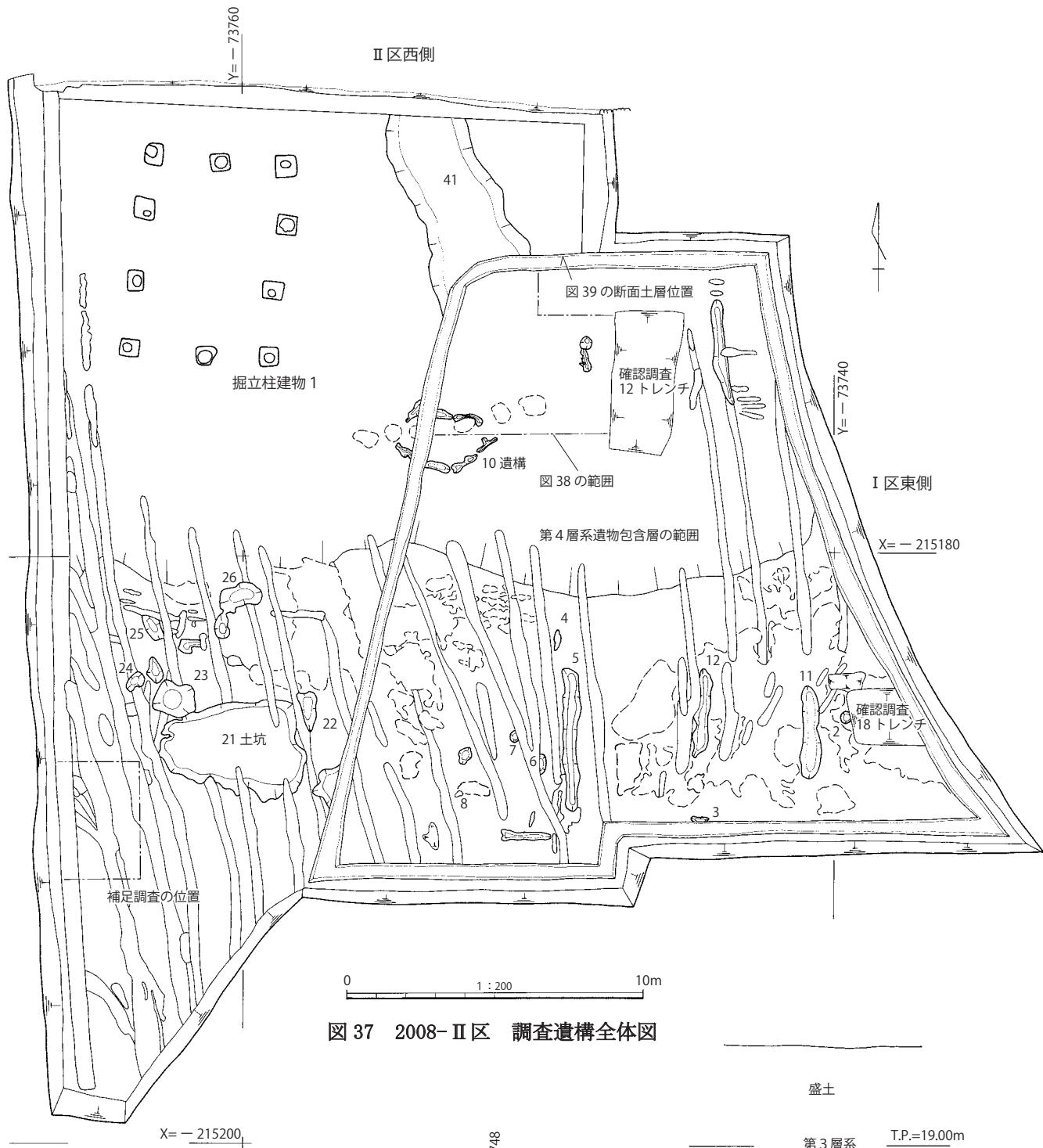


図 38 2008-II区 第3層系包含層
下面遺構

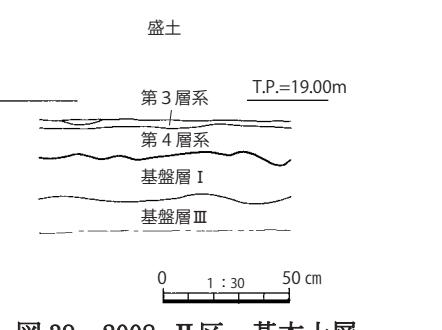


図 39 2008-II区 基本土層
調査区北壁断面土層

第3層系 10YR5/2 灰黄褐色シルト
第4層系 10YR6/2 灰黄褐色シルト
基盤層 I 10YR5/6 黄褐色シルト
基盤層 III 10YR5/6 黄褐色微砂混シルト

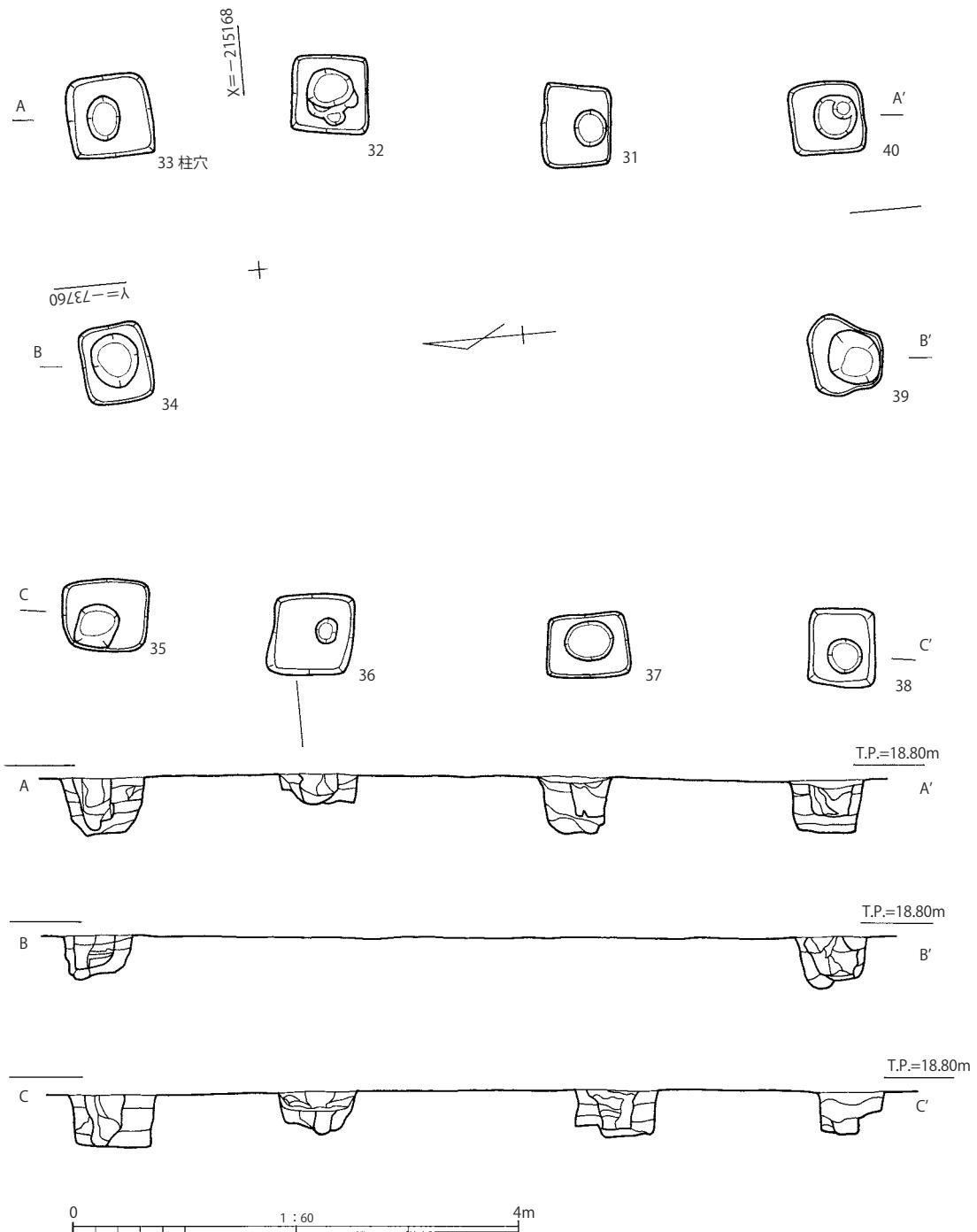


図 40 2008-II 区 掘立柱建物 1 実測図

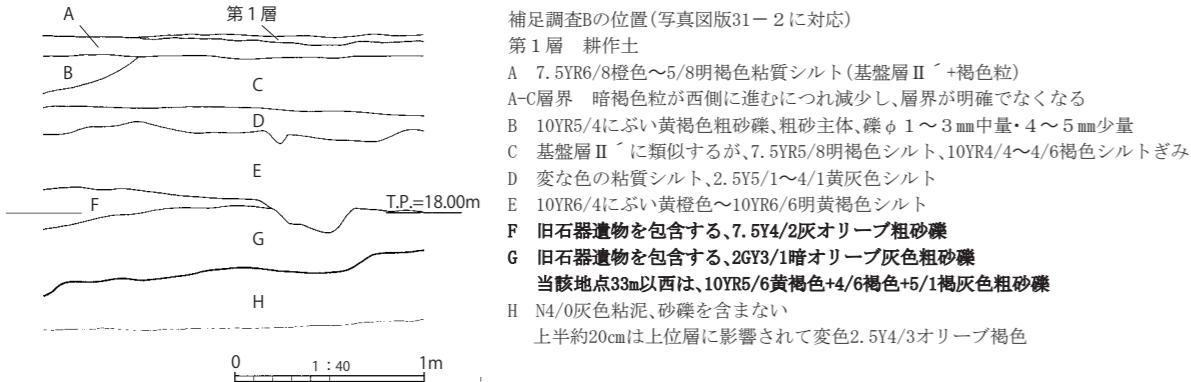


図42 2008-VII区 基本土層 調査区南壁断面土層

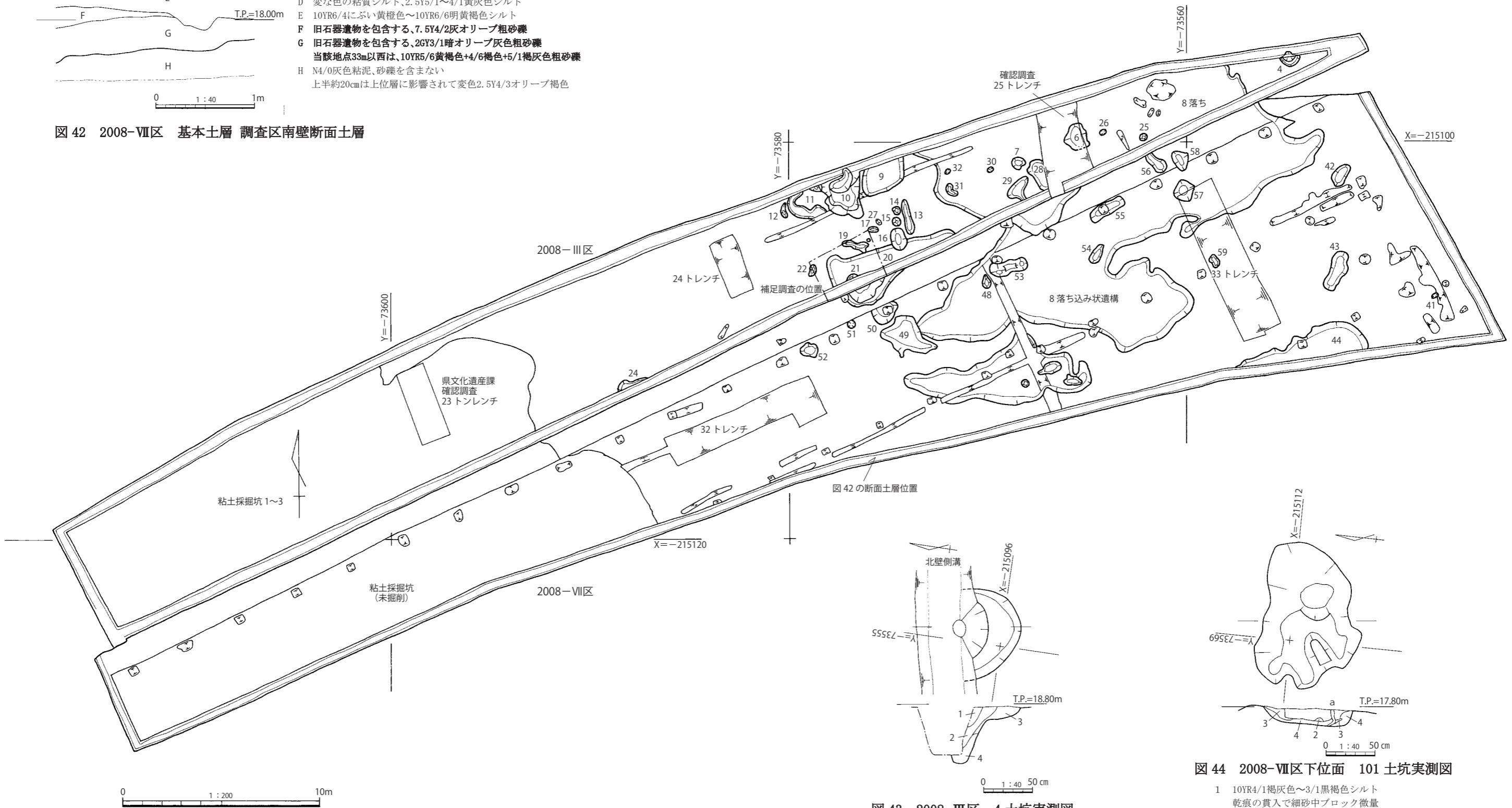


図41 2008-III区 VII区上位層 調査遺構全体図

図43 2008-III区 4土坑実測図

- 1 10YR4/1褐色～3/1黒褐色シルト
乾痕の貫入で細砂中ブロック微量
2 5G5/1オリーブ灰色細砂混シルト
3 10G5/1緑灰色～4/1暗緑灰色粗砂細礫、φ1～5mm主体
4 基盤層灰色粘泥に細砂少量入り込む
a 乾痕 5Y灰色細砂・粗砂
1～4共に、基盤層III黄褐色シルトをブロック状に含む

図44 2008-VII区下位面 101 土坑実測図

- 1 10YR4/1褐色～3/1黒褐色シルト
乾痕の貫入で細砂中ブロック微量
2 5G5/1オリーブ灰色細砂混シルト
3 10G5/1緑灰色～4/1暗緑灰色粗砂細礫、φ1～5mm主体
4 基盤層灰色粘泥に細砂少量入り込む
a 乾痕 5Y灰色細砂・粗砂

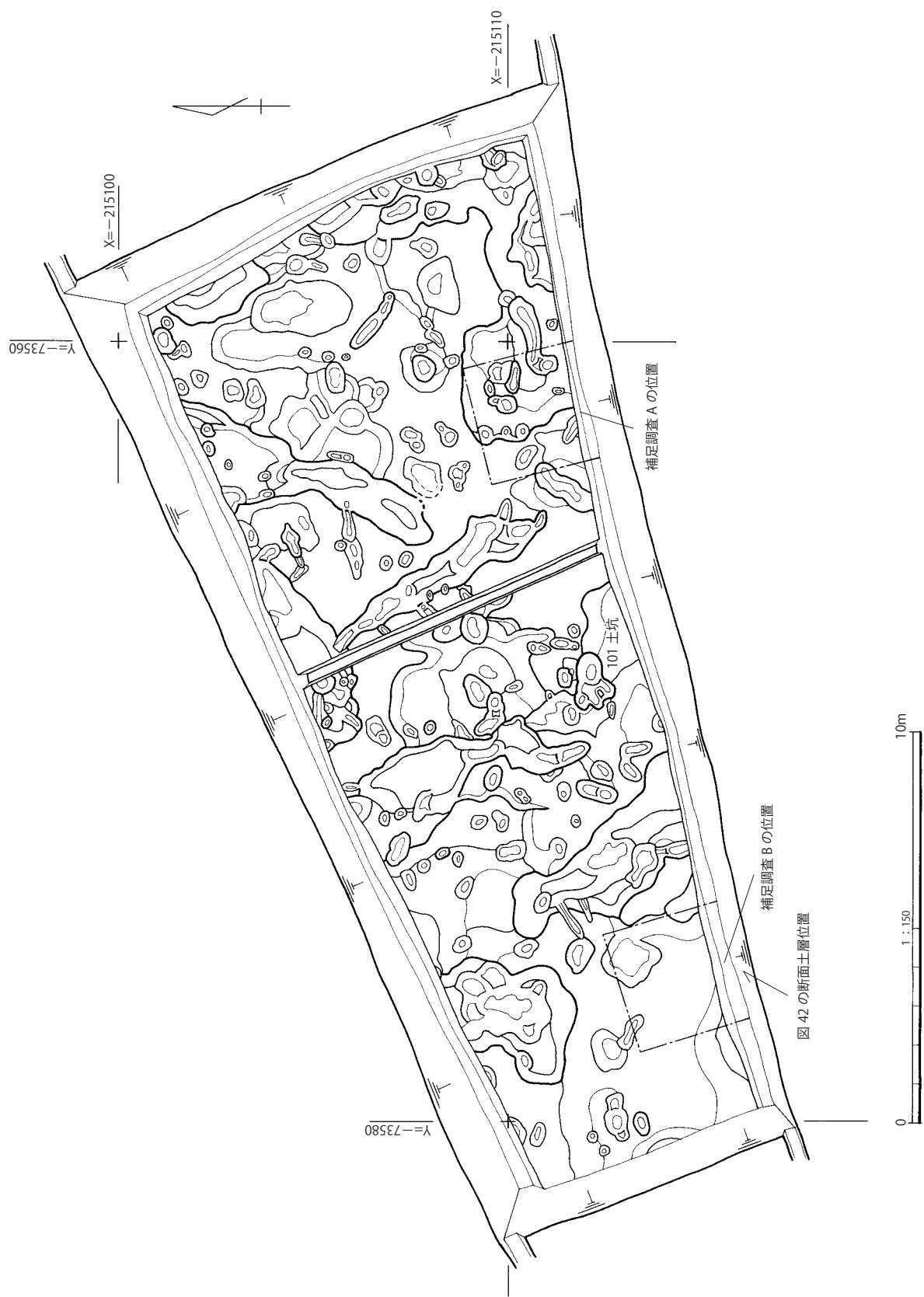


図 45 2008-VII区下位面 調査遺構全体図

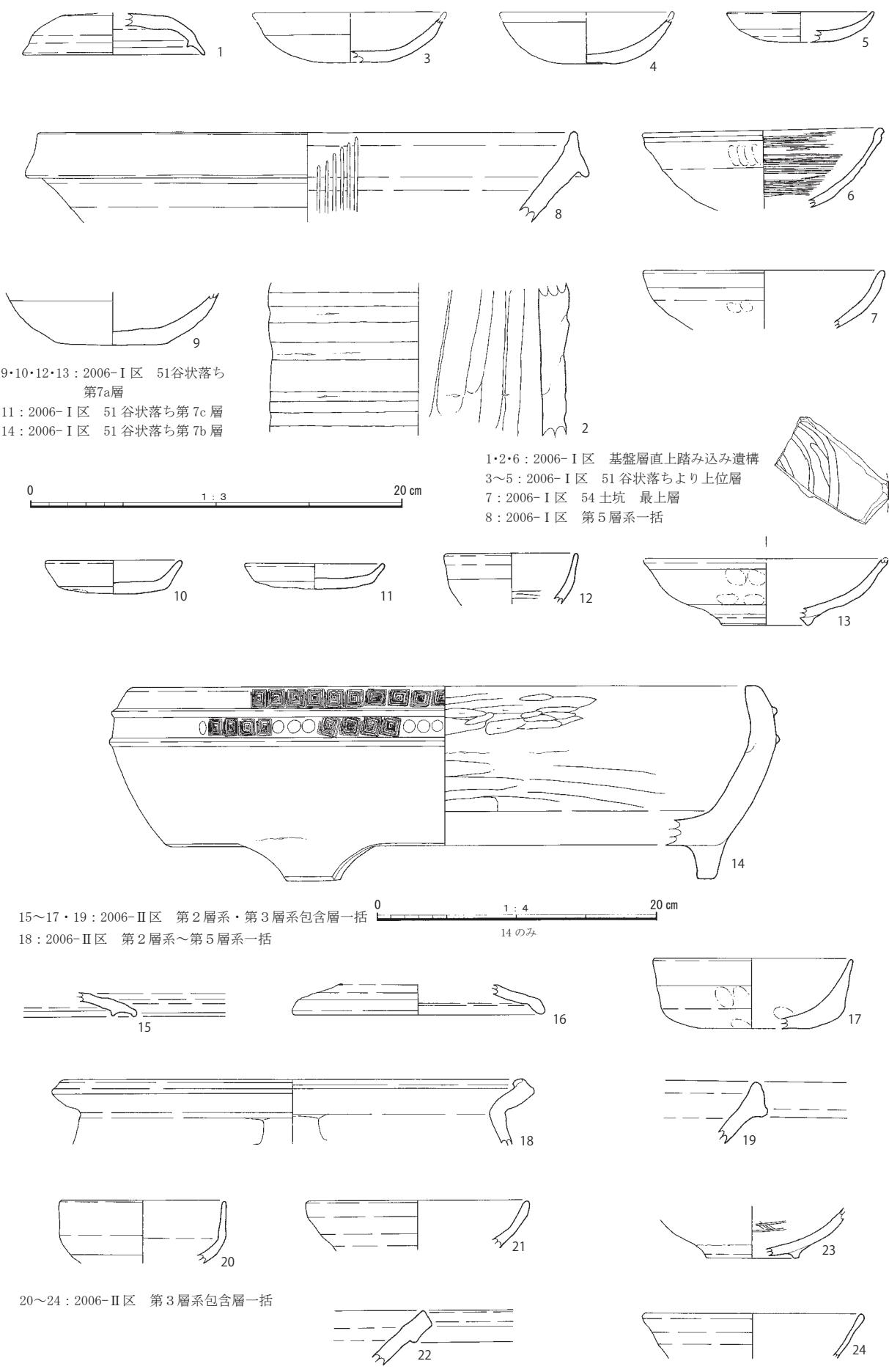


図 46 出土遺物実測図 1

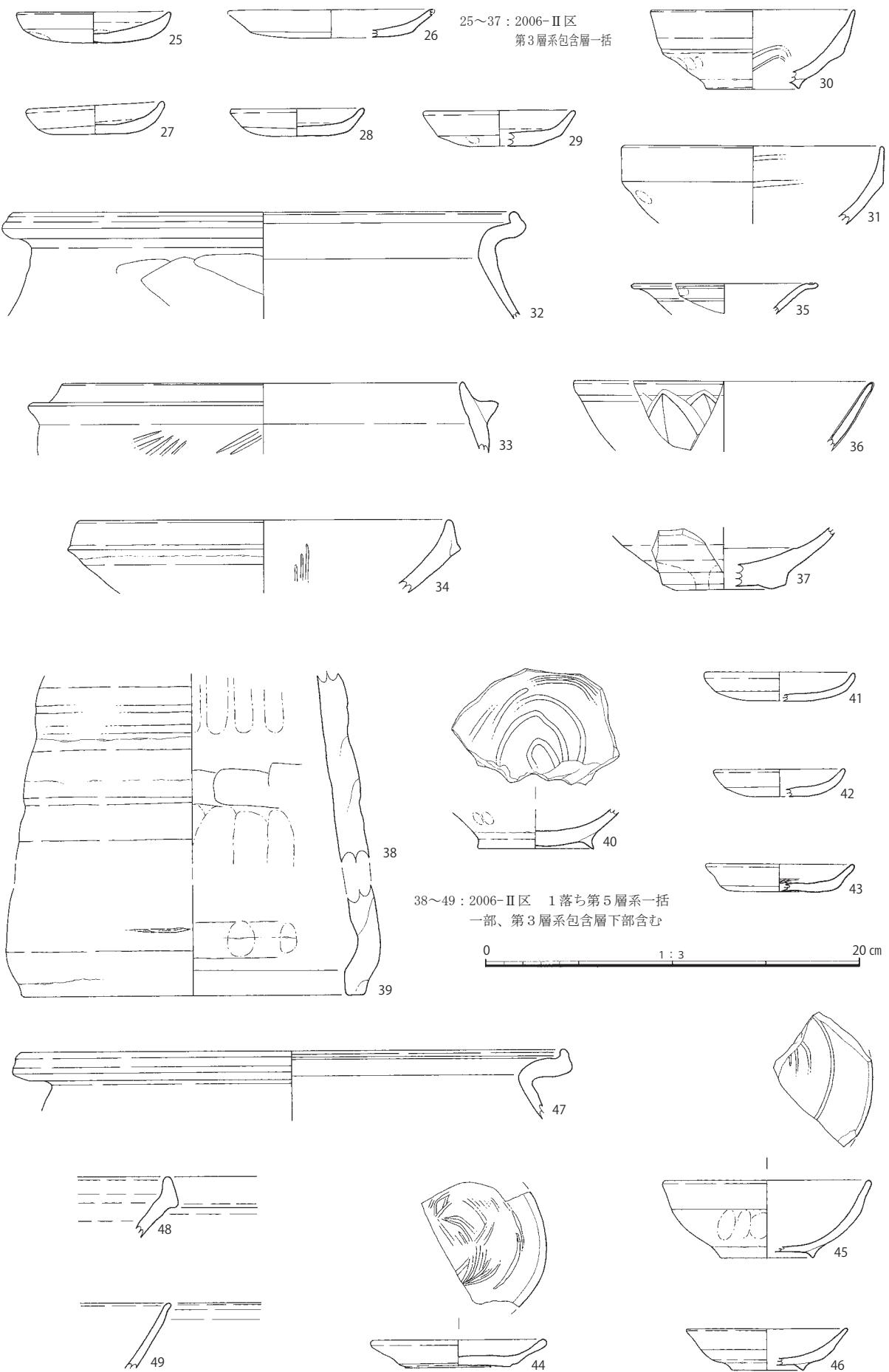


図47 出土遺物実測図2

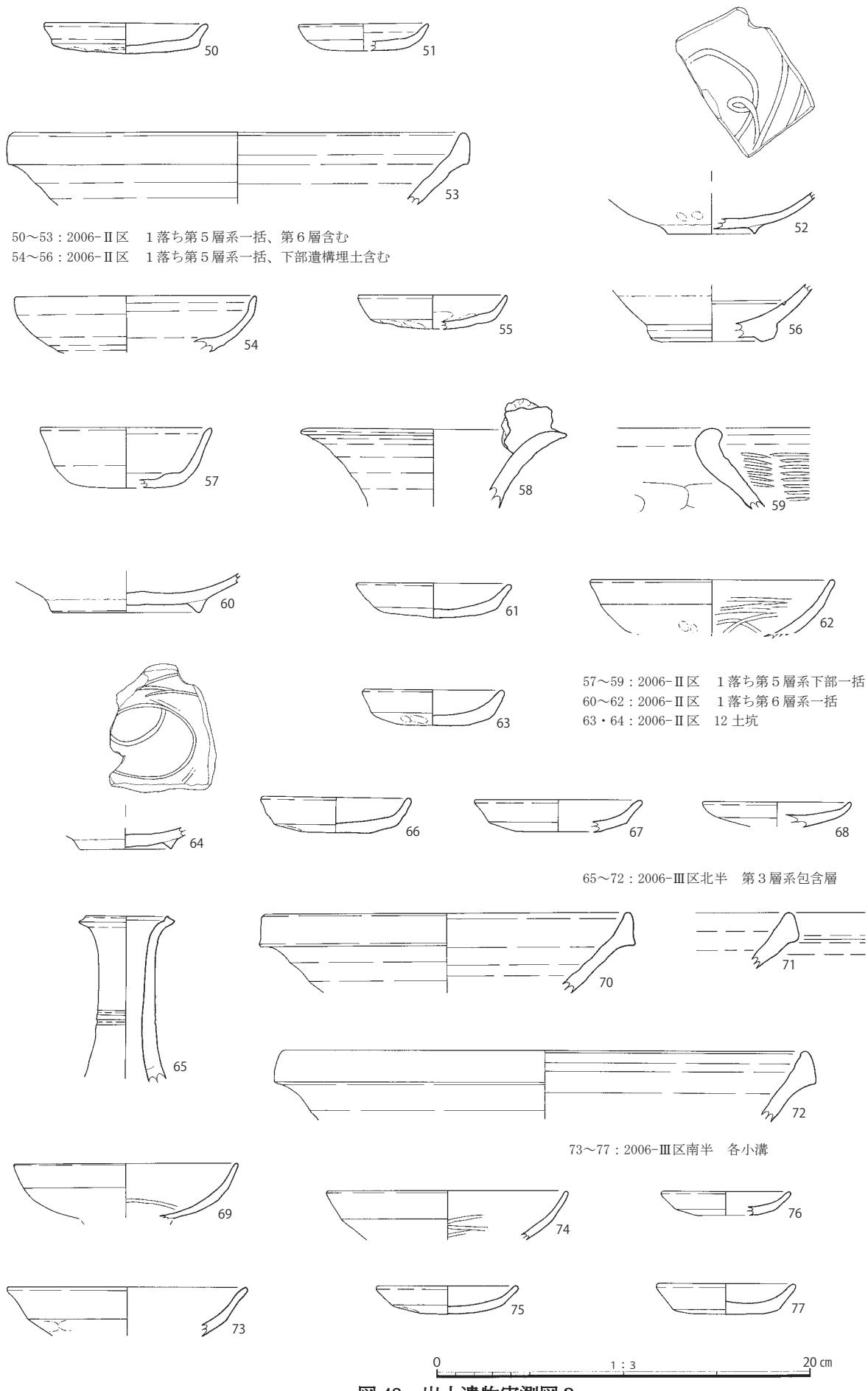


図48 出土遺物実測図3

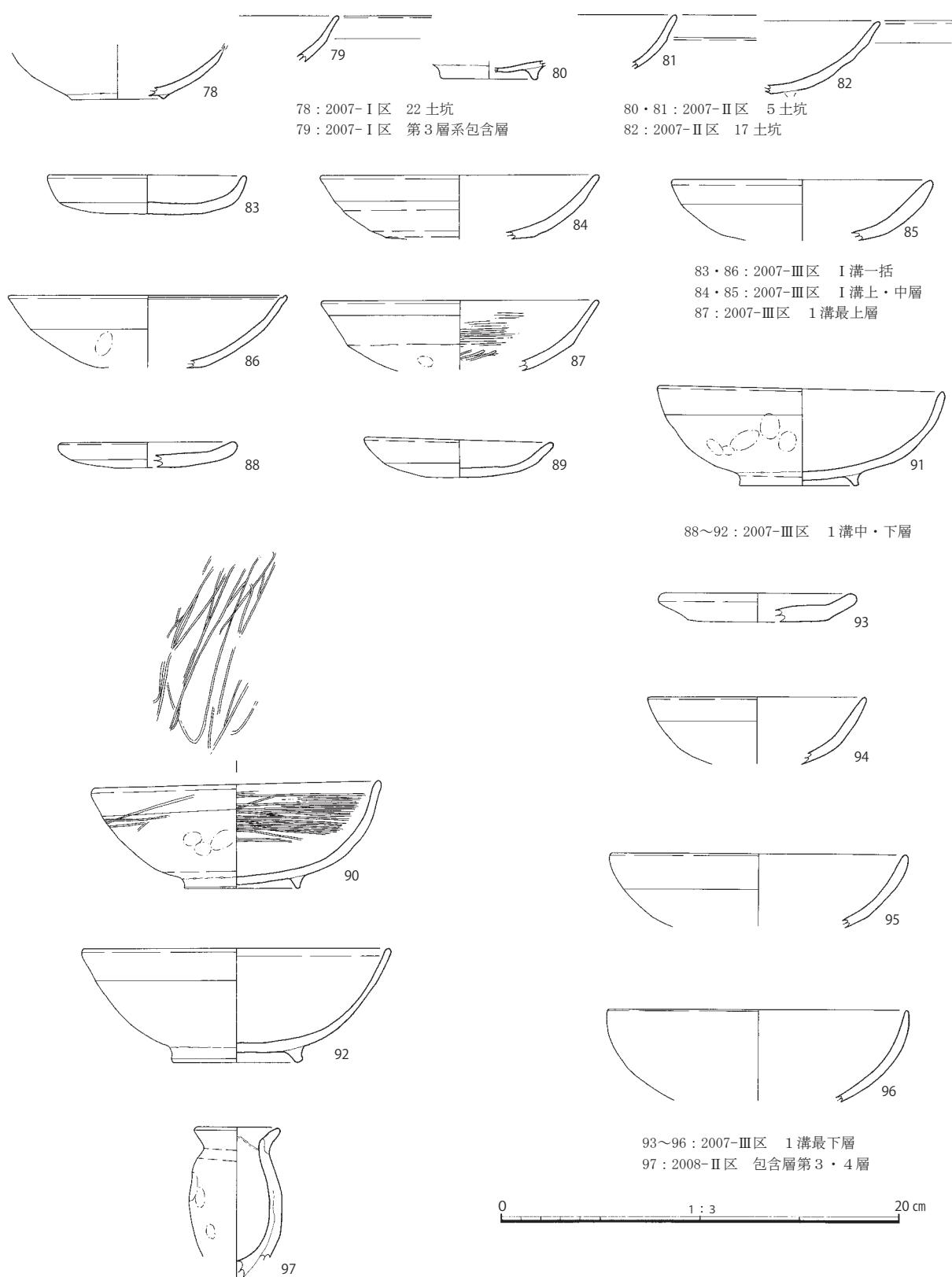
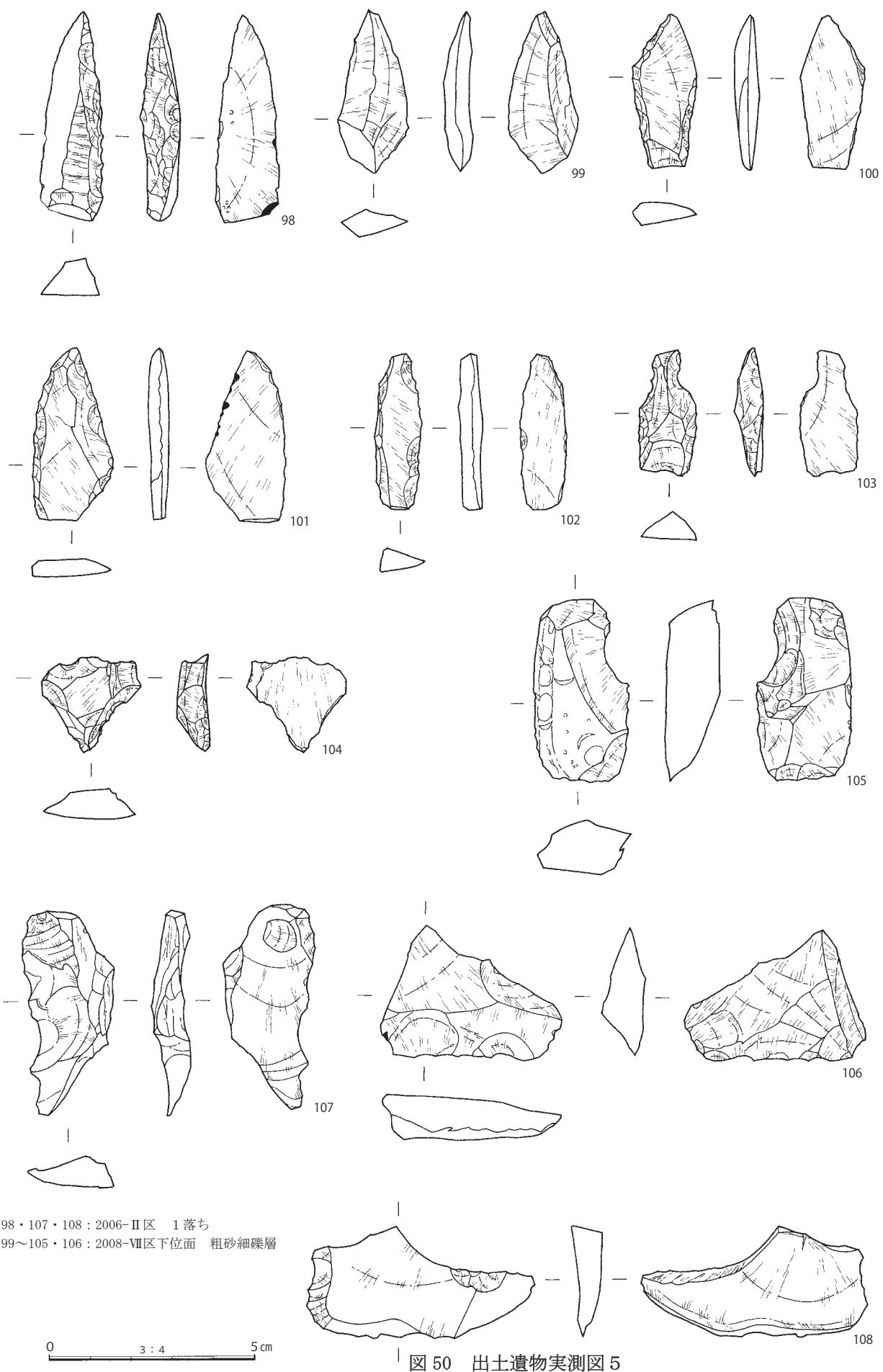
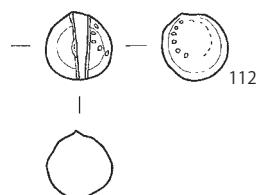
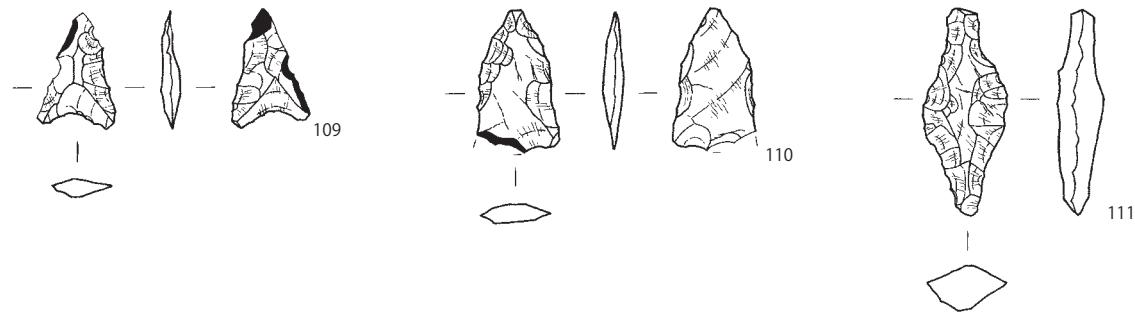


図49 出土遺物実測図4





109 : 2006-II区 1落ち

110 : 2006-II区 第3層系包含層上部

111 : 2006-III区北半 第3層系

112 : 2006-II区 第3層系包含層下部

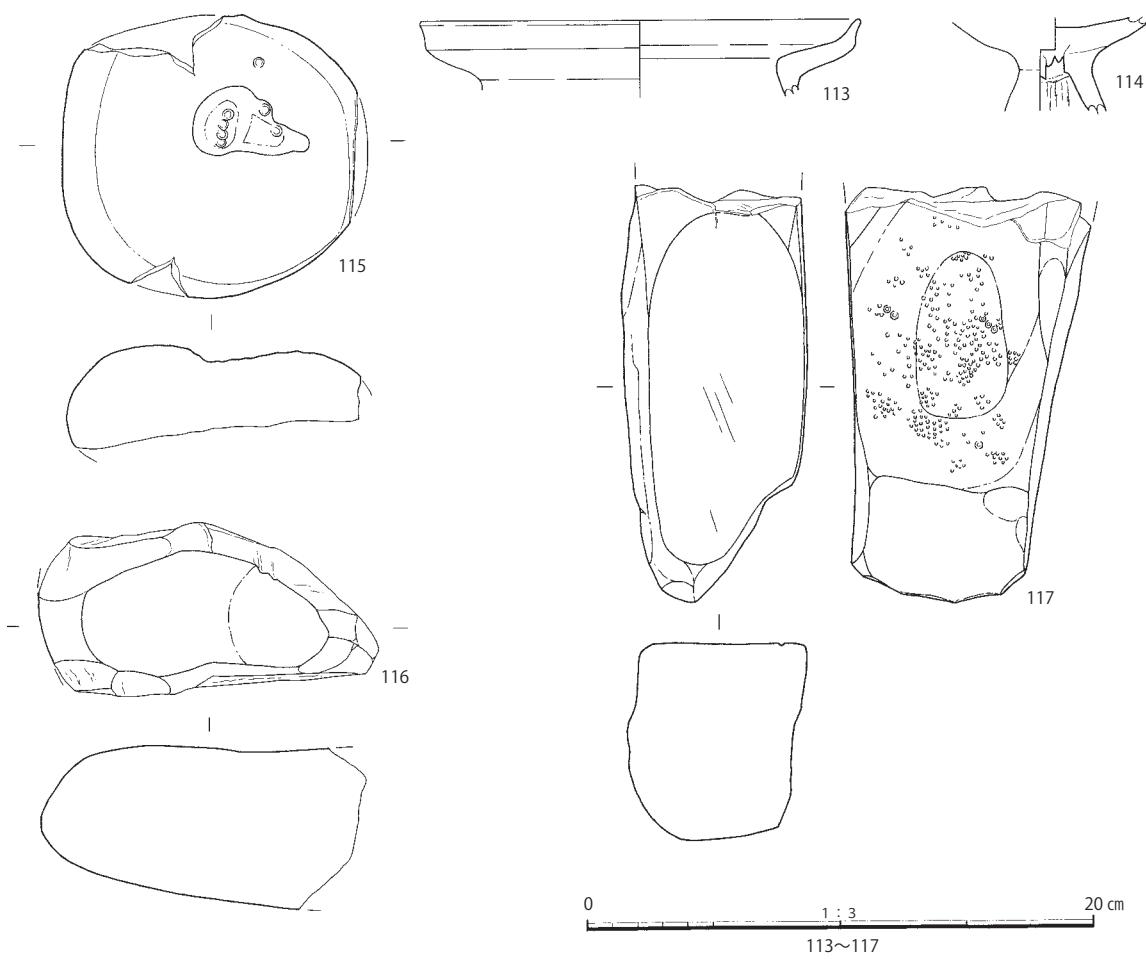
113・114 : 2006-II区 第3層系包含層一括

115 : 2006-III区北半 第3層系包含層下部一括

116 : 2006-III区北半 15 土坑

117 : 2007-III区 1溝最下層基底部

0 3:4 5 cm
109~112



0 1:3 20 cm
113~117

図 51 出土遺物実測図 6

表3 藤並地区遺跡 各地区出土遺物数量 (西端の地区から東側の地区へ)

大凡の時代		旧石器			縄文			弥生 (庄内期含む)				飛鳥・奈良・平安				平安末・鎌倉・室町								江戸						備考					
	地区	石器	剥片他	小計	縄文土器	石器剥片他	小計	弥生土器	石器剥片	その他	小計	土師器	黒色土器	須恵器	綠釉灰釉他	瓦	小計	土師器	瓦器	土釜	須恵質土器	瓦質土器	陶器	磁器	その他	瓦	小計	土師質土器	陶磁器	その他	瓦	小計	不明	合計	備考
1	2008-VI区	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	5	0	54	0	2	61	20	161	4	9	0	2	3	2	1	202	0	0	0	0	0	0	267
2	2008-I区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	7	7	51	1	0	0	1	0	3	1	64	0	0	0	0	0	0	71
3	2008-IV区	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	37	0	0	37	7	236	3	6	0	1	1	3	4	261	0	0	0	0	0	0	299
小計	Aブロック	0	0	0	0	1	1	4	0	0	4	5	0	98	0	2	105	34	448	8	15	0	4	4	8	6	527	0	0	0	0	0	0	637	
4	2006-I区	0	0	0	0	1	1	1	1	0	2	0	0	34	0	20	54	19	384	32	11	12	3	1	1	1	464	0	0	0	0	0	0	527	
5	2006-II区	2	13	15	0	3	3	18	7	0	25	44	12	300	1	11	368	190	1050	70	34	23	26	17	35	13	1458	0	11	0	0	11	10	1890	
小計	Bブロック	2	13	15	0	4	4	19	8	0	27	44	12	334	1	31	422	209	1434	102	45	35	29	18	36	14	1922	0	11	0	0	11	16	2417	
6	2008-V区	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	15	0	0	17	0	91	1	5	0	1	1	0	2	101	0	1	0	1	2	0	121	
7	2008-II区	0	0	0	0	1	1	4	1	0	5	51	2	221	1	8	283	122	790	29	13	2	9	8	2	18	993	0	2	0	0	2	6	1290	
小計	Cブロック	0	1	1	0	1	1	4	1	0	5	53	2	236	1	8	300	122	881	30	18	2	10	9	2	20	1094	0	3	0	1	4	6	1411	
8	2007-I区	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	7	0	1	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	10
9	2007-II区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	3	64	0	0	0	0	0	0	0	67	0	1	0	0	0	0	69
小計	Dブロック	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	0	0	3	3	71	0	1	0	0	0	0	0	75	0	1	0	0	0	0	79
10	2006-III区	0	0	0	0	0	0	0	2	10	0	12	1	1	40	0	5	47	20	297	11	12	1	6	0	8	1	356	0	0	0	0	0	0	415
小計	Eブロック	0	0	0	0	0	0	0	2	10	0	12	1	1	40	0	5	47	20	297	11	12	1	6	0	8	1	356	0	0	0	0	0	0	415
11	2008-III区	0	5	5	0	0	0	0	0	0	0	4	0	42	0	2	48	18	647	15	14	0	7	6	2	0	709	0	6	0	0	6	0	768	
12	2008-VII区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0	9	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	12	
13	2007-III区	0	5	5	0	3	3	6	0	0	6	281	125	58	2	4	470	67	200	23	1	0	0	0	0	1	0	292	0	0	0	0	0	9	785
小計	Fブロック	0	10	10	0	3	3	6	0	0	6	285	125	103	2	6	521	85	856	38	15	0	7	6	3	0	1010	0	6	0	0	6	9	1565	
14	2008-III区下位面	0	12	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	
15	2008-VII区下位面	7	46	53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	53		
小計	Fブロック下位面	7	58	65	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	65		
合計		9	82	91	0	9	9	36	19	0	55	388	140	814	4	52	1398	473	3987	189	106	38	56	37	57	41	4984	0	21	0	1	21	31	6589	

表4 各地区出土遺物接合関係一覧

出土 遺物 登録 番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層	遺物接合関係	出土 遺物 登録 番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層
151	2006-II区 E12-l2	1落ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む		163	2006-II区 E12-k2	——	第2層系一括 第3層系包含層上 部一括
153	2006-II区 E12-m2	1落ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む	奈良 須恵質 陶棺脚部 (円筒状土製品)	172	2006-II区 E12-	1落ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む
162	2006-II区 E12-j2	1落ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む					
131	2006-II区 E12-m3	1落ち	第5層系下部一括	奈良 須恵器 長頸壺 口縁部	153	2006-II区 E12-m2	1落ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む
168	2006-II区 E12-i1	1落ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む	奈良 須恵器 壺 口線部	184	2006-II区 E12-q5	1落ち	第5層系一括 第6層含む
					186	2006-II区 E12-q3	1落ち	第5層系一括 第6層含む
190	2006-II区 E12-o5	1落ち	第5層系一括 下部遺構埋土含む	奈良 須恵器 小型壺 体部	191	2006-II区 E12-n5	1落ち	第5層系一括 下部遺構埋土含む
107	2006-II区 E12-l4	1落ち一括	第5層一括 一部、第3層系包含層 下部含む?	奈良 平瓦	136	2006-II区 E12-l3	1落ち	第5層系一括 下部遺構埋土含む
24	2008-II区 1/2東側 E12-m19	——	包含層第3層	備前 壺 体部	28	2008-II区 1/2東側 E12-m18	——	包含層第3層 包含層第4層
32	2008-II区 1/2東側 E12-l20	——	包含層第3層 包含層第4層	奈良 須恵器 短頸壺 口頭部	17	2008-II区 1/2東側 E12-l19	——	包含層第3層系 一部搅乱含む
107	2008-II区 1/2西側 E12-n20	暗渠・攪乱	埋土一括	鎌倉 白磁 碗 底部	119	2008-II区 1/2西側 E12-o18	——	包含層第3・4層
2	2008-VI区 南西半 F12-p16	1溝 最上層含む	包含層第3層	奈良 須恵器 中壺 体部	15	2008-VI区 南西半 F12-p16	1溝 最上層	第3層含む
					20	2008-VI区 北東半 F12-n13	——	第2層 包含層第3・4層
18	2008-VI区 北東半 F12-m12	——	第2層 包含層第3層 南東壁側溝	奈良 須恵器 蓋 口縁部	31	2008-VI区 北東半 F12-m12	10踏み込み	第4'層黒褐色土 第4層
					32	2008-VI区 北東半 F12-m11	10踏み込み	第4'層黒褐色土 第4層

2006～2008 藤並地区遺跡 出土遺物一覧

No. 1

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
1	図46	図版32	99	280	2006-I 区 E11-k24	基盤層直上	踏み込み状遺構 第6層系	須恵器	蓋	口縁部～天井部	約50% 約50%	口縁部内面の返りは短い、天井部外面向回転ヘラケズリ、ロクロ回転方向：右回り、Ⅲ型式2段階、反転復元
2	図46	図版32	100	235	2006-I 区 E11-h25	基盤層直上	踏み込み状遺構 第6層系	須恵器	陶棺	脚部	不明	器形は円筒状を呈する、内面は横方向のナデ調整後縱方向の強いナデ調整、外表面はユビオサワ後横方向のナデ調整、粘土の接合単位の位置に凹線様のナデ、焼成遺存やや軟質化、反転復元
3	図46	図版32	94	251	2006-I 区 E11-f21	第5層～第7層一括	——	土師器	皿	口縁部～底部	5%以下 約40%	厚みの整った底部から内湾して立ち上がる口縁部に延びる、口縁端部は欠損、内外面共に磨滅著しく焼成遺存やや軟質化、反転復元
4	図46	図版32	95	239	2006-I 区 E11-g18	51谷状落ちより上?	52石列東側	土師器	皿	口縁部～底部	5%以下 約30%	やや厚みのある腰部から内湾して立ち上がる口縁部に延びる、口縁端部は欠損、内外面共に磨滅著しく焼成遺存やや軟質化、口径復元不明確、反転復元
5	図46	図版32	96	240	2006-I 区 E11-g17	51谷状落ちより上?	52石列東側	瓦器	小皿	口縁部～底部	約25% 約25%	底部から緩やかに内湾して口縁部に延びる、磨滅のため調整不明瞭、焼成遺存内外面共に磨滅著しく軟質化（胎土D）、反転復元
6	図46	図版32	98	278	2006-I 区 E11-f23	基盤層直上	踏み込み状遺構 第5層系	瓦器	椀	口縁部～腰部	約20% 約30%	内湾して体部から口縁部に延びる、口縁端部は強い横方向のナデにより丸く納める、口縁部外周連続する小ピッチの指頭圧痕、内面側壁幅1mm細かいミガキやや密、焼成遺存良好堅緻（胎土A）、反転復元
7	図46	図版32	101	279	2006-I 区 E11-f-g23	基盤層直上	54土坑最上層	瓦器	椀	口縁部	約20%	器形はかなり歪つ、細片のため口径・傾き不明確、口径実際は団より小さいか、焼成遺存磨滅著しく軟質化（胎土C）、反転復元
8	図46	図版32	93	268	2006-I 区 E11-j25	第5層系一括	——	備前	擂鉢	口縁部	約5%	擂り目6本/2.2cm、胎土に凝灰岩・流紋岩L・LL少量含む、ロクロ回転方向：右回り、乗岡編年中世24期・間壁編年IV-B期、反転復元
9	図46	図版32	102	248	2006-I 区 E11-i20	——	51谷状落ち第7a層	土師器	皿	体部～底部	約20% 約60%	厚い底部から内湾して体部に延びる、内外面共に磨滅著しく調整不明、反転復元
10	図46	図版32	107	264	2006-I 区 E11-i22	——	51谷状落ち第7a層	瓦器	小皿	口縁部～底部	約80% 100%	厚みのある扁平な底部からやや外反ぎみの口縁部に延びる、器形の歪み著しい、焼成遺存極めて良好堅緻（胎土A）
11	図46	図版32	113	281	2006-I 区 E11-i19	——	51谷状落ち第7c層	瓦器	小皿	口縁部～底部	約20% 約25%	扁平な底部からやや外反ぎみの短い口縁部に延びる、焼成遺存やや軟質化（胎土B）、反転復元
12	図46	図版32	106	250	2006-I 区 E11-g21	——	51谷状落ち第7a層	瓦器	小椀	口縁部	約10%	緩やかに内湾する体部からやや強く立ち上がる口縁部に延びる、内面見込から側壁にかけて幅2.5mmやや粗いミガキ、焼成遺存良好堅緻（胎土A）、反転復元
13	図46	図版32	104	248	2006-I 区 E11-i20	——	51谷状落ち第7a層	瓦器	椀	口縁部～底部（高台部）	5%以下 約20%	緩やかに内湾する体部からやや外反する口縁部に延びる、体部外周2段の指頭圧痕、見込暗文は幅4mm極めて粗く螺旋状、焼成遺存良好堅緻（胎土A）、反転復元
14	図46	図版32	112	282	2006-I 区 E11-g19	——	51谷状落ち第7b層?	瓦質	火舍（浅鉢）	口縁部～底部	約15% 約10%	器壁の厚い底部、腰部から内湾する口縁部に延びる、体部内面下半は横方向の雑なナデ調整、上半は横方向の雜なヘラミガキ、体部外面は横方向の丁寧なヘラミガキ、口縁部上位に2条の突部、突部間の下段に雷文帯と貼付円形浮文痕跡、上段に雷文帯のみの構成、焼成遺存やや軟質化（胎土B）、反転復元
15	図46	図版33	4	158	2006-II 区 E12-m1	第2層系一括 第3層系包含層上部一括	——	須恵器	蓋	口縁部	5%以下	胎土緻密、ロクロ回転方向：左回り、Ⅲ型式2段階、断面のみ
16	図46	図版33	3	122	2006-II 区 E12-n3	第2層系包含層 第3層系包含層上部一括	——	須恵器	蓋	口縁部	約10%	胎土緻密、ロクロ回転方向：左回り、Ⅳ型式3段階、反転復元
17	図46	図版33	5	125	2006-II 区 E12-k3	第2層系包含層一括 第3層系包含層上部一括	——	土師器	皿	口縁部～底部	約10% 約20%	厚い腰部から直線的に上方に延びる口縁部へ続く、全体にやや歪つ、歪みのため口径不明確、磨滅著しい、反転復元
18	図46	図版33	2	212	2006-II 区 E12-n7	第2層系～第5層系一括	——	土師器	土金A	口縁部	約20%	体部内面板状工具によるナデ調整、胎土に石英・チヤート・片岩M・L亜角礫中量含む、A胎土に類似、反転復元
19	図46	図版33	1	97	2006-II 区 E12-m5	第2層系・第3層系 包含層一括 遺構埋土含む	——	須恵器 東播系	捏蜂	口縁部	5%以下	口縁部端面に自然釉薄く付着、重ね焼痕あり、ロクロ回転方向：右回り、第Ⅱ期第2段階の範疇か、断面のみ
20	図46	図版33	17	56	2006-II 区 E12-n6	第3層系包含層一括	——	須恵器	坏A	口縁部～底部	約10%	未調整の底部から内湾して体部へ、口縁部は直線的に上方に延びる、ロクロ回転方向：右回り、Ⅲ型式2段階、反転復元
21	図46	図版33	18	14	2006-II 区 E12-k1	第3層系一括 遺構埋土含む	——	須恵器	坏A	口縁部	約10%	体部から内湾して口縁部へ続く、胎土緻密、ロクロ回転方向：左回り、Ⅲ型式2段階、反転復元
22	図46	図版33	20	78	2006-II 区 E12-q4	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	須恵器	甕	口縁部	5%以下	Ⅲ型式2段階、断面のみ
23	図46	図版33	16	59	2006-II 区 E12-p6	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	黒色土器	椀	体部～底部（高台部）	約25%	胎土は図47-43（実64）瓦器小皿に類似し10YR6/6明黄褐色、磨滅のため調整不明瞭、反転復元
24	図46	図版33	19	59	2006-II 区 E12-p6	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	灰釉陶器	山茶椀	口縁部	約10%	外傾する口縁部、口縁端部は丸く納める、内面斑点状に薄く灰釉付着、胎土微密、北部系山茶椀東濃型7型式、反転復元
25	図47	図版33	21	76	2006-II 区 E12-l7	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	土師器	小皿	口縁部～底部	約25%	内湾する底部から外反する短い口縁部へ続く、底部未調整、胎土にチャートS円礫微量含む、反転復元
26	図47	図版33	22	72	2006-II 区 E12-q4	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	土師器	皿	口縁部～底部	約10%	全体に扁平な器形で口縁部は低く外方に延びる、磨滅のため調整不明瞭、反転復元
27	図47	図版33	23	33	2006-II 区 E12-r5	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	瓦器	小皿	口縁部～底部	約90%	丸みのある底部からやや内湾ぎみに延びる口縁部へ続く、外面部ミガキなし、外面磨滅著しくやや軟質（胎土B）、やや歪つ
28	図47	図版33	24	30	2006-II 区 E12-n2	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	瓦器	小皿	口縁部～底部	約90%	見込み放射状の工具痕、底部外面に粘土の貼り足し痕、かなり歪つ、外表面やや磨滅ぎみで焼成遺存良好堅緻（胎土A）
29	図47	図版33	25	2	2006-II 区 E12-p9	第3層系	——	瓦器	小皿	口縁部～底部	約25%	口縁部は、強いヨコナデのためやや内湾ぎみに立ち上がる、外表面磨滅で焼成遺存やや軟質（胎土B）、反転復元
30	図47	図版33	30	66	2006-II 区 E12-l8・9	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	瓦器	椀	口縁部～底部（高台部）	約20% 約20%	厚い体部から外方に延びる口縁部へ続く、内面側壁のミガキは太く幅3mm極めて粗く施される、器形は極めて歪つ、焼成堅緻（胎土A）、反転復元
31	図47	図版33	31	20	2006-II 区 E12-n2	第3層系一括 遺構埋土含む	——	瓦器	椀	口縁部～底部	約5% 約10%	歪つな体部から上方に直線的に延びる口縁部へ続く、内面側壁のミガキは太く幅3mm極めて粗く施される、焼成遺存（胎土B）、細片のため口径不明確、反転復元

2006～2008 藤並地区遺跡 出土遺物一覧

No 2

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
32	図47	図版34	32	89	2006-II区E12-ℓ5	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	土師器	土釜A	口縁部	約20%	外面頸部以下板状工具によるナデ、口縁端部は内方に摘み上げる、胎土に長石・チャートSS～M・亞円礫多量・石英・片岩SS～M・角礫少量含む（A胎土）、反転復元
33	図47	図版34	34	88	2006-II区E12-m6	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	土師器	土釜B	口縁部～ 鋸部	5%以下 約20%	鋸より下に斜め右上がりのタタキ、胎土に石英・チート・長石SS・角礫多量・M～LL・角礫少量（C胎土）、鋸以下に煤薄く付着、反転復元
34	図47	図版34	37	56	2006-II区E12-n6	第3層系包含層一括	——	備前	擂鉢	口縁部	約20%	内外面5PB5/1青灰色・断面2.5YR5/4にぶい赤褐色を呈する、口クロ回転方向：右回り、乗岡編年中世4b期・間壁編年IVB期、反転復元
35	図47	図版34	40	72	2006-II区E12-q4	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	白磁	碗	口縁部～体部	約10%	口縁端部を上方に摘み上げる、施釉は内面均一、外面上らうりあり、大宰府分類白磁碗IV 1b類に該当か、反転復元
36	図47	図版34	41	33	2006-II区E12-r5	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	青磁	碗	口縁部～体部	約10%	色調5G7/1明緑灰色を呈する、幅の広い片切り彫りによる縞蓮弁文、太宰府分類龍泉窯系青磁碗I 5b類、反転復元
37	図47	図版34	43	66	2006-II区E12-ℓ8・9	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	白磁	碗	体部～ 底部（高台部）	約25%	内面見込と体部の境目に圓線1条、底部置付露胎、太宰府分類白磁碗IV 1a類、反転復元
38	図47	図版35	56	151 (153)	2006-II区E12-ℓ2	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	須恵器	陶棺	脚部	不明	全体にやや内傾して立ち上がる、内面は下端の縦方向のナデ調整のち上半の横方向のナデ調整、外面上全体に横方向のナデ調整、全体に磨滅・軟質化が著しい、反転復元
39	図47	図版35	57	172	2006-II区E12-	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	須恵器	陶棺	脚部	不明	全体に歪つて内湾して立ち上がる、内面は横方向の複雑なナデ調整・外面は磨滅のため調整不明、全体に粘土の接合痕が顕著、軟質化が著しい、反転復元
40	図47	図版35	55	151	2006-II区E12-ℓ2	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	土師器	椀	体部～ 底部（高台部）	約50%	器壁の厚い底部から内湾して体部に延びる、高台は断面逆三角形、見込暗文は太く幅2～3mm粗く螺旋状に施される、本来は瓦器挽か、焼なしし、反転復元
41	図47	図版35	60	172	2006-II区E12-	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	土師器	小皿	口縁部～ 底部	約20% 約20%	薄い底部から内湾して短い口縁部に延びる、内面10YR7/6明黄褐色で軟質化、磨滅著しい、瓦器小皿胎土Dの可能性あり、反転復元
42	図47	図版35	61	164	2006-II区E12-k2	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	土師器	小皿	口縁部～ 底部	約25% 約25%	薄い底部からやや外傾して短い口縁部に延びる、色調は図47-41（実60）に類似し軟質化、磨滅著しい、反転復元
43	図47	図版35	64	127	2006-II区E12-k3	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約20% 約20%	見込暗文磨滅のため不明確、ミガキ幅約2mm・断面10YR6/6明黄褐色で軟質化（胎土C）、反転復元
44	図47	図版35	63	141	2006-II区E12-j2	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約20% 約25%	平坦な底部からやや内湾ぎみの口縁部に延びる、口縁部の強い横方向のナデにより端部は大きく丸みをもつ、見込幅約2mm乱雑なミガキ、底部外側面静止糸切り、焼成遺存omiteで良好堅緻（胎土A）、反転復元
45	図47	図版35	66	144	2006-II区E12-j2	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	瓦器	椀	口縁部～ 底部（高台部）	約10% 約20%	底部から内湾して口縁部に延び端部を丸く納める、見込暗文は幅2mm極めて粗く螺旋状に内面側壁に及ぶ、焼成遺存極めて良好堅緻（胎土A）、反転復元
46	図47	図版35	68	166	2006-II区E12-i2	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	瓦器	小椀	口縁部～ 底部（高台部）	5%以下 約10%	底部からやや内湾して口縁部に延び端部で僅かに外反する、やや磨滅ぎみで軟質化（胎土C）、反転復元
47	図47	図版35	62	162	2006-II区E12-j2	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	土師器	土釜A	口縁部	約10%	「く」字に折れ曲がる頸部からやや外反ぎみの口縁部、口縁端部は上方に摘み上げる、胎土にA片岩・チャート・長石・石英M～LL中量含む（A胎土）、全体に磨滅著しい、反転復元
48	図47	図版35	69	151	2006-II区E12-ℓ2	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち一括 第5層系一括	須恵器東播系	捏鉢	口縁部	5%以下	口縁端部上方・下方に肥厚する、ロクロ回転方向：左回り、第Ⅲ期第2段階・断面のみ
49	図47	図版35	70	114	2006-II区E12-m4	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第4層一部	白磁	碗	口縁部～体部	不明	緩やかに内湾する口縁部、口縁端部は外方に緩く折れ曲がる、外面部口縁端部に釉溜りが認められる、太宰府分類白磁碗V 1a類・断面のみ
50	図48	図版36	74	187	2006-II区E12-r4	——	1落ち 第5層系一括 第6層含む 下部遺構含む	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約40% 約50%	やや内湾する底部から緩やかに外反する短い口縁部に延びる、焼成遺存磨滅著しくやや軟質化（胎土B）、反転復元
51	図48	図版36	75	186	2006-II区E12-q3	——	1落ち 第5層系一括 第6層含む	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約30% 約30%	やや厚い底部からやや内湾して立ち上がる短い口縁部に延びる、口縁部は強いナデ調整、焼成遺存やや軟質化の部分も認められるが良好堅緻（胎土A）、反転復元
52	図48	図版36	72	187	2006-II区E12-r4	——	1落ち 第5層系一括 第6層含む 下部遺構含む	瓦器	椀	体部～ 底部（高台部）	約50%	厚みの整った腰の低い体部、高台は低く逆台形状を呈する、見込暗文は幅3mm極めて粗く連結輪状から内面側壁のミガキに連続する、焼成遺存良好堅緻（胎土A）、反転復元
53	図48	図版36	77	187	2006-II区E12-r4	——	1落ち 第5層系一括 第6層含む 下部遺構含む	須恵器東播系	捏鉢	口縁部	約10%	口縁端部で上方に軽く肥厚する、ロクロ回転方向：右回り、第Ⅲ期第1段階、反転復元
54	図48	図版36	78	137	2006-II区E12-k4	——	1落ち 第5層系一括 下部遺構含む	須恵器	坏A	口縁部～ 腹部	約10% 約10%	やや厚めの底部から内湾して立ち上がり口縁部に延びる、内外面共に自然釉薄く付着、焼成遺存良好、反転復元
55	図48	図版36	79	137	2006-II区E12-k4	——	1落ち 第5層系一括 下部遺構含む	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約50% 約50%	やや内湾する底部から緩やかに内湾する口縁部に延びる、焼成遺存内外面共に磨滅著しく軟質化（胎土B）、反転復元
56	図48	図版36	80	190	2006-II区E12-o5	——	1落ち 第5層系一括 下部遺構含む	白磁	碗	腰部～ 底部（高台部）	約30%	内面見込と体部の境目に片切り彫りによる圓線1条、腰部下部から露胎、太宰府分類白磁碗IV 1a類・断面のみ
57	図48	図版36	81	131	2006-II区E12-m3	——	1落ち 第5層系下部一括	須恵器	坏A	口縁部～ 底部	5%以下 約25%	見込は強い回転ナデにより凹みを呈する、全体に磨滅著しくやや軟質化、反転復元
58	図48	図版36	82	131	2006-II区E12-m3	——	1落ち 第5層系下部一括	須恵器	長頸壺	口縁部	約20%	大きく外反する口縁部、口縁端部は丸く納める、内面にスナ入り粘土の融着あり、断面5YR6/2灰褐色、出土登録153(E12-m2-1落ち 第5層系一部、第3層系包含下部含む)と接合、反転復元
59	図48	図版36	83	131	2006-II区E12-m3	——	1落ち 第5層系下部一括	瓦質	甕	口縁部	不明	器壁の薄い肩部から内傾して口縁部に延びる、口縁端部は、肥厚して外方に短く折り返す、内面はナデ調整、外面はタタキ調整、断面のみ
60	図48	図版36	84	178	2006-II区E12-r4西半	——	1落ち 第6層系一括	土師器	高台付皿	底部（高台部）	約20%	やや突出ぎみの見込から緩やかに内湾して体部に延びる、内外面共に磨滅著み、反転復元
61	図48	図版36	85	178	2006-II区E12-r4西半	——	1落ち 第6層系一括	瓦器	小皿	口縁部～底部	約80%	やや内湾する底部から緩やかに外反する口縁部に延びる、器形はかなり歪つ、焼成遺存内外面共に磨滅著しく軟質化（胎土B）
62	図48	図版36	86	178	2006-II区E12-r4西半	——	1落ち 第6層系一括	瓦器	椀	口縁部～体部	約10%	体部から内湾して口縁部に延びる、口縁端部は丸く納める、見込暗文は幅3mm極めて粗く連結輪状から内面側壁のミガキに連続する、器形はやや歪つ、焼成遺存やや軟質化（胎土B）、反転復元

2006～2008 藤並地区遺跡 出土遺物一覧

No 3

遺物番号	插図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
63	図48	図版36	88	210	2006-II区E12-q4	基盤層直上	12 土坑 土層4	土師器	小皿	口縁部～底部	約40%	やや厚い底部から内湾して立ち上がる口縁部に延びる、内外面共に磨滅著しく焼成遺存やや軟質化、反転復元
64	図48	図版36	90	203	2006-II区E12-q4	基盤層直上	12 土坑一括	瓦器	椀	底部（高台部）	約60%	見込暗文は幅2mmやや粗く連結輪状から内面側壁のミガキに連続か、高台断面逆三角形状を呈する、焼成遺存やや軟質化（胎土B）、反転復元
65	図48	図版37	133	47	2006-III区北半E13-n25	第3層系包含層 下部一括 遺構埋土含む	——	須恵器	細頭壺	口縁部～ 頸部	約40% 約90%	筒状に延びる頸部から屈曲して外方に延びる口縁部に統続、口縁端部は内側上方に摘み上げる。頸部に2条の凹線、ロクロ回転方向：右回り、IV型式3段階
66	図48	図版37	126	18	2006-III区北半E14-n2	第3層系包含層 搅乱含む	——	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約10% 約25%	やや厚みのある底部から軽く内湾する口縁部に延びる、口縁部の残存率が低いため口径不明瞭、焼成遺存やや軟質化（胎土B）、反転復元
67	図48	図版37	127	24	2006-III区北半E14-m1	第3層系包含層一括 搅乱含む	——	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約20% 約10%	凹み状の底部からやや外反ぎみの口縁部に延びる、器形全体が歪つ、焼成遺存やや軟質化（胎土B）、反転復元
68	図48	図版37	135	48	2006-III区北半E13-o25	第3層系包含層 下部一括 遺構埋土含む	——	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約10% 約20%	扁平な底部からやや内湾する口縁部に延びる、焼成遺存やや磨滅さみのため調整不明瞭（胎土B）、反転復元
69	図48	図版37	125	36	2006-III区北半E13-m24	第3層系包含層一括 上部	——	瓦器	椀	口縁部～ 体部	約20% 約10%	内湾ざみの体部からそのまま口縁部に延びる、体部内面側壁のミガキは太く幅3mm極めて粗く施される、焼成遺存堅緻（胎土A）、同一個体数片接合不可、反転復元
70	図48	図版37	130	3	2006-III区北半E13-m24	第3層	——	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	5%以下	口縁端部で上下に肥厚する、外面に重ね焼痕、ロクロ回転方向：右回り、細片のため口径不明瞭、第Ⅲ期第1段階、反転復元
71	図48	図版37	129	1	III区 北半E13-m22	第3層	——	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	5%以下	口縁端部で上下に肥厚ざみ、外面に重ね焼痕、ロクロ回転方向：右回り、第Ⅲ期第2段階、断面のみ
72	図48	図版37	136	39	2006-III区北半E13-m24	第3層系包含層 下部一括 基盤層遺構含む	——	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	約10%	口縁端部で上下に肥厚する、外面に重ね焼痕、ロクロ回転方向：左回り、第Ⅲ期第1段階、反転復元
73	図48	図版37	138	63	2006-III区南半E14-m6-7	基盤層直上	41 小溝	瓦器	椀	口縁部	約10%	外反ぎみの口縁部、焼成遺存磨滅のため調整不明瞭（胎土B）、細片のため口径不明瞭、反転復元
74	図48	図版37	139	64	2006-III区南半E14-n7	基盤層直上	35b 小溝	瓦器	椀	口縁部	約10%	内湾ざみの口縁部、内面側壁のミガキは太く幅3mm極めて粗く施される、焼成遺存堅緻（胎土A）、細片のため口径不明瞭、反転復元
75	図48	図版37	140	59	2006-III区南半E14-m5-6 n6	基盤層直上	40b 小溝	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	5%以下 約25%	やや内湾ざみの底部から緩く外反する口縁部に延びる、焼成遺存磨滅著しく軟質化（胎土C）、細片のため口径不明瞭、反転復元
76	図48	図版37	141	61	2006-III区南半E14-m6-n7	基盤層直上	36b 小溝	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約10% 約10%	内湾ざみの口縁部、焼成遺存磨滅著しく軟質化（胎土C）、細片のため口径不明瞭、反転復元
77	図48	図版37	142	68	2006-III区南半E14-m-n5	基盤層直上	42 小溝一括	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	5%以下 約20%	厚みのある底部から斜め上方に直線的に延びる口縁部に統続、焼成遺存やや軟質化（胎土B）、反転復元
78	図49	—	147	6	2007-I区南半E13-x10	——	22 土坑 一括	瓦器	椀	体部～ 底部	約10% 約5%	内湾ざみの薄い体部、高台は低い逆三角形状を呈する、焼成遺存磨滅著しく調整不明瞭（胎土D）、反転復元
79	図49	—	146	2	2007-I区北半E13-y2	第3層系包含層	——	瓦器	椀	口縁部	不明	器壁の薄い外反ぎみの口縁部、焼成遺存磨滅著しく軟質化（胎土C）、断面のみ
80	図49	—	149	3	2007-II区E13-o6	——	5 土坑 一括	瓦器	椀	底部（高台部）	約20%	器壁の薄い底部に丸みのある逆台形状の高台が付く、焼成遺存磨滅著しく調整不明瞭（胎土B）、反転復元
81	図49	—	148	3	2007-II区E13-o6	——	5 土坑 一括	瓦器	椀	口縁部	不明	外反ぎみの口縁部、焼成遺存磨滅のため調整不明瞭（胎土B）、断面のみ
82	図49	—	150	4	2007-II区E13-o-p10	——	17 土坑 一括	瓦器	椀	口縁部～体部	不明	内湾ざみの体部から緩く外反する口縁部に延びる、焼成遺存磨滅のため調整不明瞭（胎土B）、断面のみ
83	図49	図版38	152	1	2007-III区C11-k25	——	1 溝 一括	土師器	小皿	口縁部～ 底部	約20% 約30%	扁平な底部から内湾ざみの口縁部に延びる、底部と口縁部の境は不明確、口縁部やや歪つのため口径不明瞭、反転復元
84	図49	図版38	153	11	2007-III区C12-i2	——	1溝 上・中層 図の2,3	土師器	壺	口縁部～ 体部	約20% 約10%	平安、内湾する体部から口縁部に延びる、体部から口縁部にかけて三段の横ナテ、内外面共に磨滅著しく調整不明瞭、反転復元
85	図49	図版38	154-1	25	2007-III区c11-k25	——	1溝分岐点 上・中層 図の2,3	土師器	皿	口縁部～ 体部	約10% 約10%	器壁の厚い体部から斜め外方に延びる口縁部に統続、内外面共に磨滅著しく調整不明瞭、反転復元
86	図49	図版38	154-2	1	2007-III区c11-k25	——	1溝 一括	瓦器	椀	口縁部～ 体部	約10% 約10%	器壁の薄い体部からやや内湾ざみの口縁部に延びる、口縁端部内面に浅い沈線、焼成遺存磨滅著しく調整不明瞭（胎土B）、反転復元
87	図49	図版38	155	10	2007-III区c12-i2	——	1溝 最上層第3層系 図の1	瓦器	椀	口縁部～ 体部	約5% 約10%	内面側壁のミガキはやや細く1.5mm強に施される、焼成遺存やや磨滅ざみ（胎土Bざみ）、反転復元
88	図49	図版38	158	15	2007-III区c12-j-i1	——	1溝 中層・下層 図の3以下	土師器	小皿	口縁部～ 底部	約20% 約20%	扁平な厚い底部からそのまま低く延びる口縁部へ統続、焼成遺存二次焼成のため赤変、反転復元
89	図49	図版38	159	15	2007-III区c12-j-i1	——	1溝 中層・下層 図の3以下	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約98% 100%	扁平な薄い底部から斜め外方に開く口縁部に延びる、焼成遺存磨滅著しく調整不明瞭（胎土C）
90	図49	図版38	160	18	2007-III区c12-j-2	——	1溝 中層・下層 図の3以下	瓦器	椀	口縁部～ 底部（高台部）	約95% 100%	緩やかに内湾する底、体部からやや外反する口縁部に延びる、口縁部1/2はかなり歪つ、見込暗文は幅1mm細くジグザグ状、内面側壁のミガキは幅1mm比較的密に施される、口縁部外面に幅1～1.5mm細いミガキ僅かに施される、焼成遺存良好堅緻（胎土A）、外面部重ね焼痕
91	図49	図版38	161	17	2007-III区c12-i2	——	1溝 中層・下層 図の3以下	瓦器	椀	口縁部～ 底部（高台部）	約70% 100%	緩やかに内湾する底、体部からやや直立する口縁部に延びる、見込暗文は不明、内面側壁のミガキは密であるが磨滅のため単位不明、焼成遺存軟質化（胎土B）
92	図49	図版38	162	34	2007-III区c11-j-k25	——	1溝 中層・下層 一部最下層含む	黒色土器A 類	椀	口縁部～ 底部（高台部）	約20% 約60%	内湾ざみの底、体部からそのまま内湾する口縁部に延びる、口縁部外側の一部まで黒色化、高台は大きくなる逆台形状を呈する、内外面共に磨滅著しく調整不明瞭、反転復元
93	図49	図版39	166	38	2007-III区c11-k25	——	1溝 最下層より下位 黄褐色粗砂	土師器	小皿	口縁部～ 底部	約20% 約20%	厚い底部から斜め外方に低く延びる口縁部に統続、底部は平坦であるが糸切りは認められない、内外面共に磨滅のため調整不明瞭、反転復元
94	図49	図版39	165	23	2007-III区c12-j-i1	——	1溝 最下層	土師器	皿	口縁部～ 体部	約10% 約5%	緩やかに内湾する底、体部からやや外反する口縁部に統続、器面の磨滅著しいため調整不明、反転復元

2006～2008 藤並地区遺跡 出土遺物一覧

No. 4

遺物番号	插図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
95	図49	図版39	167	36	2007-Ⅲ区 c11-j-k25	——	1溝 最下層	黒色土器A 類	椀	口縁部～ 体部	約10% 約5%	緩やかに内湾する体部から、そのまま口縁部に続く、口縁部はやや肥厚ぎみ、全体に焼しは非常に薄く土器の可能性もあり、反転復元
96	図49	図版39	168	36	2007-Ⅲ区 c11-j-k25	——	1溝 最下層	黒色土器A 類	椀	口縁部～ 体部	約10% 約5%	体部から口縁部にかけて内湾して延びる、口縁部は体部に比してやや肥厚ぎみ、内外面共に磨滅のため調整不明瞭、焼しはやや薄い、反転復元
97	図49	図版39	229	124	2008-Ⅱ区 1/2西側 E12-m17	包第3・4層	——	瓦器	小壺	口縁部～ 底部	約20% 約70%	器壁の厚い底・体部に口縁部を貼り足す。縦長の体部から外傾する口縁部に延びる、焼成遺存や軟質(胎土B)、底部欠損、一部反転復元
98	図50	図版39	115	162	2006-Ⅱ区 E12-j2	——	1落ち 第5層系一括 一部、第3層系 包含層 下部含む	旧石器 ナイフ形 石器	有底剥片		約100%	表面に石核底面あり、側縁は背腹両面側から急角度の打面調整が認められる、刃部に刃毀れとみられる小打痕が認められる、長さ5.1cm・幅1.5cm・厚さ0.9cm・重量6.0g・石材：サヌカイト
99	図50	図版39	287	12	2008-Ⅶ区 C12-p1 地点6	下位面 粗砂細礫層	——	旧石器 調整痕の ある剥片		完形	100% 完形	刃縁部に細かい刃毀れ痕が認められることからナイフ形石器としての使用も考えられる、右側下端部に角度の浅い調整痕(二次加工痕)、左側側縁の裏面に浅い調整痕、典型的なナイフ形石器ではない故に「調整痕のある剥片」と記述した方がよい、長さ4.0cm・幅1.7cm・厚さ0.6cm・重量3.4g・石材：サヌカイト
100	図50	図版39	288	15	2008-Ⅶ区 C12-o1 地点9	下位面 粗砂細礫層	——	旧石器 ナイフ形 石器		完形	100% 完形	刃縁部下半に調整痕、上半部は加工痕が認められない、左側一側縁全体に調整痕、主剝離面となる面にハルブが認められる、長さ3.8cm・幅1.6cm・厚さ0.6cm・重量3.6g・石材：サヌカイト
101	図50	図版39	289	24	2008-Ⅷ区 C12-q3 地点22	下位面 粗砂細礫層	——	旧石器 ナイフ形 石器		完形	100% 完形	刃縁部に浅い角度の剥離を丁寧に施す。左側一側縁全体に急角度な背部調整、特徴として器頭が薄く幅広である、典型的なナイフ形石器ではないが刃縁部を作り出すためナイフ形石器に分類する。長さ4.2cm・幅2.0cm・厚さ0.4cm・重量4.4g・石材：サヌカイト
102	図50	図版39	290	36	2008-Ⅶ区 C12-t3 地点35	下位面 粗砂細礫層	——	旧石器 ナイフ形 石器		完形	100% 完形	自然縁辺のまま素材として利用、主剝離面側に加工痕・調整痕が認められる、自然縁辺の一部に微細な刃こぼれ痕が認められる、長さ3.8cm・幅1.1cm・厚さ0.6cm・重量2.8g・石材：サヌカイト
103	図50	図版39	292	30	2008-Ⅶ区 C12-s2 地点30	下位面 粗砂細礫層	——	旧石器 スクレイ バー		完形	100% 完形	表面先端部に刃部、両側縁全体に片面からの調整痕、長さ3.1cm・幅1.4cm・厚さ0.7cm・重量2.8g・石材：サヌカイト
104	図50	図版39	291	20	2008-Ⅶ区 C12-p2 地点16	下位面 粗砂細礫層	——	旧石器 錐状石器		完形	100% 完形	土側に打点があり上端部は凹面状を呈する、両側縁に片面からの調整痕、長さ2.3cm・幅2.4cm・厚さ0.7cm・重量4.2g・石材：サヌカイト
105	図50	図版39	293	16	2008-Ⅶ区 C12-p1 地点10	下位面 粗砂細礫層	——	旧石器 スクレイ バー		完形	100% 完形	横長剥片石核と思われる、短軸の一端に調整を施したスクレイバー、末端に調整痕、表面に自然面が遺存する。長さ4.5cm・幅2.4cm・厚さ1.3cm・重量16.2g・石材：サヌカイト
106	図50	図版39	294	40	2008-Ⅶ区 C12-t4 地点38	下位面 粗砂細礫層	——	旧石器 スクレイ バー		完形	100% 完形	刃部に僅かな調整痕が認められる、スクレイバーの可能性あり、長さ3.2cm・幅4.5cm・厚さ1.0cm・重量11.2g・石材：サヌカイト
107	図50	図版39	116	184	2006-Ⅱ区 E12-a5	——	1落ち 第5層系一括 第6層含む	旧石器 縦長剥片		剥片	100% 完形	表面の一部は自然面の可能性あり、打面の新しい割れにより打点が不明瞭となる、調整痕が認められない、長さ5.0cm・幅2.1cm・厚さ0.8cm・重量6.6g・石材：チャート
108	図50	図版39	117	178	2006-Ⅱ区 E12-t4 西半	——	1落ち 第6層系一括	旧石器 横長剥片		剥片	100% 完形	表面に横90°からの打面調整、打点部分がカットされている可能性あり(ナイフ形石器を作る素材の可能性あり)、長さ5.6cm・幅2.7cm・厚さ0.5～0.8cm・重量9.2g・石材：サヌカイト
109	図51	図版40	122	124	2006-Ⅱ区 E12-n3	——	1落ち 第4層一括	石器 石鎚		——	約95%	繩文、先端部・基部の一部欠損、凹基式、長さ(2.0cm)・幅1.1cm・厚さ0.3cm・重量(0.4g)・石材：サヌカイト
110	図51	図版40	121	43	2006-Ⅱ区 E12-p8.9	第3層系包含層 上部一括	——	石器 石鎚		——	約95%	繩文、先端部僅に欠損か、腹部の両側縁に浅い快り状の剥離痕、平基式、長さ(2.5cm)・幅1.3cm・厚さ0.3cm・重量(1.2g)・石材：サヌカイト
111	図51	図版40	145	8	2006-Ⅲ区北 半 E13-n-o25	第3層系	——	石器 石錐		——	100% 完形	全体に粗い細部調整、先端部は使用による欠損あり、長さ3.1cm・幅1.4cm・厚さ0.8cm・重量3.0g・石材：サヌカイト
112	図51	図版40	49	35	2006-Ⅱ区 E12-q5	第3層系包含層最下部 南壁側溝内断面	——	鉛製品 鉄砲弾		——	完形	型合せ痕が明確に残る、2分割する位置に2条の高い線状の盛り上がり、そこから90°の位置に低い線状の盛り上がり、径1.15cm・重量8.8g
113	図51	図版40	13	58	2006-Ⅱ区 E12-o6	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	弥生土器 甕		口縁部	5%以下	弥生時代後期中葉、胎土に石英・チャート・長石・砂岩・花崗岩麻岩M～LL円礫多量含む、反転復元
114	図51	図版40	14	68	2006-Ⅱ区 E12-o4	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	——	弥生土器 高坏		基部	不明	弥生時代後期・胎土に花崗岩麻岩・長石・チャート・石英M～LL極めて多量含む、磨滅著しい、脚部反転復元
115	図51	図版40	131	49	2006-Ⅲ区北半 E13-n24	第3層系包含層 下部一括 遺構埋土含む	——	礫石器 凹石		凹部	不明	繩文、石材の磨滅・風化著しいため敲打痕不明瞭、長さ(11.1cm)・幅(11.5cm)・厚さ(2.7～3.5cm)・重量(663g)・石材：砂岩
116	図51	図版40	137	56	2006-Ⅲ区北半 E14-n1	第3層系包含層除去 面 基盤層直上	15土坑一括	礫石器 石皿		——	不明	弥生か、砥石として兼用か、長さ(13.4cm)・幅(6.8cm)・厚さ6.3cm・重量(804g)・石材：砂岩
117	図51	図版40	175	46	2007-Ⅲ区 c12-i2	——	1溝 最下層 基底部	礫石器 砥石		——	不明	砥面は四面、図示した一面がもっとも滑らかで凹面を成す、その対称となる裏面も滑らかになるが凸面が残る、一面は凹面を成し多数の敲打痕が残る、長さ(16.5cm)・幅6.5cm・厚さ7.8cm・重量(1489g)・石材：砂岩
201	—	図版32	91	268	2006-Ⅰ区 E11-j25	第5層系一括	——	須恵器 蓋		口縁部	約10%	やや厚みのある天井部から厚く丸みのある口縁端部に延びる、天井部外面はハラケズリか、クロクロ回転方向：左回り、天井部外面に自然釉薄く付着、未実測
202	—	図版32	92	268	2006-Ⅰ区 E11-j25	第5層系一括	——	土師器 小壺	底部(高台部)	約50%	外面に大きく広がる高台部、焼成遺存や軟質化、未実測	
203	—	図版32	97	238	2006-Ⅰ区 E11-g19	51谷状落ちより上?	52石列西側	白磁 碗	底部(高台部)	約30%	内面見込みと体部の境目に園線1条、内面に細かい貫入多数あり、外面部露胎、太宰府分類白磁碗V1a類、口クロ回転方向：左回り、未実測	
204	—	図版32	103	250	2006-Ⅰ区 E11-g21	——	51谷状落ち 第7a層	瓦器 椀	底部(高台部)	約90%	凹み底面の平均した厚みの底部から腰部に延びる、内面見込みと体部の境目に園線1条、内面に細かい貫入多数あり、外面部露胎、太宰府分類白磁碗V1a類、口クロ回転方向：左回り、未実測	

2006～2008 藤並地区遺跡 出土遺物一覧

No. 5

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
205	—	図版32	105	245	2006-I区E11-h19	—	51 谷状落ち東側肩口第7a層	瓦器	椀	底部(高台部)	約50%	平均した厚みの底部から腰部に延びる、見込暗文は幅3mm粗く乱雜な連結構、内面側壁のミガキは不明、高台は逆台形状、焼成遺存良好堅緻(胎土A)、未実測
206	—	図版32	108	285	2006-I区E11-g19	—	52 石列状遺構第5層疊多量	瓦質	三足釜	口縁部	5%以下	内湾して立ち上がり、口縁端部で内側に丸く肥厚する、胎土に流紋岩・長石・石英S・M多量含む、焼成遺存二次焼成のため硬化、未実測
207	—	図版32	109	285	2006-I区E11-g19	—	52 石列状遺構第5層疊多量	瓦質	三足釜	脚部	不明	206(実108)と同一個体、脚部外側に縱方向のヘラナテ調整、焼成遺存二次焼成のため硬化、未実測
208	—	図版32	110	257	2006-I区E11-h23	—	51 谷状落ち第7a層～c層一括	須恵器	蓋	天井部～口縁部	約10% 約10%	整った器形、天井部の約2/3は軽い回転ヘラケズリ、胎土は極めて緻密、焼成遺存良好堅緻、ロクロ回転方向：右回り、未実測
209	—	図版32	111	269	2006-I区E11-i18-19	—	51 谷状落ち第7a層～c層一括	瓦器	椀	底部(高台部)	約50%	平均した厚みの底部から腰部に延びる、見込暗文は太く幅2～3mm丁寧な連結構、高台は逆三角形状、焼成遺存良好堅緻(胎土A)、未実測
210	—	図版33	7	102	2006-II区E12-n4	第2層系・第3層系 包含層一括 遺構埋土含む	—	須恵器 東播系	捏蜂	口縁部	5%以下	器壁が薄く小型品、ロクロ回転方向：左回り、第Ⅲ期第1段階、未実測
211	—	図版33	8	126	2006-II区E12-n2	第2層系包含層一括 第3層系包含層上部一括	—	備前	擂鉢	口縁部	5%以下	胎土に凝灰岩質3L微量含む、乗岡編年中世5a期、間壁編年IVB期、未実測
212	—	図版33	9	125	2006-II区E12-k3	第2層系包含層 第3層系包含層上部一括	—	備前	擂鉢	体部～底部	5%以下	胎土に凝灰岩・流紋岩S～3L多量含む、内面使用磨滅痕あり、振り目7条、ロクロ回転方向：左回り、未実測
213	—	図版33	10	171	2006-II区E12-k1	第2層系一括 第3層系包含層上部一括	—	青磁	碗	口縁部	5%以下	色調明オリーブ灰5GY7/1を呈する、浅い縞蓮弁文、太宰府分類龍泉窯系青磁碗I5b類、未実測
214	—	図版33	11	143	2006-II区E12-m1	第2層系一括 第3層系包含層上部一括	—	土師器	管状土錐	—	約40%	外径1.3cm・内径0.5cm・長さ(3.3cm)・重量(4.6g)未実測
215	—	図版33	26	32	2006-II区E12-q5	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	瓦器	小皿	口縁部～底部	約20% 約50%	平坦な底部から内湾ぎみに延びる口縁部へ続く、口縁端部は工具によるナデのため内傾する面を成す、焼成遺存良好堅緻(胎土A)、未実測
216	—	図版33	27	89	2006-II区E12-l6	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	瓦器	小皿	口縁部～底部	約25%	斜め外方に延びる口縁部、磨滅ぎみで焼成遺存やや軟質(胎土B)、未実測
217	—	図版33	28	93	2006-II区E12-n6	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	瓦器	椀	口縁部～体部	5%以下 約10%	口縁端部は緩やかに外反ぎみ、内面側壁のミガキは比較的細く幅1mmやや粗く施こされる、見込暗文は不明、外面磨滅ぎみで焼成遺存堅緻(胎土A)～胎土B)、未実測
218	—	図版33	29	51	2006-II区E12-p7	第3層系包含層一括	—	瓦器	椀	口縁部～体部	約10% 約10%	内面側壁のミガキはやや太く幅2mm、かなり粗く施こされる、口縁部かなり歪つ、内外面共に磨滅ぎみで焼成遺存や堅緻(胎土B)、未実測
219	—	図版34	33	74	2006-II区E12-n7	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	土師器	土釜A	口縁部	約20%	図47-32(実32)と同形態・同胎土(A胎土)、口縁部端面以下の外面に煤薄く付着、未実測
220	—	図版34	35	56	2006-II区E12-n6	第3層系包含層一括	—	瓦質	土釜	鋸部	約10%	胎土に長石・石英・チャートSS～LL中量含む、磨滅著しい、未実測
221	—	図版34	36	50	2006-II区E12-n7	第3層系包含層一括	—	瓦質	火舎	底部	5%以下	厚い底部から斜め外方に直線的に延びる体部、磨滅著しいため調整不明、未実測
222	—	図版34	38	12	2006-II区E12-k3	第3層系一括 遺構埋土含む	—	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	5%以下	やや軟質、第Ⅱ期第2段階、未実測
223	—	図版34	39	14	2006-II区E12-k1	第3層系一括 遺構埋土含む	—	須恵器 東播系	捏鉢	体部～底部	5%以下	底部外面の一部に布目状圧痕が認められる、ロクロ回転方向：右回り、未実測
224	—	図版34	42	9	2006-II区E12-k6	第3層系一括 遺構埋土含む	—	青磁	小碗?	口縁部～体部	5%以下	外面体部に1条の園線様の線あり、未実測
225	—	図版34	48	46	2006-II区E12-o8-9	第3層系包含層下部大半、造構埋土?	—	瀬戸美濃	おろし皿	底部	5%以下	見込におろし目、外底は静止糸切り、未実測
226	—	図版34	50	43	2006-II区E12-p8-9	第3層系包含層上部一括	—	白磁	角环	腰部～体部	不明	遺存部が少ないが五角坏か、釉調は乳濁色、底部に露胎部分有り、未実測
227	—	図版35	51	123	2006-II区E12-n3	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層	須恵器	坏	口縁部～腰部	約10%	口縁部はやや内湾して立ち上がり端部を丸く納める、内外面共に自然釉薄く付着、焼成良好、未実測
228	—	図版35	52	144	2006-II区E12-j2	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層	須恵器	蓋	天井部～摘み部	遺存部位 100%	扁平な天井部に扁平な摘み部を付す、外面に自然釉薄く付着、Ⅳ型式1段階の範疇か、未実測
229	—	図版35	53	136	2006-II区E12-l3	下部造構埋土含む	1落ち 第5層系一括	須恵器	高坏	基部～脚柱部	不明	杯部内面N4/O灰色、杯部～脚柱部外面に自然釉薄く付着、未実測
230	—	図版35	54	133	2006-II区E12-n3	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	須恵器	甕	口縁部	不明	口縁部は大きく外反し端部は下方に肥厚する、口縁部端面及び肥厚部下面以外に自然釉やや厚く付着、未実測
231	—	図版35	58	107 (136)	2006-II区E12-l4	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層一括	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面は布目痕のち左下側から右上がり斜め方向の粗いハケ調整、凸面は格子叩きのち右下側から左上方に斜め方向の粗いハケ調整、焼成遺存極めて良好堅緻、未実測
232	—	図版35	59	174	2006-II区E12-n7	第5層除去面 ベース直上	踏み込み一括	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面は布目痕のち下側から上方向の粗いハケ調整、凸面は格子叩きのち下側からやや斜め上方向の粗いハケ調整、焼成遺存極めて良好堅緻、未実測
233	—	図版35	65	156	2006-II区E12-l2北半	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	瓦器	小皿	口縁部～底部	5%以下 約20%	やや扁平な底部から緩く内湾して短い口縁部に延びる、焼成遺存磨滅著しくやや軟質化(胎土B)、未実測
234	—	図版35	67	104	2006-II区E12-k4	一部、第3層系包含層下部含む?	1落ち一括 第5層一括	瓦器	椀	口縁部	約10%	薄い体部からやや内湾ぎみの口縁部に延びる、口縁部内に傾する面を成す、焼しほ殆ど遺存しないが焼成遺存極めて良好堅緻、未実測
235	—	図版36	71	168	2006-II区E12-i1	一部、第3層系包含層下部含む	1落ち 第5層系一括	須恵器	甕	頸部	不明	緩やかに外反する頸部、強い回転ナテのち一本引き波状、胎土は緻密、焼成やや軟質化、ロクロ回転方向：右回り、Ⅲ型式2段階、出土登録184、186と同一個体、未実測
236	—	図版36	73	183	2006-II区E12-q4	—	1落ち 第5層系一括 第6層含む	瓦器	椀	底部(高台部)	約30%	厚みの整った体部、高台は低く逆三角形状を呈する、見込暗文は幅2mmやや粗く連結構から内面側壁のミガキに連続する、焼成遺存やや軟質化(胎土B)、未実測
237	—	図版36	76	185	2006-II区E12-p3	—	1落ち 第5層系一括 第6層含む	瓦器	小皿	口縁部～底部	約10% 約20%	整った底部からやや外反して短い口縁部に延びる、焼成遺存磨滅著しくやや軟質化(胎土B)、未実測
238	—	図版37	123	23	2006-III区北半E14-n1	第3層系包含層一括 搅乱含む	—	須恵器	坏?	口縁部	不明	直線的に外傾する口縁部、口縁端部は外側に軽く摘み出し上端に面を成す、内面に自然釉薄く付着、未実測

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
239	—	図版37	124	16	2006-Ⅲ区北半 E14-n4	第3層系 遺構埋土含む?	—	須恵器	壺B	底部(高台部)	約95%	厚みのある高台、腰部から屈曲して体部に続く、外 面全体に自然釉薄く付着、ロクロ回転方向:右回り、 未実測
240	—	図版37	128	31	2006-Ⅲ区北半 E13-n24 北半	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約20% 約20%	やや内湾ざみの底部から器壁の薄い短い口縁部に延 びる、焼成遺存軟質化(胎土B)、未実測
241	—	図版37	134	47	2006-Ⅲ区北半 E13-n25	第3層系包含層 下部一括 遺構埋土含む	—	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面細かい布目痕、凸面は格子叩き、焼成遺存極めて堅緻、未実測
242	—	図版37	143	57	2006-Ⅲ区南半 E14-n7	基盤層直上 中世包含層含む	—	土師器	土釜A	口頸部	不明	「く」の字に屈曲する口頸部、口縁端部は内側上方 に摘み上げる、胎土に長石・片岩・チャートM・L 角礫を極めて多量含む、焼成遺存二次焼成のため硬 化、未実測
243	—	図版37	144	58	2006-Ⅲ区南半	埋土	36(スキ溝)	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面細かい布目痕、凸面は細かめの格子叩き、焼成 遺存極めて堅緻、未実測
244	—	図版38	151	33	2007-Ⅲ区 C11-j-k25	—	1溝 上層・中層	黒色土器A 類	椀	体部	不明	器壁の厚い体部、二段の横ナデ、未実測
245	—	図版38	156	21	2007-Ⅲ区 c11-j25	—	1溝 中層・下層 図の3以下	須恵器	壺	口縁部	約5%	ロクロ回転方向:右回り、Ⅱ型式6段階、未実測
246	—	図版38	157	34	2007-Ⅲ区 c11-j-k25	—	1溝 中層・下層 一部最下層含む	土師器	甕	口頸部	不明	奈良、器壁の厚い「く」の字に屈曲する口頸部、内 面体部はへラ状具によるナテ、口縁部は歪つ、胎土 に8mmの砂岩を含む、未実測
247	—	図版38	163	14	2007-Ⅲ区 c12-i2	—	1溝 中層・下層 図の3以下	瓦器	椀	体部～ 底部(高台部)	約40% 100%	緩やかに内湾する底・体部、見込暗文は不明、内面 側壁のミガキは太く幅4mm、内外面磨滅著しく調整 不明瞭、焼成遺存軟質化(胎土B)、未実測
248	—	図版39	169	39	2007-Ⅲ区 c11-k25	—	1溝北側 最下層	黒色土器A 類	椀	口縁部～ 体部	約5% 約5%	やや内湾ざみの底部から緩やかに体部・口縁部へ続 く、口縁部はやや肥厚ざみ、内外面共に磨滅著しい ため調整不明瞭、未実測
249	—	図版39	171	47	2007-Ⅲ区 c11-k25	—	1溝重複部 最下層より下位	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面は摸骨痕+細かい布目痕、凸面は斜格子叩き、 焼成遺存良好堅緻、厚み2～2.2cm、未実測
250	—	図版39	172	36	2007-Ⅲ区 c11-j-k25	—	1溝 最下層	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面は細かい布目痕、後縦方向のヘラ状工具の当 たり、凸面は非常に粗い格子状の浅い叩き、厚さ2～ 2.2cm、未実測
251	—	図版39	181	3	2008-I区 西側1/4西 F12-l 10-11	包含層第3層系	—	土製品	土鍤	—	100% 完形	細長い管状土鍤、焼成遺存良好堅緻、巻き上げ成形 痕残る、長さ3.8cm・外径0.7cm・内径0.25cm・ 重量2.2g、未実測
301	—	図版39	118	81	2006-II区 E12-p4	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	旧石器	縦長剥片	剥片	100% 完形	非常に形の整った縱長剥片、背面に放散虫化石が認 められる、長さ3.1cm・幅2.2cm・厚さ1.1cm・重 量5.0g・石材:赤色チャート、未実測
302	—	図版39	119	71	2006-II区 E12-r5	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	旧石器	横長剥片	剥片	100% 完形	長さ3.7cm・幅4.9cm・厚さ0.6cm・重量19.2g・ 石材:サヌカイト、未実測
303	—	図版39	120	31	2006-II区 E12-q6	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	旧石器	縦長剥片	剥片	100% 完形	幅広の石刃状縦長剥片、長さ3.7cm・幅3.1cm・厚 さ0.8cm・重量10.2g・石材:凝灰岩、未実測
304	—	図版39	264	50	2008-III区 C12-r1	—	30土坑 埋土一括北半 撲乱?	旧石器	錐状石器	完形	100% 完形	長さ3.7cm・幅2.5cm・厚さ1.6cm・重量13.6g・ 石材:サヌカイト、未実測
305	—	図版39	265	59	2008-III区 C12-t2	調査区南壁 補足調査	自然流路	旧石器	縦長剥片	—	不明	長さ(2.5cm)・幅4.5cm・厚さ0.8～0.9cm・重量 (11.8g)・石材:凝灰岩、未実測
306	—	図版40	234	147	2008-II区 1/2西側 E12-q18東端	—	踏み込み? 第4層系orベ ース?	石器	石鎚	—	約98% ほぼ完形	繩文、凹基無茎式、裏面の主稜線は弱い、先端一部 欠損、長さ(2.3cm)・幅1.4cm・重量(0.8g)・石材: サヌカイト、未実測
307	—	図版40	210	39	2008-II区 1/2東側 E12-k20	包含層第4層	—	銭貨	—	—	約90%	□宋通寶、磨滅しため錢文不明瞭、外径2.4cm・輪 幅0.35cm・内径1.6cm・郭0.65cm・厚さ0.1cm・ 重量(2.8g)未拓本
308	—	図版40	15	82	2006-II区 E12-p3	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	弥生土器	高壺	基部	不明	脚台部基部側は中実、胎土に長石・チャートS少量 含む、未実測
309	—	図版40	132	51	2006-III区北半 E14-m1	第3層系包含層 下部一括	—	弥生土器	甕	底部	不明	弥生前期か、ややくびれ底、胎土にチャート・長石・ 石英S・M・亞円礫を多量含む、二次焼成にて赤変、 未実測
310	—	図版40	12	139	2006-II区 E12-m2	第2層系一括 第3層系包含層上部 一括	—	礫石器	敲石	完形	100% 完形	兩側縁に細かい敲打痕あり、幅4.3cm・長さ5.1cm・ 厚さ2.7cm・重量84.8g・石材:粗粒砂岩、未実測
311	—	図版40	114	256	2006-I区 E11-g23	—	51谷状落ち 第7a層～C層 一括	礫石器	石皿	—	不明	全体形がないが弥生時代の石皿と判断、繩文時代の 可能性もあり、石材の両面に磨り減りが認められる、 長さ(6.4cm)・幅(4.8cm)・厚さ(2.4～4.1cm)・ 重量(214g)、石材:細粒砂岩(石英粒多い)、未実測
312	—	図版40	44	60	2006-II区 E12-n5	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	礫石器	砥石	—	不明	中世、遺存三面使用、石材:細粒砂岩、幅(2.4cm)・ 長さ(4.5cm)・厚さ(0.3～1.4cm)・重量(15g)、未実測
313	—	図版40	45	87	2006-II区 E12-l7	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	礫石器	台石	—	不明	弥生、中央部に細かい敲打痕が集中して認められる、 石材:中粒砂岩、幅(6.7cm)・長さ(9.8cm)・厚み(1.8 cm)・重量(146g)、未実測
314	—	図版40	46	58	2006-II区 E12-o6	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	礫石器	砥石	—	不明	中世か?二面使用、石材:中粒砂岩、石材として軟 質、幅(4.3cm)・長さ(7.7cm)・厚さ(1.2cm)・重量(53 g)、未実測
315	—	図版40	47	76	2006-II区 E12-l7	第3層系包含層一括 遺構埋土含む	—	礫石器	砥石	—	不明	中世か?二面使用、石材:中粒砂岩、石材として軟 質、幅(3.0～8.0cm)・長さ(9.8cm)・厚さ(2.5cm)・ 重量(228g)、未実測
316	—	図版40	164	21	2007-III区 c11-j25	—	1溝 中層・下層 図の3以下	石製品	石棒?	—	不明	先端部がやや平坦な面を成す、長さ(21.7cm)・幅 (7.0～8.5cm)・厚さ(5.3cm)・重量(1570g)・ 石材:砂質片岩、未実測
317	—	図版40	173	39	2007-III区 c11-k25	—	1溝北側 最下層	礫石器	敲石	—	100% 完形	片側の先端部に敲打痕あり、長さ16.5cm・幅7.2cm・ 厚さ3.8cm・重量56g・石材:砂岩、未実測
318	—	図版40	174	31	2007-III区 c12-j1	—	1溝 最下層 図8-9	礫石器	砥石	—	不明	砥石は二面、一面は凸面が残るが滑らか、一面はザ ラツクが平坦面を成す、被熱痕のため一部黒ずむ、 長さ(11.5cm)・幅7.0cm・厚さ4.8cm・重量(548 g)・石材:砂岩、未実測
319	—	図版40	256	14	2008-III区 C12-x4	—	1粘土探掘 埋土一括上位	礫石器	砥石	—	不明	裏面剥離のため欠損、上下両端面・側面片面に成形 痕あり、長さ9.2cm・幅3.2cm・厚さ(1.0cm)・重 量(60.4g)・石材:粘板岩、未実測

報告書抄録

ふりがな	ふじなみちくいせき
書名	藤並地区遺跡
副書名	県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	土井孝之
編集機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター
所在地	〒 640-8404 和歌山市湊 571-1
TEL	073-433-3843
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 19 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東經 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふじなみ ちくいせき 藤並地区遺跡	わかやまけんありだぐん 和歌山県有田郡 ありだがわちょう 有田川町 はぶ 土生・明王寺・水尻	303666	吉備地区 32	34° 3' 22"	135° 12' 2"	第1次調査 20061219～ 20070316	1,807	
						第2次調査 20070502～ 20070713	608	吉備金屋線 道路改良工事
						第3次調査 20080501～ 20080815	1,472	
						第4次調査 20081017～ 20081226	765	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤並地区遺跡	散布地	旧石器時代	自然流路（土砂流による粗砂細礫層堆積）、土坑	ナイフ形石器・スクレイパー・錐状石器・縦長剥片・横長剥片など	少量ながら、ナイフ形石器が主体となる石器群。
		飛鳥・奈良時代	掘立柱建物	土師器（椀・甕）、黒色土器（椀）、須恵器（壺・蓋・壺・甕・陶棺）、瓦（平瓦）など	遺物の殆んどが、中世の水田耕作土・踏み込みから出土。
		平安時代	掘立柱穴、溝、井戸	土師器（椀・小皿）、黒色土器（壺・椀）など	当該期の出土遺物の地区が2007-Ⅲ区に限定。
		鎌倉時代	粘土採掘土坑、谷状落ち込み、水田跡	土師器（皿・小皿・土釜）、瓦器（椀・小椀・小皿・甕）、陶器（備前・常滑）、磁器（青磁碗、白磁碗）など	遺物全体の中では、比率的に最も多い段階。二次的な水田耕作土からの出土。
		室町時代	井戸、石列状遺構、水田跡、噴砂	土師器（土釜）、瓦質（甕・火舎）、陶器（備前・志野）、鉄砲殻	二次的な水田耕作土からの出土。

要約

要約	<p>2007-III区、2008-II区・III区・VII区の下位層で検出した後期旧石器時代遺物を包含する粗砂細礫層の成因については、南側に位置する1990年調査M地区及び土生池遺跡（25）周辺の谷間からの土砂流による堆積とみられ、ナイフ形石器石器群という遺物の単純組成から一定の時期を反映したものと認めうることができる。後期旧石器時代の石器他の組成は、サヌカイト製ナイフ形石器・サヌカイト製横長剥片・チャート若しくは凝灰岩（硬質頁岩）製縦長剥片・サヌカイト製錐状石器、その他のサヌカイト・凝灰岩（硬質頁岩）・チャート製剥片がある。</p> <p>飛鳥時代末～奈良時代については、一定の遺物量と共に広域に散布する遺物の大半が二次的な中世遺物包含層（水田耕作土）からの出土であるため、全ての地区において窯場からの集積を反映したものでないことが確実視されることとなった。出土遺物の中には飛鳥IIの段階の須恵器が一定量認められることから、周辺域に展開する須恵器窯の操業を今少し遡って考える必要を認めうる。一方、2008-II区において、単独で検出した奈良時代の掘立柱建物は、関連時期の遺構が全くないことからその位置付けを明確にすることはできない。</p> <p>平安時代後期は、掘立柱や溝を検出した2007-III区のみに当該期の遺構・遺物が集中して認められることから、東側に水路を挟んで展開する未周知の遺跡に関与することが濃厚であると考えられる。</p> <p>平安時代末～鎌倉時代前期の様相については、2007-III区の良好な遺物群から当該地区周辺を平安時代後期から続く集落の拠点として、2007-III区以西の調査地は中世における水田開発による二次的資料の包含（包含層第3層・第4層）として位置付け理解しうる。</p>
----	---

写 真 図 版





1 2006-I区 調査遺構全景(北東上空から)



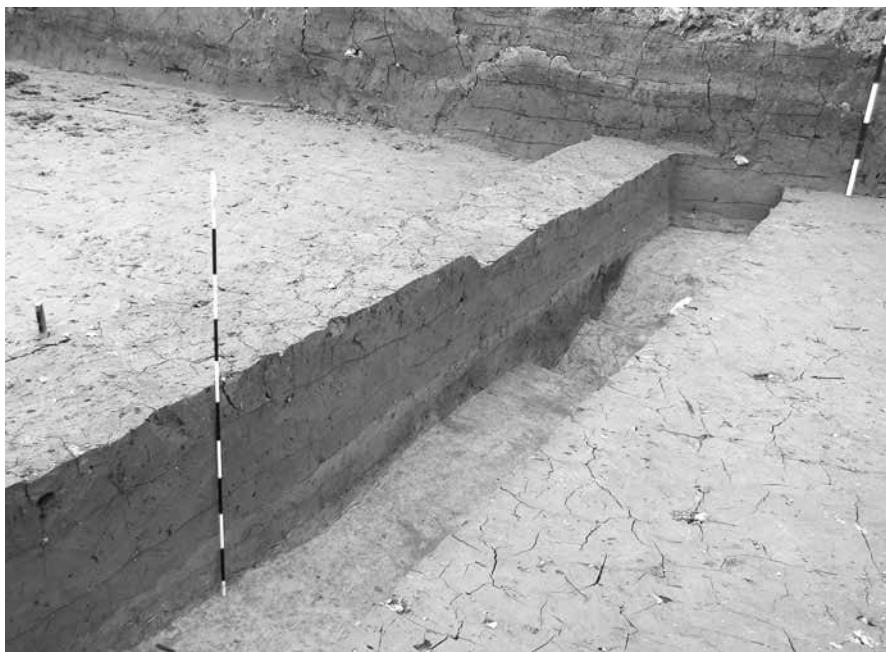
2 2006-I区 調査遺構全景(南西から)



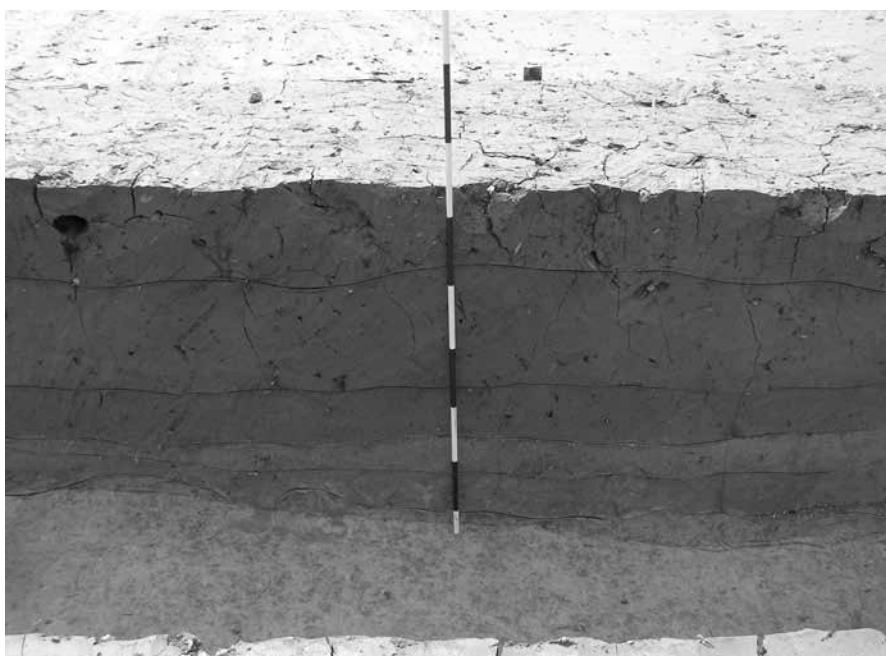
3 2006-I区 粘土採土掘坑群と51谷状落ち肩部(東北東から)



1 2006-I区 51谷状落ち断面土層全景(東南東から)



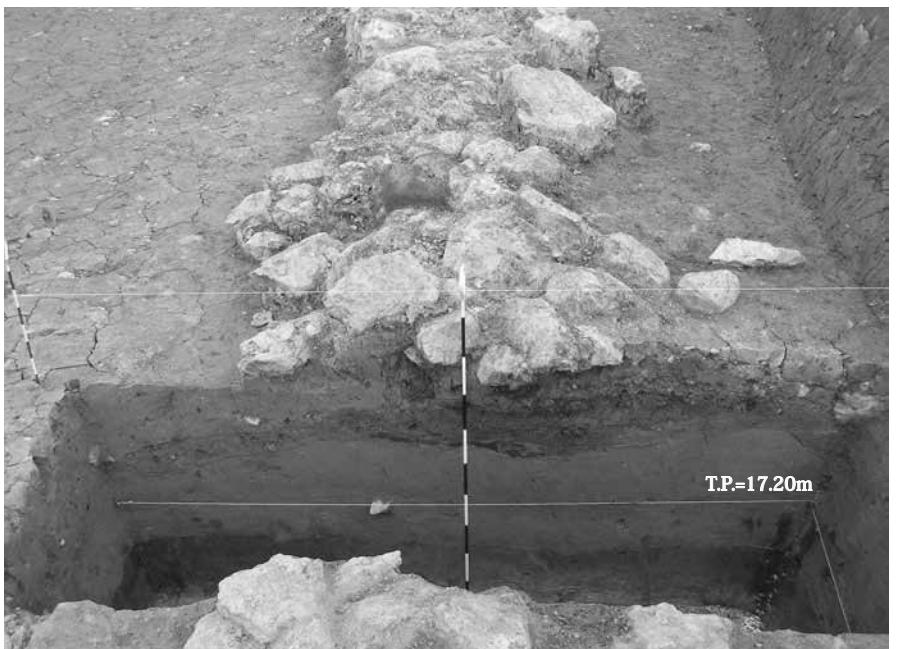
2 2006-I区 51谷状落ち北半部断面土層細部(東南東から)



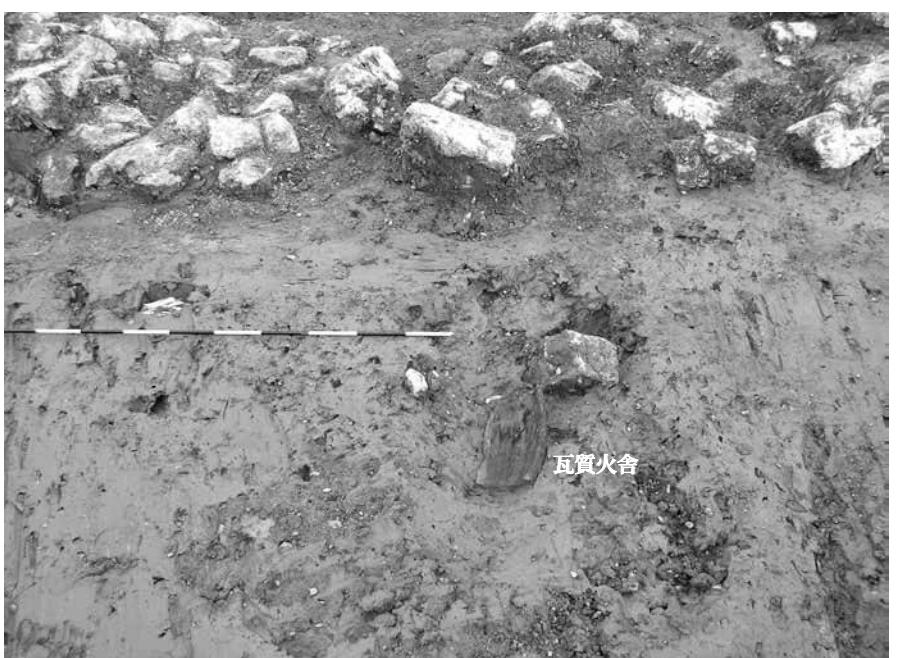
3 2006-I区E11-h・i22 51谷状落ち断面土層細部(北東から)



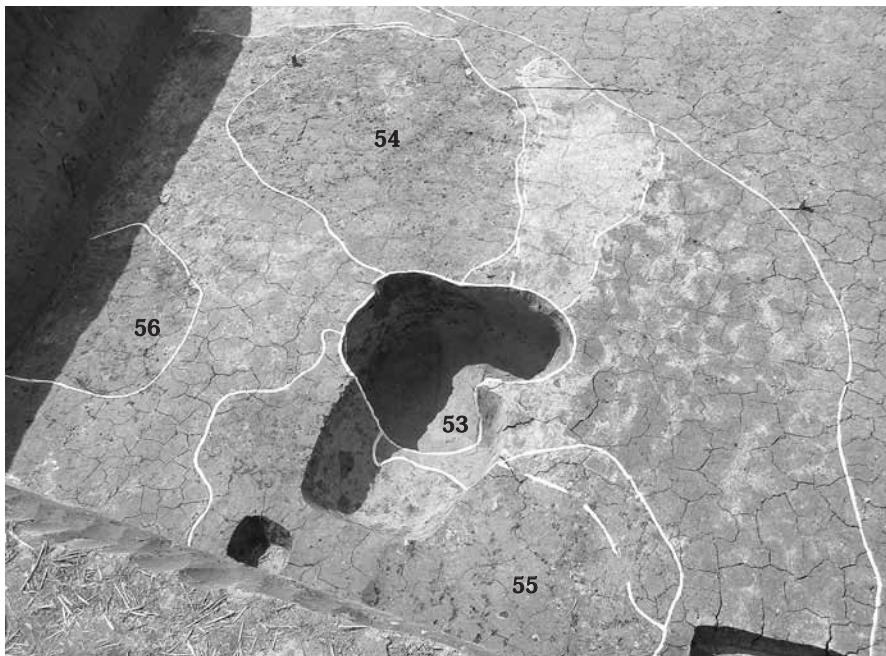
1 2006-I 区 52石列状遺構(南南東から)



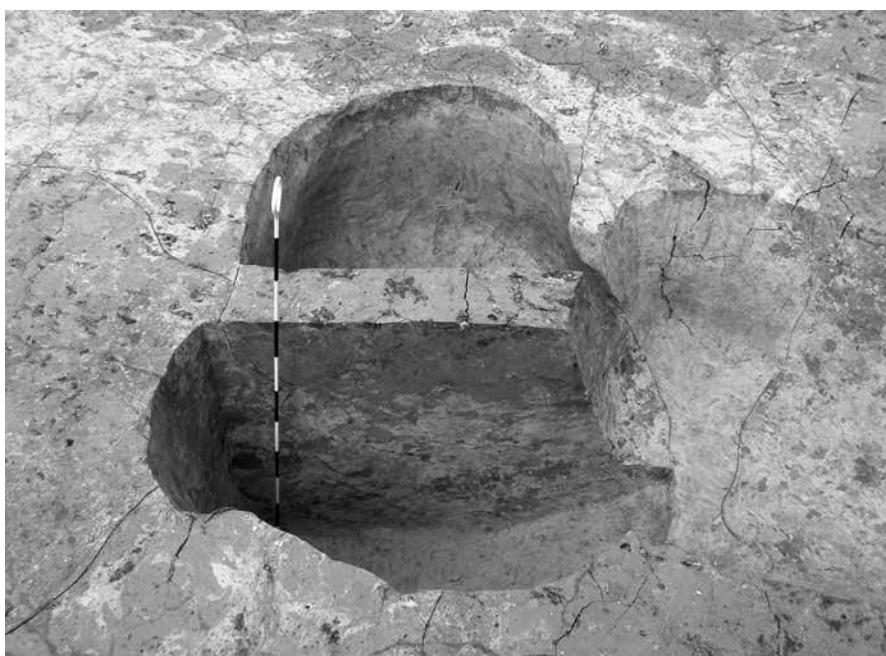
2 2006-I 区E11-g19 52石列状遺構の断面状況(南南東から)



3 2006-I 区E11-g19 52石列状遺構に関係する遺物出土状況(西南西から)



1 2006-I 区E11-f23 粘土採掘土坑群の状況(東北東から)



2 2006-I 区E11-f23 53粘土採掘土坑東西断面土層(南南東から)



3 2006-I 区E11-h25 調査区南東壁第6層系踏み込み遺構の
遺物出土状況(北西から)



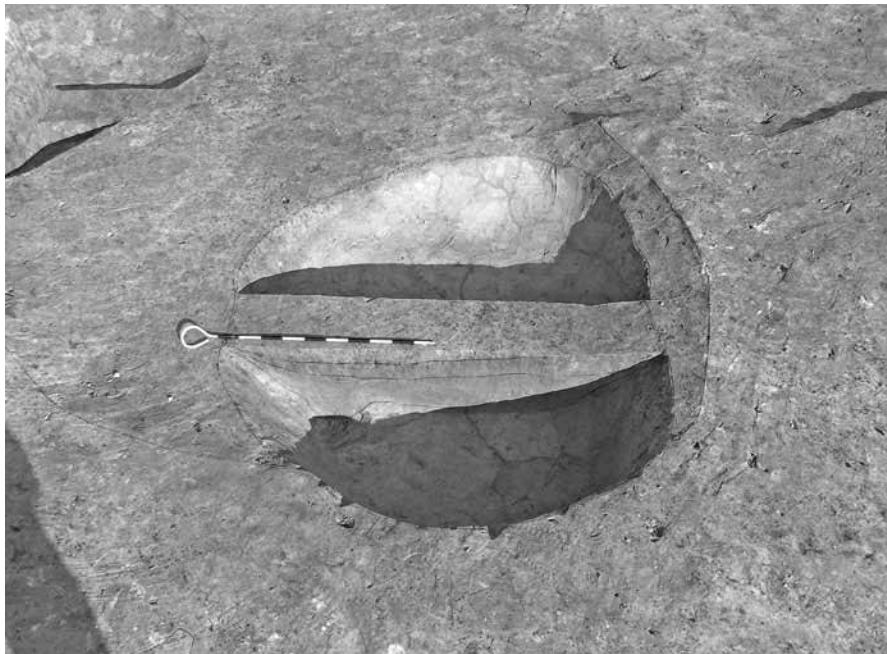
1 2006-II区 調査遺構全景(真上から:右側が北)



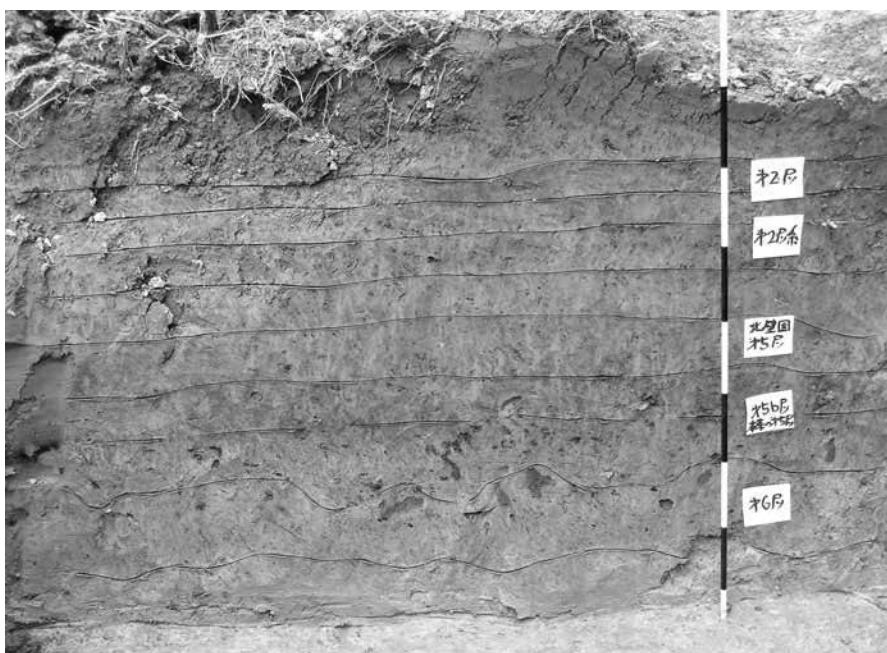
2 2006-II区 調査遺構全景(北東から)



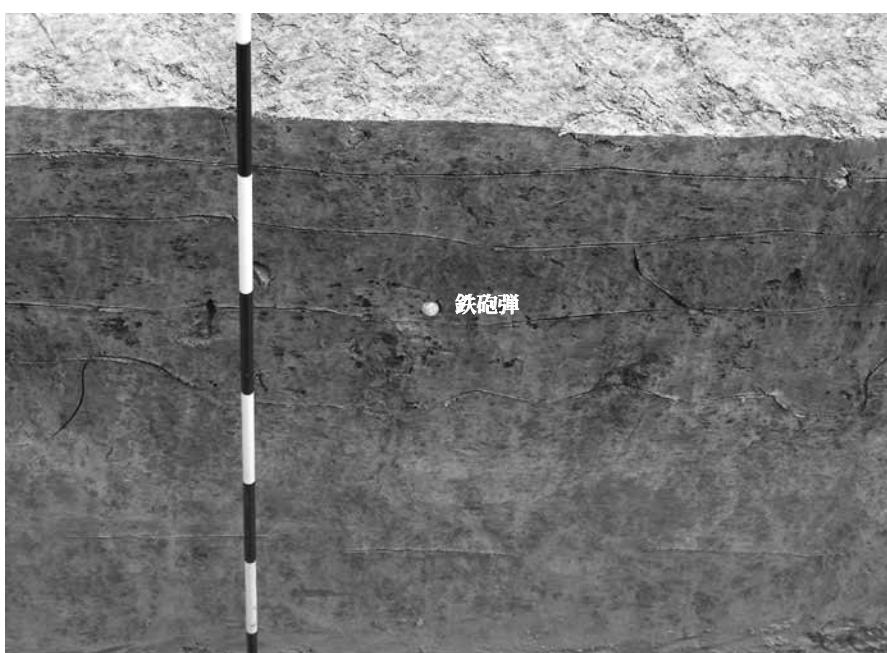
3 2006-II区 土坑群の堀削状況(西南西から)



1 2006-II区E12-o5・6 6土坑東西断面土層(南から)



2 2006-II区E12-i1 調査区北壁断面土層細部(南から)



3 2006-II区E12-q5 鉄砲弾出土状況細部(南南西から)



1 2006-III区北半 調査遺構全景(真上から:右側が北)



2 2006-III区北半 調査遺構全景(南から)



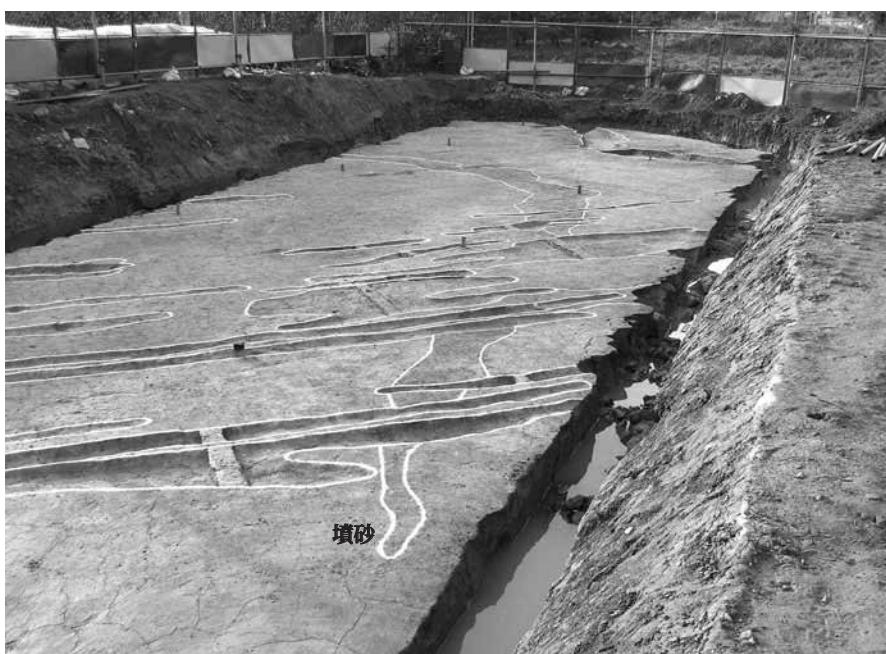
3 2006-III区北半 土坑群掘削状況(南東から)



1 2006-III区南半 調査遺構全景(真上から:左側が北)



2 2006-III区南半 調査遺構検出状況:小溝群(北北東から)



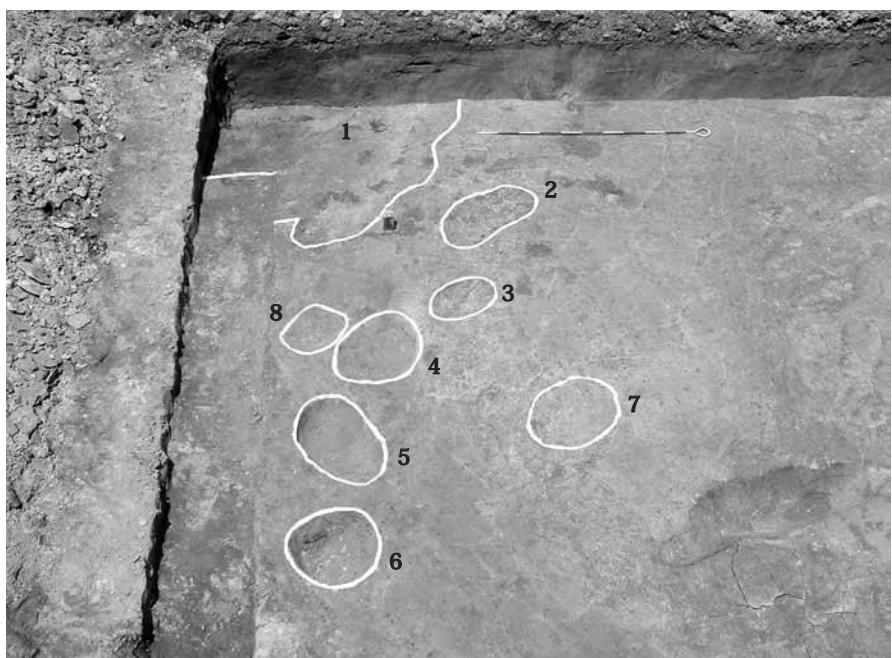
3 2006-III区南半 地震による液状化の砂脈(北北西から)



1 2007-I 区北半 調査遺構全景(真上から:右側が北)



2 2007-I 区北半 調査遺構全景(南から)



3 2007-I 区北半E13-x・y・6・7 土坑群(東から)



1 2007-I区北半E13-y7 1土坑調査区西壁断面土層(東から)



2 2007-I区北半E13-x・y1 調査区北壁断面土層(南から)



3 2007-I区南半 調査遺構全景(北上空から)



1 2007-I 区南半 調査遺構全景(南から)



2 2007-I 区南半E13-x9・10 13土坑東西断面土層(北から)



3 2007-I 区南半E13-y7 23土坑断面土層:調査区西壁(東から)



1 2007-II区 調査遺構全景(北上空から)



2 2007-II区 調査遺構全景(南から)



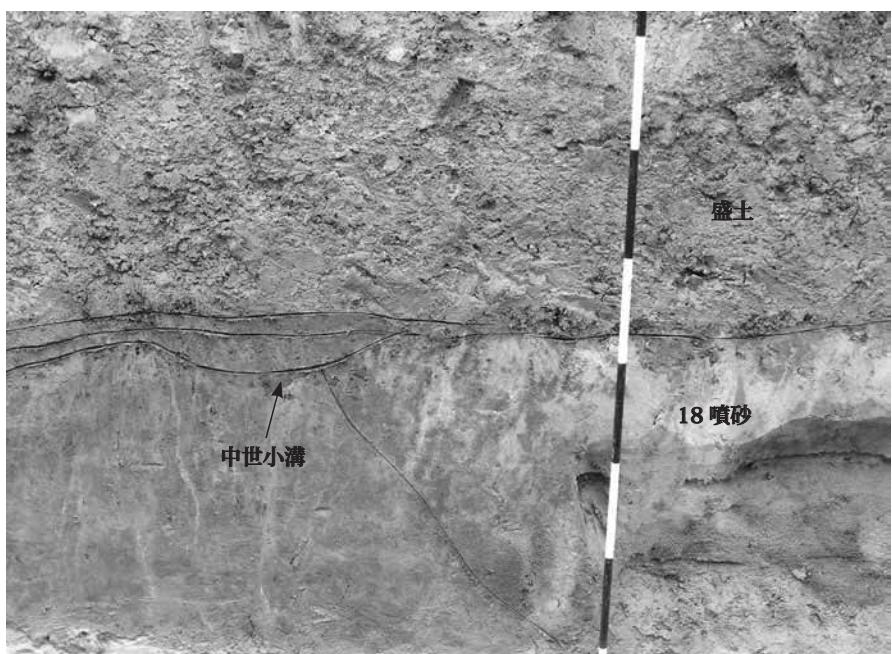
3 2007-II区 土坑群東西断面土層(北北東から)



1 2007-II区E13-o6 5 土坑東西断面土層(北北東から)



2 2007-II区E13-o·p6·7 19・18噴砂の砂脈検出状況(北東から)



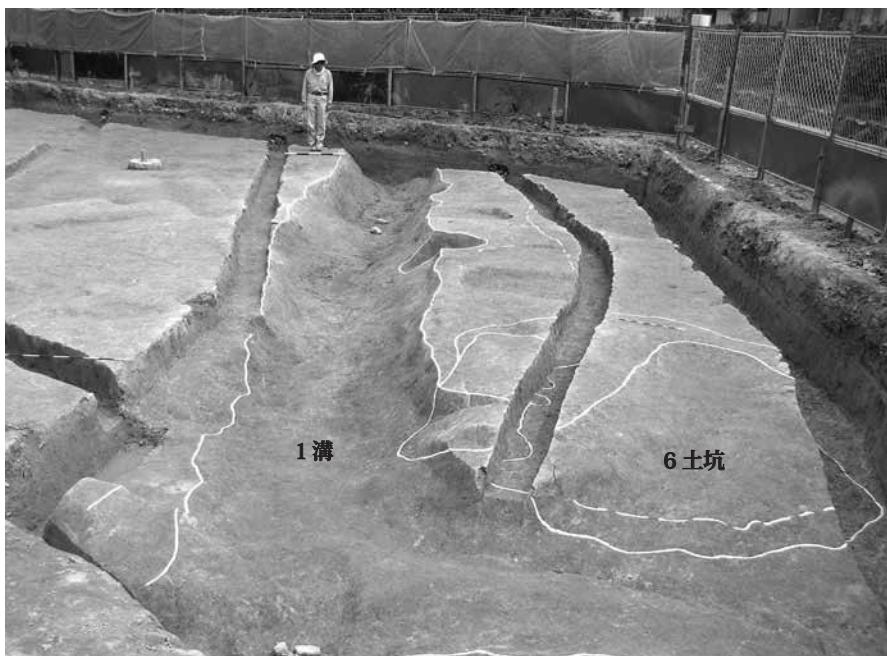
3 2007-II区E13-p7 18噴砂と中世小溝の関係細部:調査区西壁断面土層(東から)



1 2007-III区 調査遺構全景(真上から:下側が北)



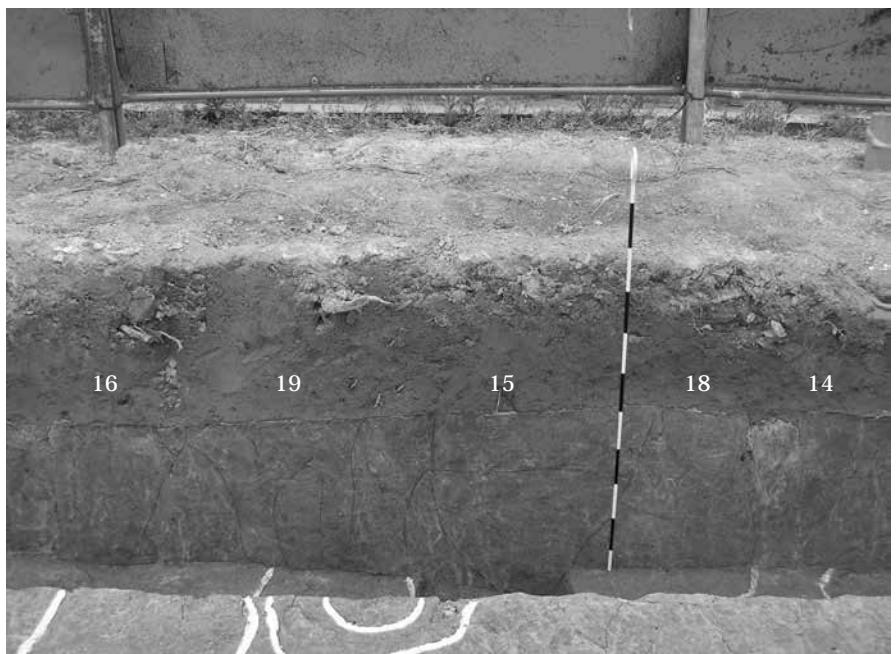
2 2007-III区 調査遺構全景(東から)



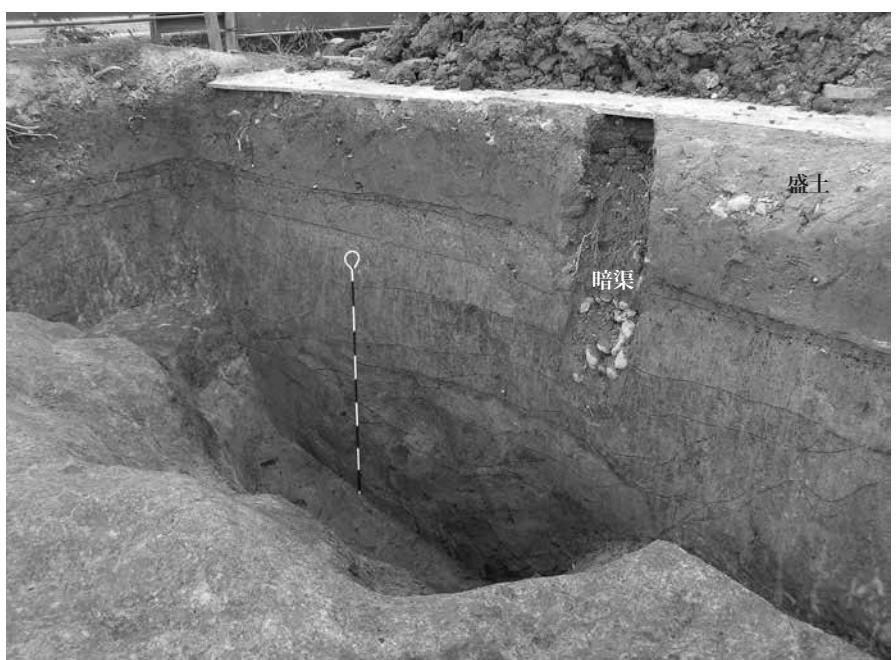
3 2007-III区 1溝完掘状況と6土坑検出状況(北西から)



1 2007-III区C12-j1・2 1 溝断面土層(北西から)



2 2007-III区C12-g1 柱穴群断面土層:調査区北東壁(西南西から)



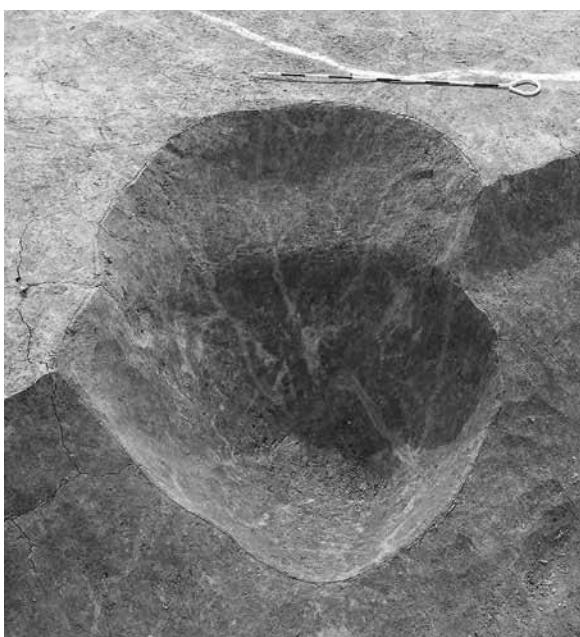
3 2007-III区C11-k25 5 井戸掘削状況と調査区北壁断面土層(南東から)



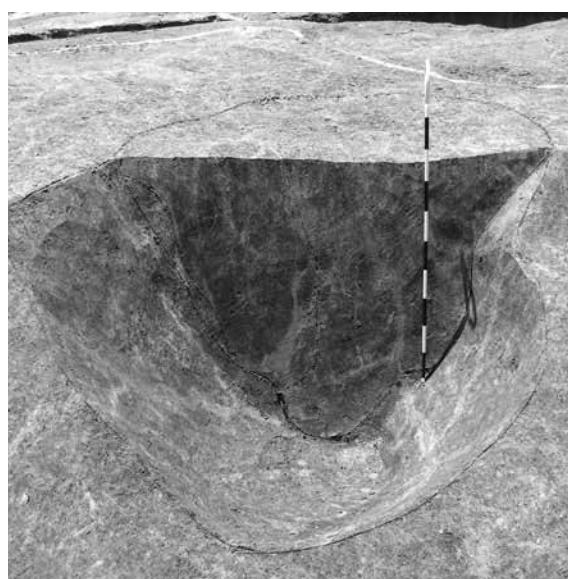
1 2007-III区C11-k25・C12-k1 6 土坑掘削状況(北北東から)



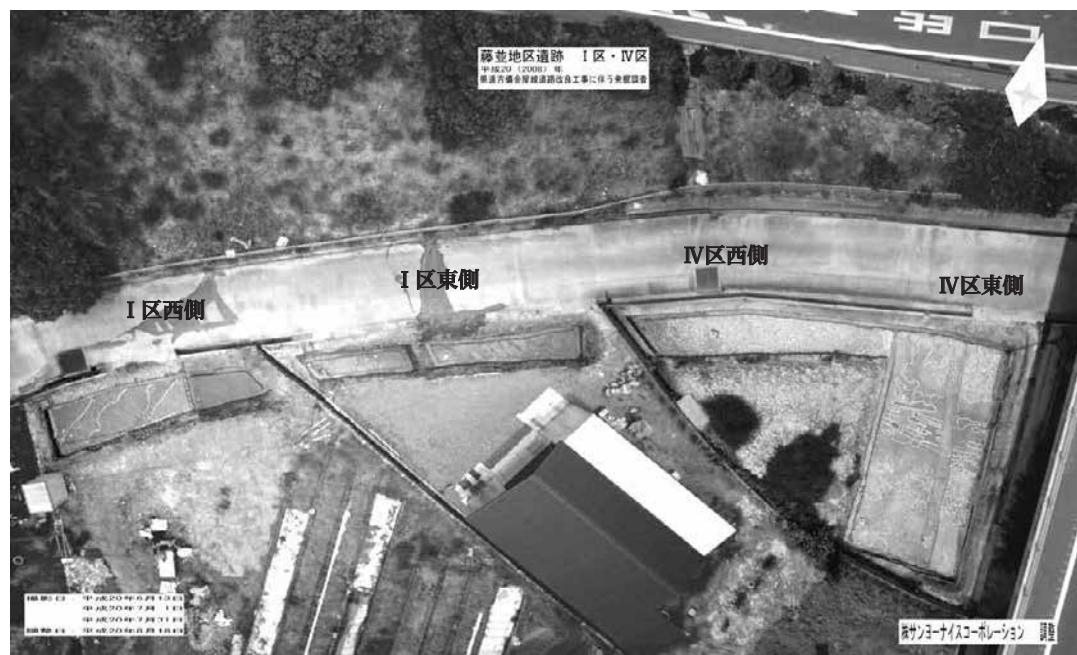
2 2007-III区C11-k25・C12-k1 6 土坑断面土層(北北東から)



3 2007-III区C12-j1 3 土坑(東から)



4 2007-III区C12-j1 3 土坑南北断面土層(東から)



1 2008-I区・IV区 調査遺構全景デジタルモザイク(真上から:上側が北)



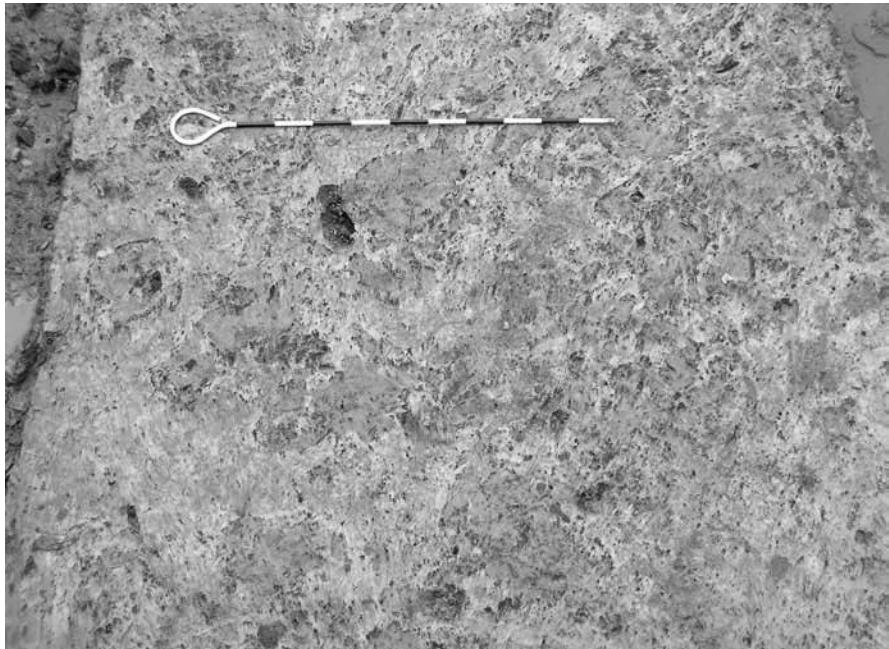
2 2008-I区西側西 水田区画検出状況(南南西から)



3 2008-I区西側東 水田踏み込み検出状況(東から)



1 2008-I 区東側東 水田踏み込み検出状況(東北東から)



2 2008-I 区東側東F12-e7 水田踏み込み検出状況細部(東北東から)



3 2008-I 区西側東 調査区北東壁断面土層細部(南西から)



1 2008-IV区 調査遺構全景(真上から:上側が北)



2 2008-IV区 水田面掘下げ状況(西北西から)



3 2008-IV区東側 調査遺構全景(北から)



1 2008-VI区南西半・南西端 調査遺構全景(北上空から)



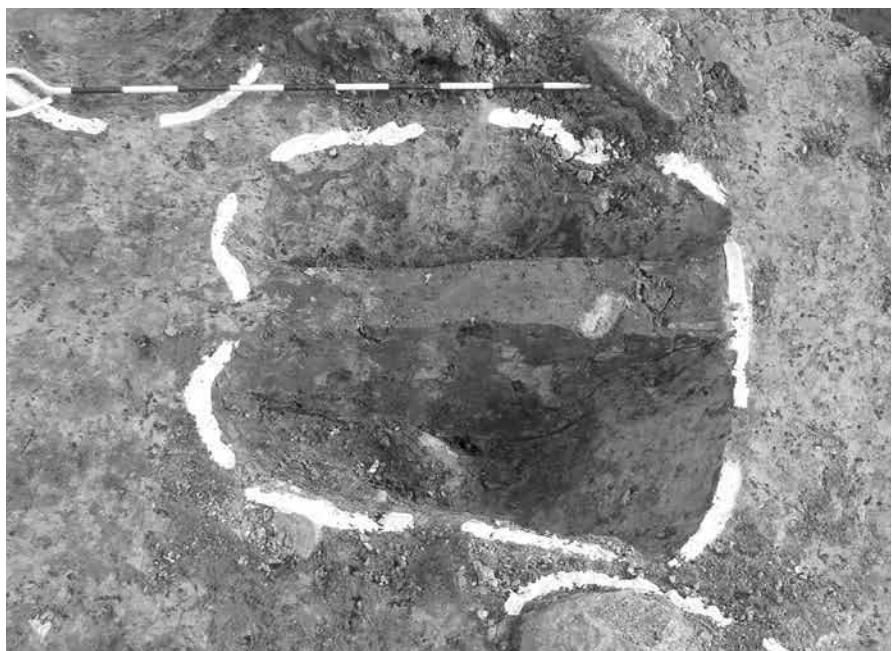
2 2008-VI区南西半 1溝全景(西南西から)



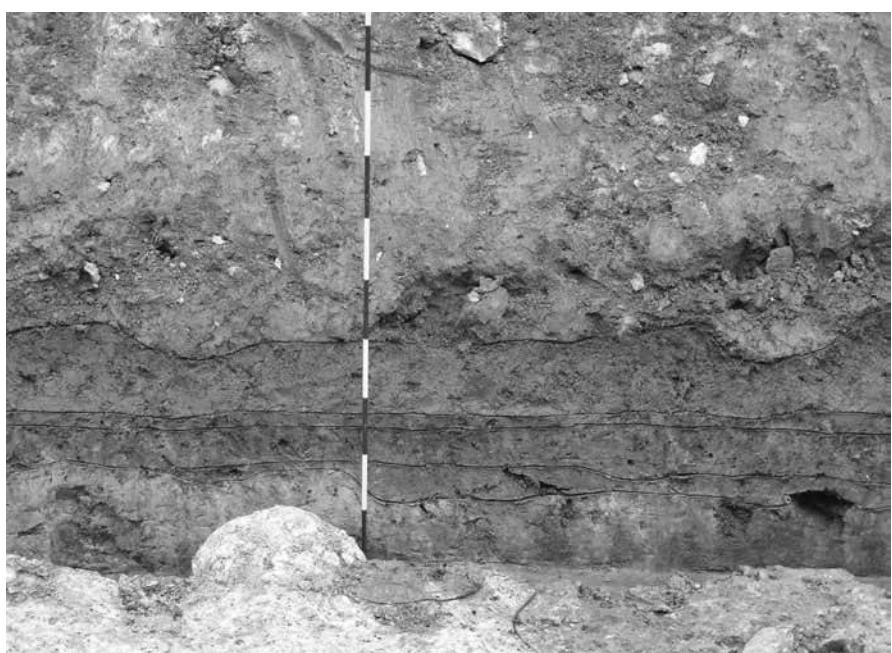
3 2008-VI区南西端 調査遺構全景(南南西から)



1 2008-VI区北東半 遺構検出状況全景(南西から)



2 2008-VI区北東半F12-o13 11土坑掘削状況・南北断面土層(北寄り西から)



3 2008-VI区北東半F12-n13-o14 調査区南東壁断面土層(北西から)



1 2008-II区東側 調査遺構全景(北から)



2 2008-II区東側E12-m19周辺 第3層下面遺構(西から)



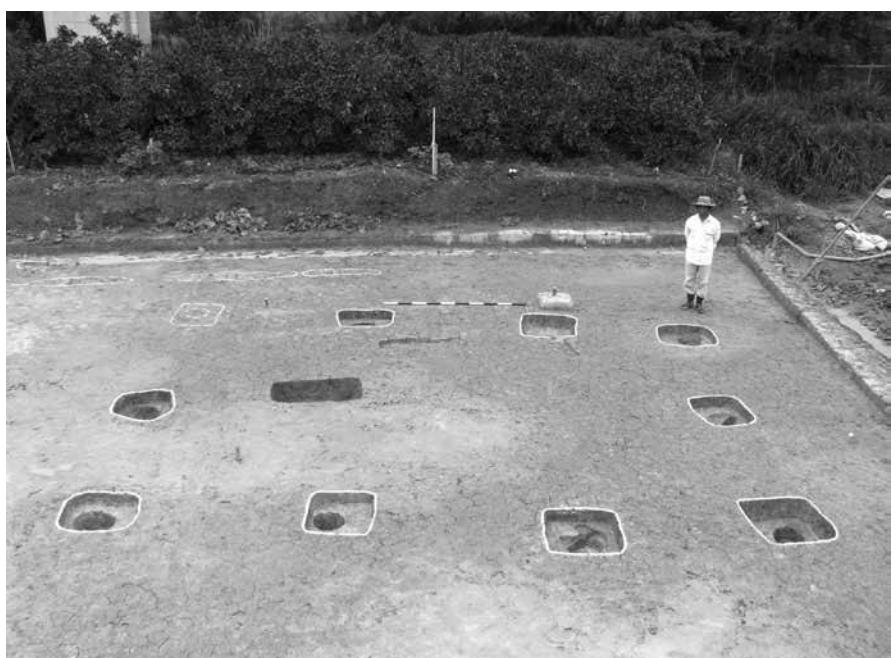
3 2008-II区東側E12-m19 包含層第3層内遺物出土状況(北から)



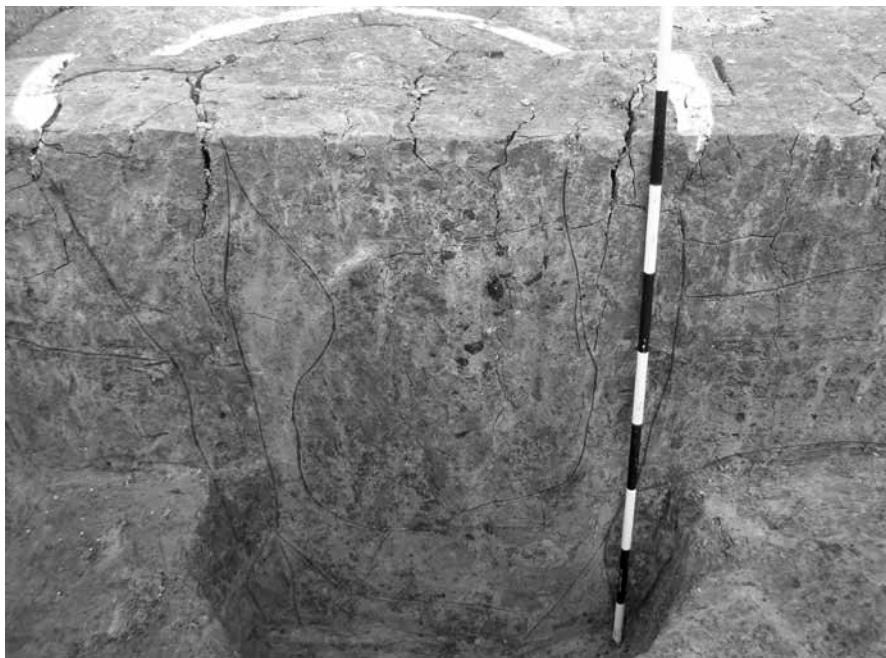
1 2008-II区西側 調査遺構全景(東上空から:右側が北)



2 2008-II区西側 調査遺構全景(北から)



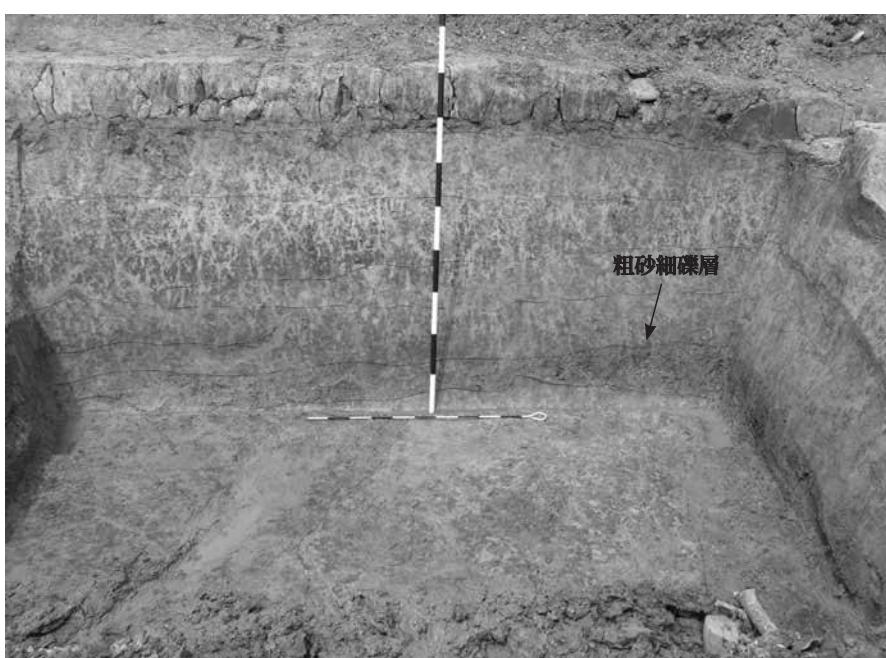
3 2008-II区西側E12-o・p17~19 掘立柱建物 1(東から)



1 2008-II区西側E12-o17 挖立柱建物1 33柱穴南北断面土層(西から)



2 2008-II区西側E12-o-p22 21土坑(南南西から)



3 2008-II区西側E12-q22-23 補足調査 調査区西壁断面土層(東から)



1 2008-III区 調査遺構全景(真上から:手前右下が北)



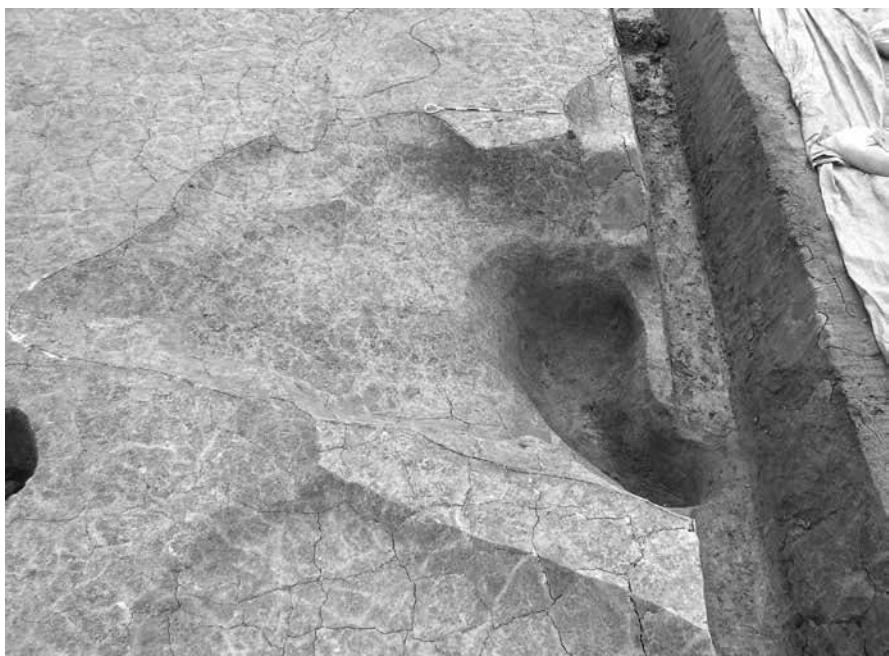
2 2008-III区 調査遺構全景(西南西から)



3 2008-III区 調査遺構全景(東北東から)



1 2008-III区東半 土坑群・落ち遺構全景(西南西から)



2 2008-III区C12-t1 10土坑(東北東から)



3 2008-III区C12-s・t2 補足調査 21土坑調査区南壁断面土層(北北西から)



1 2008-VII区上位面 調査遺構全景(東北東から)



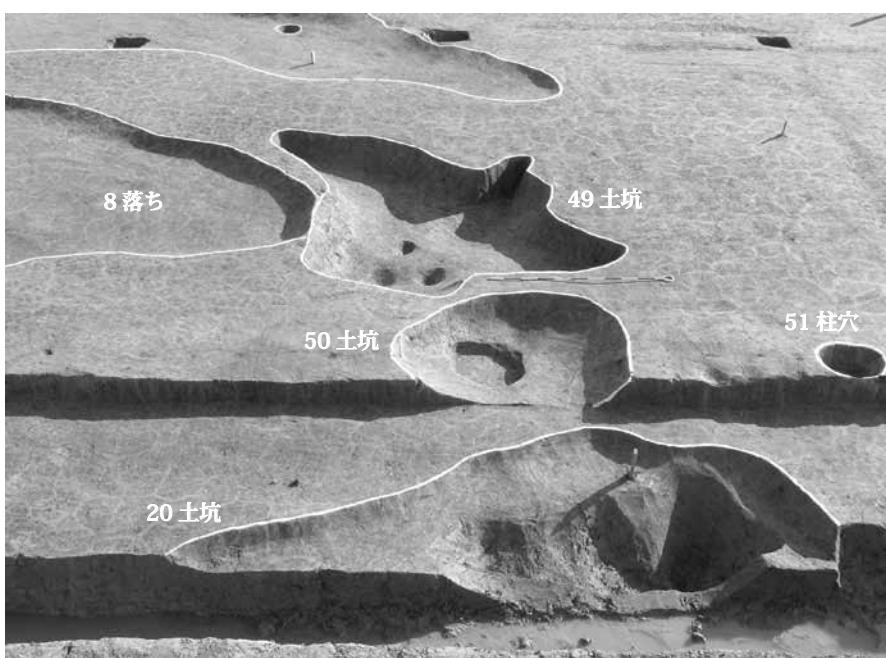
2 2008-VII区上位面東半部 土坑群・落ち遺構全景(西から)



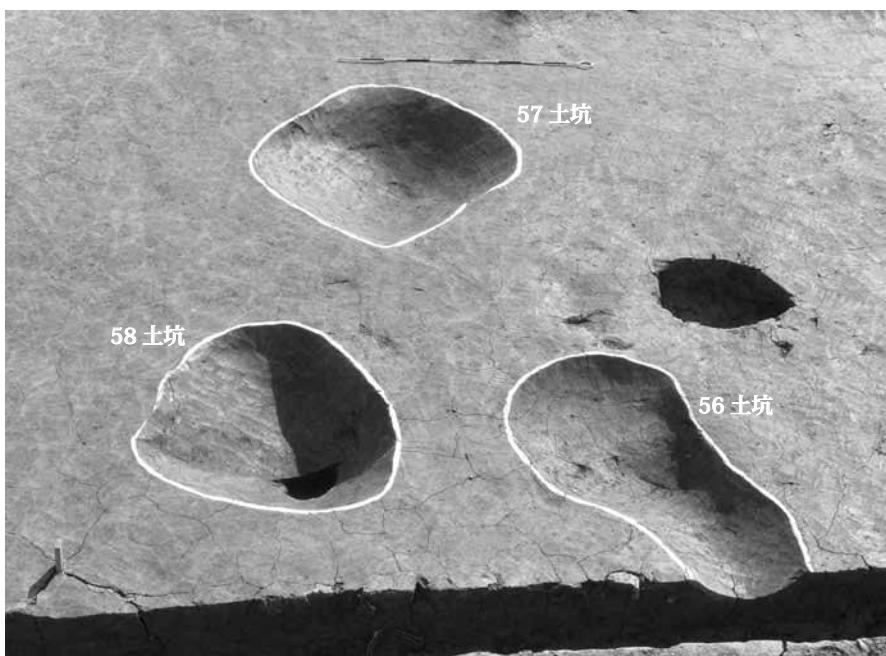
3 2008-VII区上位面東半部 調査遺構全景(西南西から)



1 2008-VII区上位面 8落ち・8落ち埋土掘削後の遺構(東北東から)



2 2008-VII区上位面C12-s2・3周辺 20・49・50土坑・51柱穴(北北西から)



3 2008-VII区上位面C12-o・p1 56・57・58土坑(北北西から)



1 2008-VII区下位面 調査遺構全景(真上から:手前が北北西)



2 2008-VII区下位面 粗砂細礫層下面遺構全景(東北東から)



3 2008-VII区下位面C12-r3・4 101土坑(南寄り西から)



1 2008-VII区下位面 調査区北壁断面土層(南南西から)



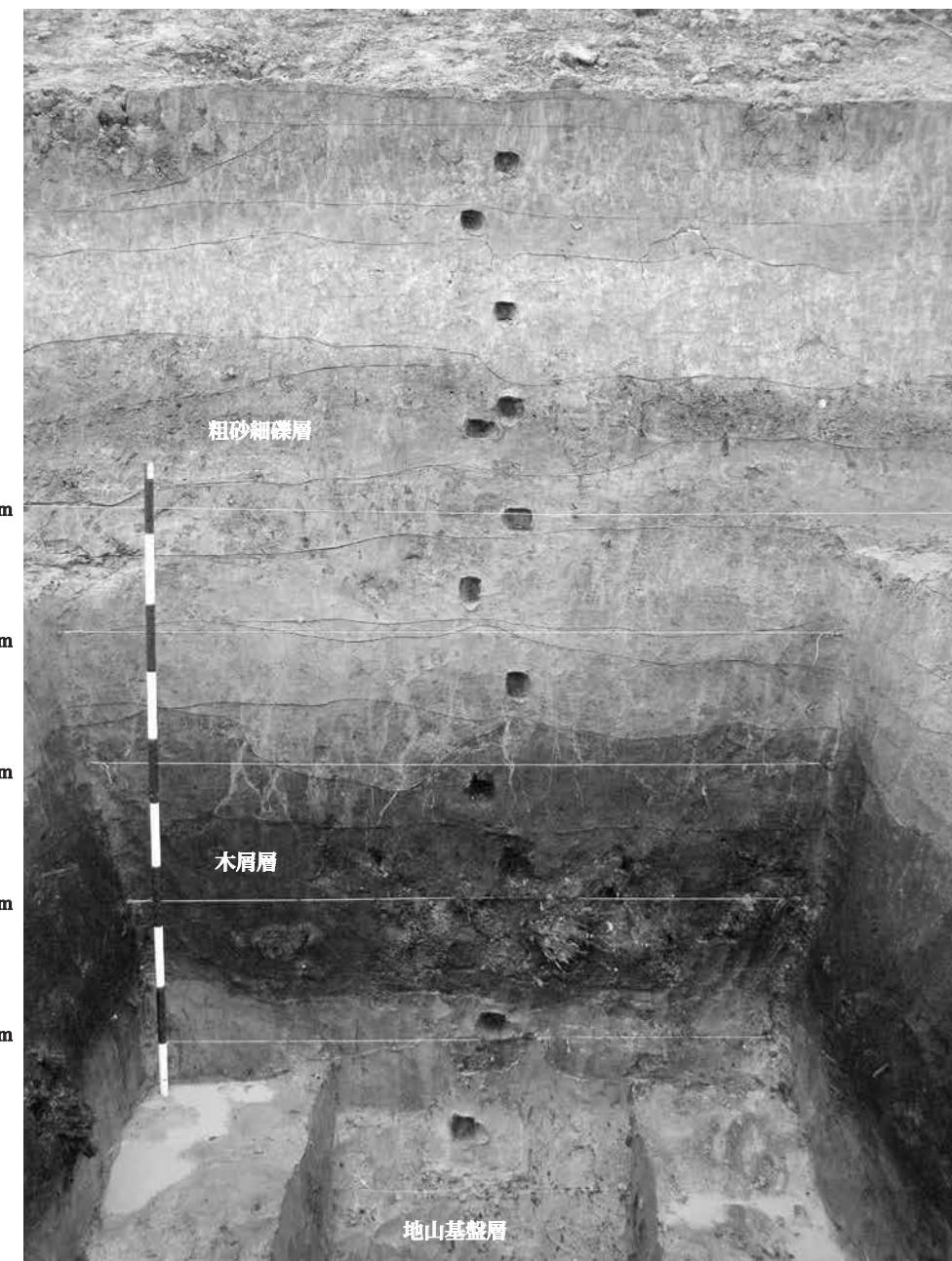
2 2008-VII区下位面 調査区南壁断面土層 調査区東端から10~20m(西北西から)



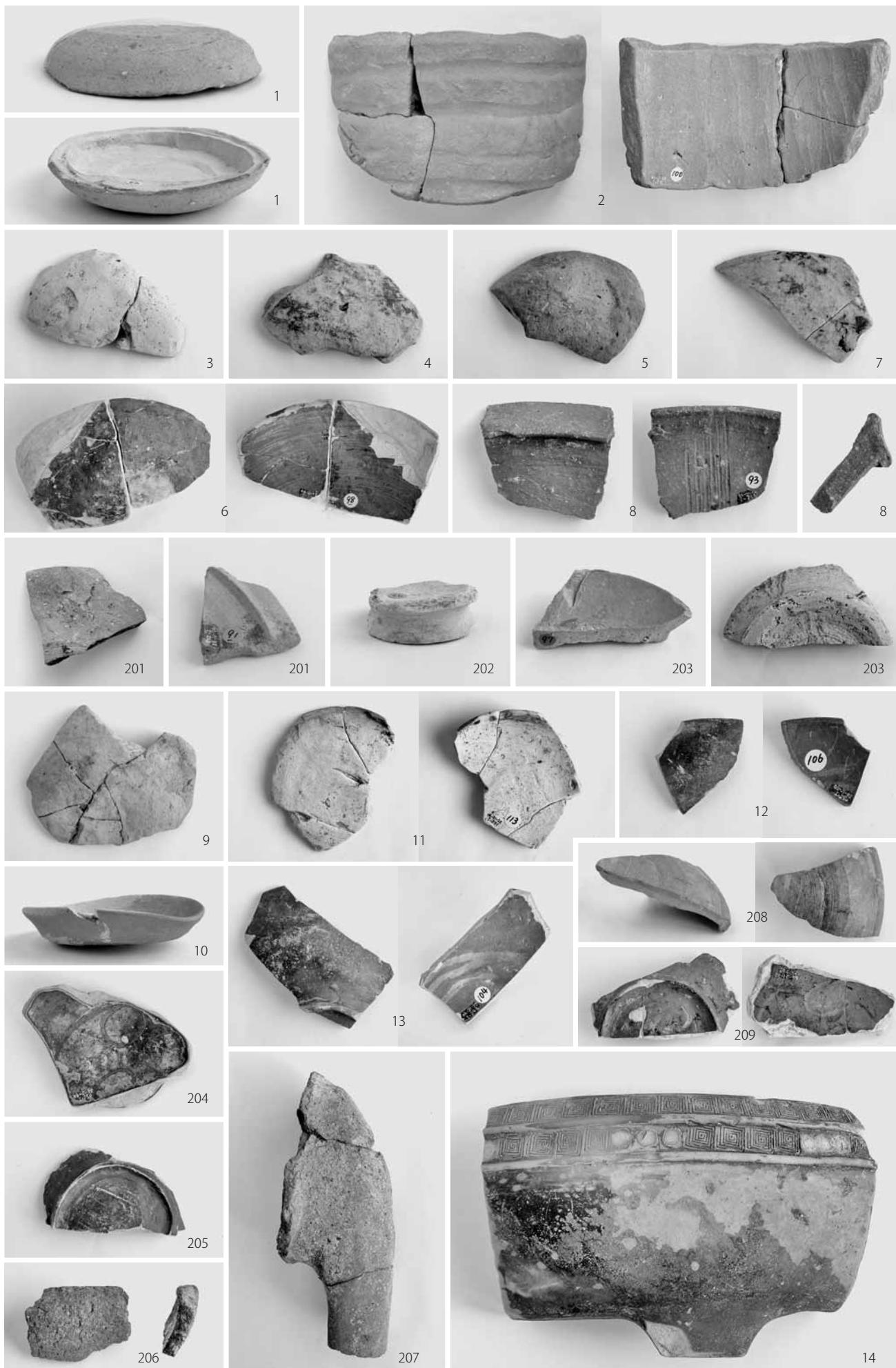
3 2008-VII区下位面 調査区南壁断面土層 調査区東端から20~35m(西北西から)



1 2008-VII区下位面C12-p3 補足調査A 調査区南壁断面土層(北北西から)

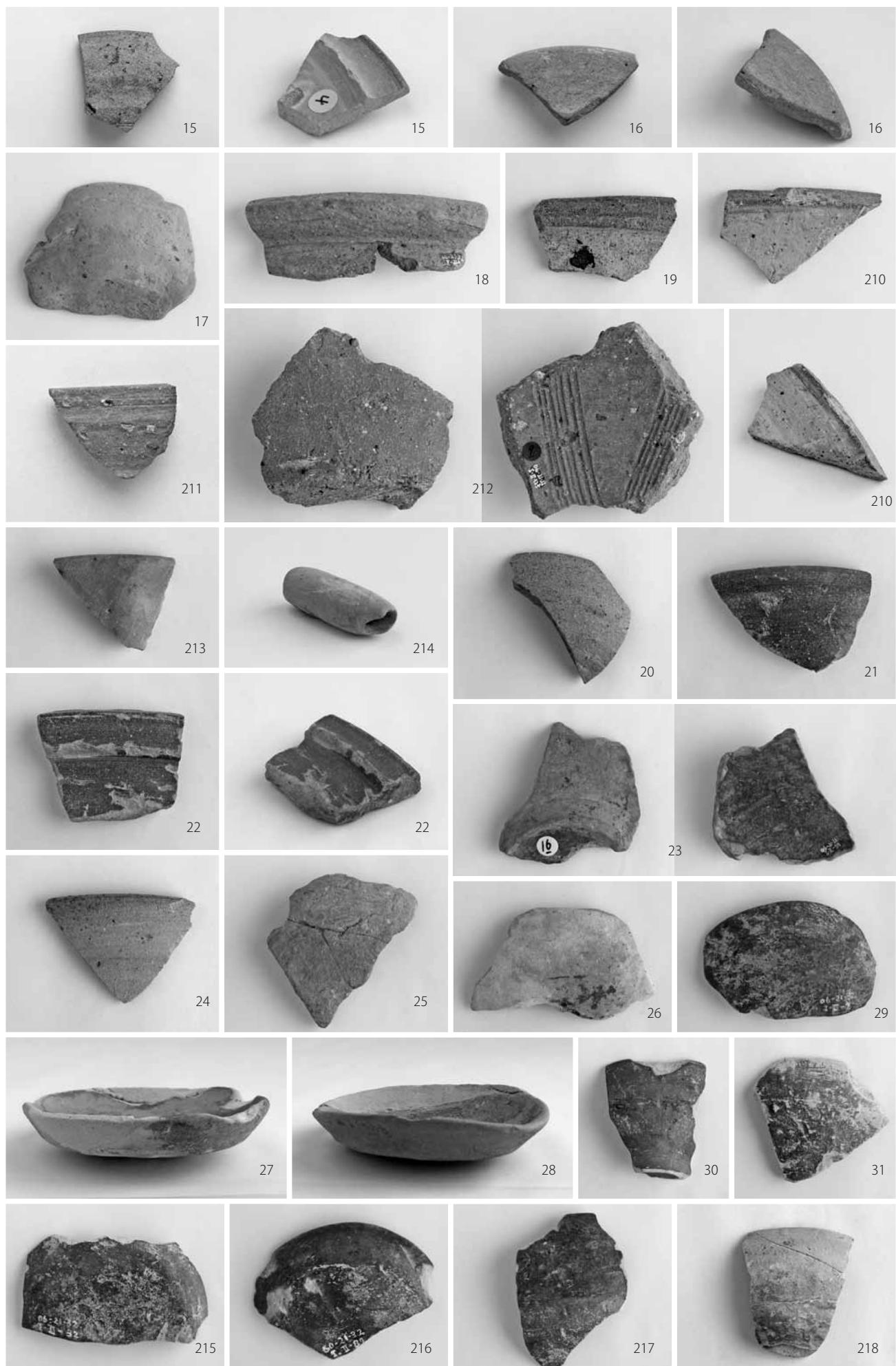


2 2008-VII区下位面C12-s+t4 補足調査B 調査区南壁断面土層(北北西から)



1・2・6:2006-I 区 基盤層直上踏み込み構造、3～5・203:2006-I 区 51谷状落ちより上位層、7:2006-I 区
54土坑最上層、8:2006-I 区 第5層系一括、9・10・12・13・204・205:2006-I 区 51谷状落ち第7a層、11:2006-I 区
51谷状落ち第7 c 層、14:2006-I 区 51谷状落ち第7 b 層、201・202:2006-I 区 第5層系一括、206・207:2006-I 区
52石列状構造第5層疊多量、208・209:2006-I 区 51谷状落ち第7 a層～c 層一括

図46に対応



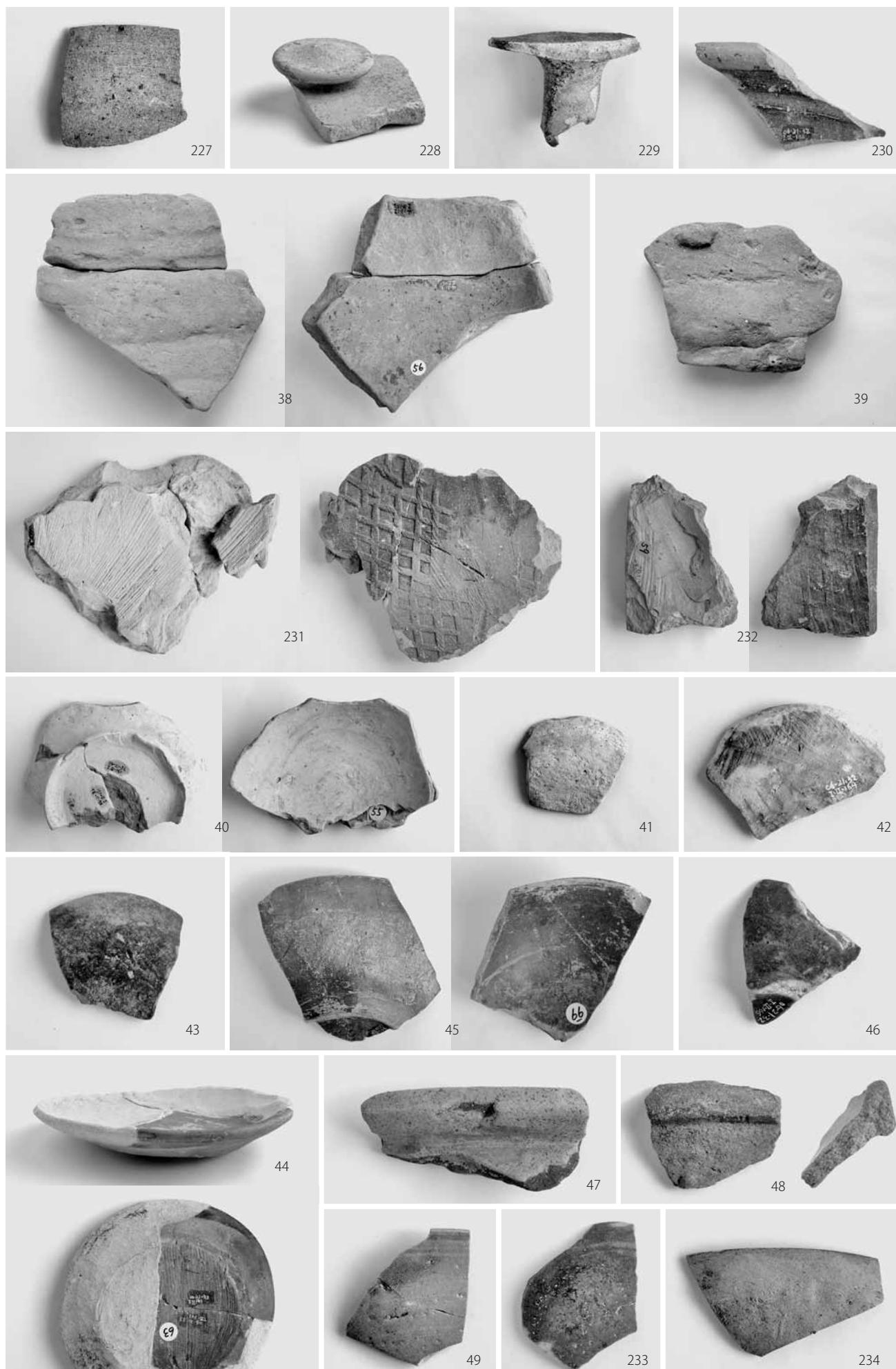
15~17・19・210~214:2006-II区 第2層系・第3層系包含層一括、
18:2006-II区 第2層系～第5層系一括、
20~31・215~218:2006-II区 第3層系包含層一括

図46・47に対応



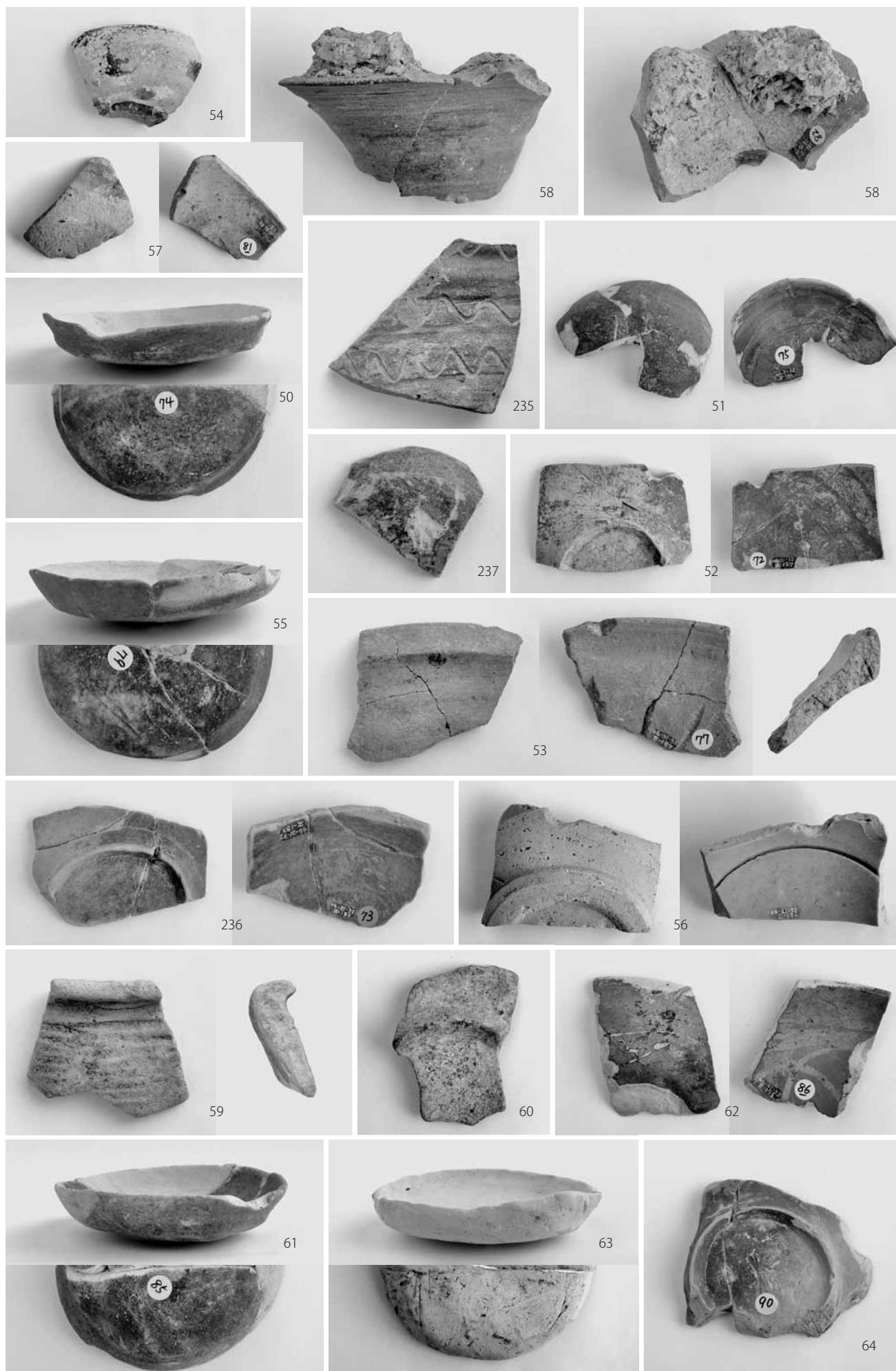
32~37・219~224:2006-II区 第3層系包含層一括、
225:2006-II区 第3層系包含層下部、226:2006-II区 第3層系包含層上部

図47に対応



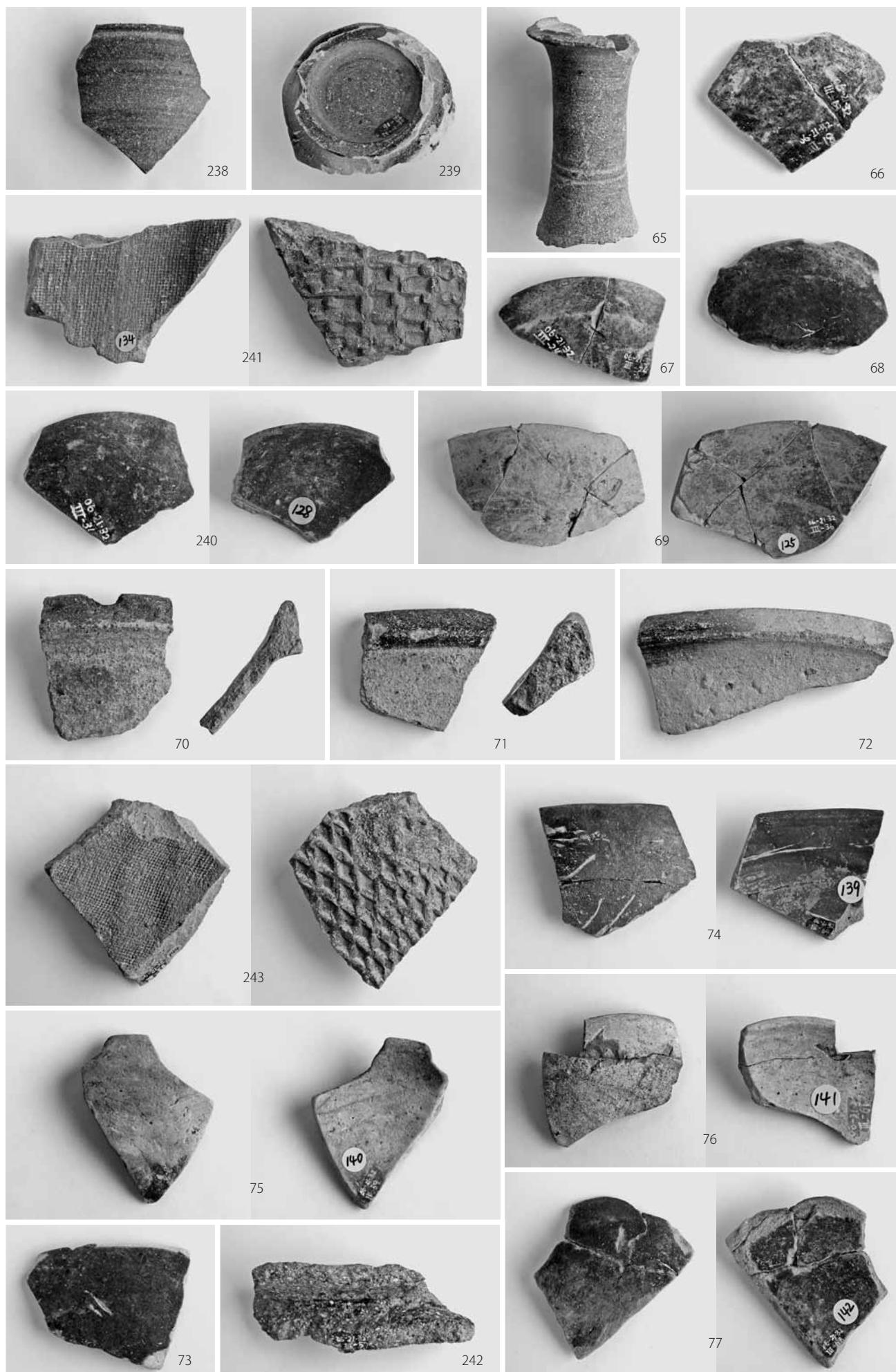
38~49・227~231・234:2006-II区 1落ち第5層系一括・一部第3層系包含層含む、
232:2006-II区 第5層除去面 踏み込み一括

図47に対応



50~53・236・237:2006-II区 1落ち第5層系・第6層含む、54~56:2006-II区 1落ち第5層系・下部遺構含む、
57~59:2006-II区 1落ち第5層系下部、60~62:2006-II区 1落ち第6層系、63・64:2006-II区 12土坑、
235:2006-II区 1落ち第5層系・第3層系包含層下部含む

図48に対応



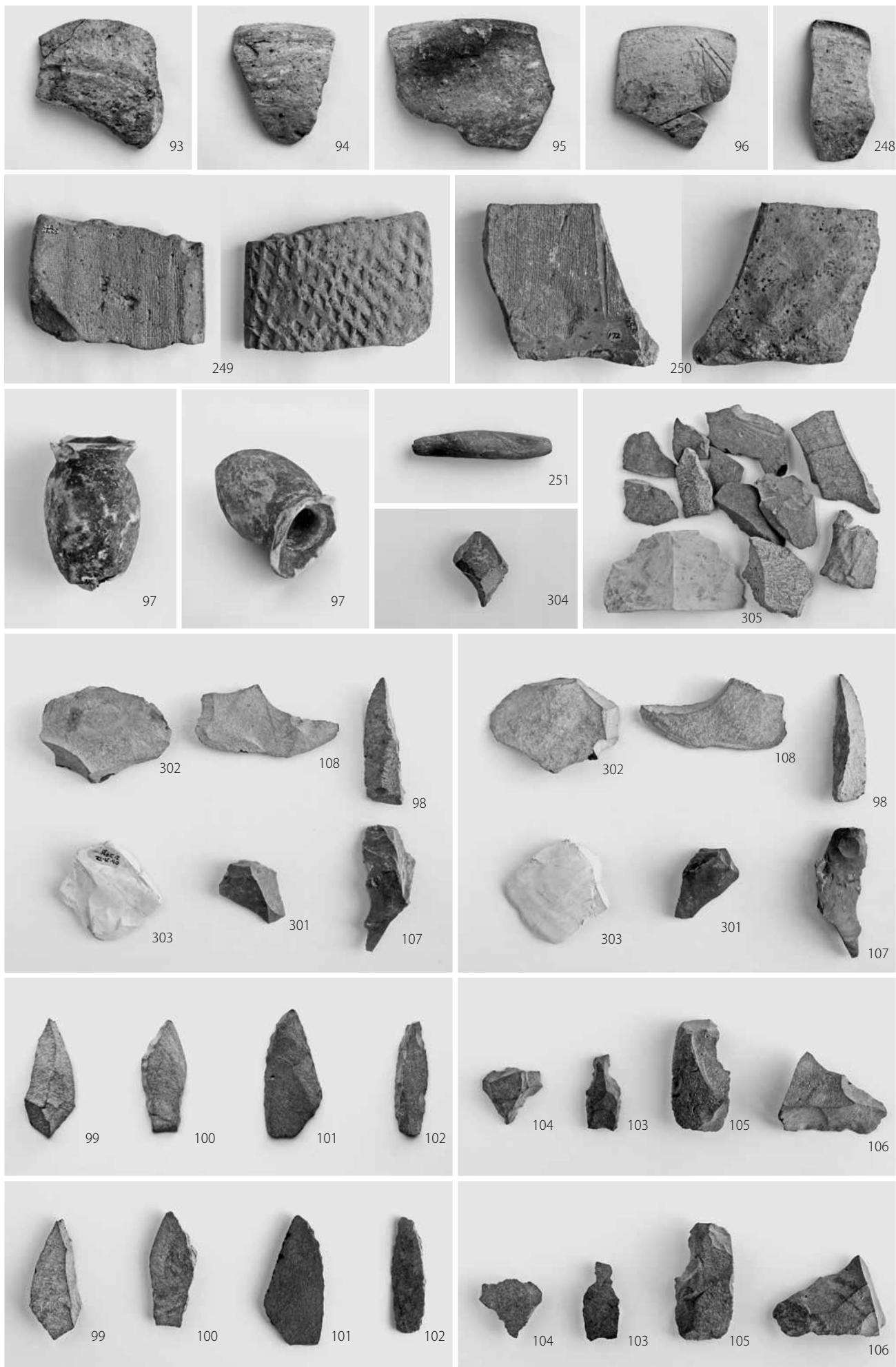
65~72・238~241:2006-III区北半 第3層系包含層、73~77・242・243:2006-III区南半 各小溝

図48に対応



83・86:2007-III区 1溝一括、84・85・244:2007-III区 1溝上・中層、87:2007-III区 1溝最上層、
88～92・245～247:2007-III区 1溝中・下層

図49に対応



93~96・248~250:2007-III区 1溝最下層、97:2008-II区 包含層第3・4層、251:2008-I区 第3層系包含層、
98・107・108:2006-II区 1落ち、99~106:2008-VII区下位面 粗砂細礫層、301~303:2006-II区 第3層系包含層、
304:2008-III区 30土坑、305:2008-III区下位面 粗砂細礫層

土器
図49に対応
旧石器
図50に対応



109:2006-II区 1落ち、110:2006-II区 第3層系包含層上部、111:2006-III区 第3層系、112:2006-II区 第3層系包含層下部、113・114・308・312～315:2006-II区 第3層系包含層、115・309:2006-III区 第3層系包含層下部、116:2006-III区 15土坑、117・316～318:2007-III区 1溝、306:2008-II区 第4層系踏み込み、307:2008-II区 包含層第4層、310:2006-II区 第2層系・第3層系包含層上部、311:2006-I区 51谷状落ち、319:2008-III区 1粘土探掘坑

図51に対応

藤並地区遺跡

－県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書－

発行年月日：2012年3月19日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター

和歌山県和歌山市湊571-1

印刷・製本：株式会社協和

和歌山県海南市赤坂5-3

